

夏目漱石『明暗』研究

教科教育専攻 国語教育専修

森岡 由美子

平成二十二年二月十五日提出

夏目漱石『明暗』研究

— お延を中心に —

目次

はじめに	研究の目的と方法	……………	三頁
第一章	『明暗』論の中のお延像	……………	五頁
第二章	「良妻賢母」とお延	……………	一八頁
第三章	「新しい女」とお延	……………	二九頁
第四章	お延の「技巧」と『明暗』の結末	……………	四七頁
おわりに	『明暗』—開かれゆく小説—	……………	六七頁

はじめに 研究の目的と方法

『明暗』は、大正五年五月二十六日から『東京朝日新聞』『大阪朝日新聞』に一八八回にわたって連載された漱石最後の小説である。漱石が胃潰瘍に倒れたため、未完の作品として我々に残された。

この小説は、津田由雄とお延の夫婦が主人公なのだが、漱石の小説で女性が主人公の位置に立ったのは、この作品が初めてである。長い間、「女性嫌悪」^二の状態にあった漱石は、あくまでも男性を主人公とし、その視点から女性を描いてきた。しかし、自伝的小説『道草』（大正四年）の中で、漱石の分身たる主人公「健三」だけでなく、その妻「お住」の内面をも描き、さらに高い視点から相方を批判する方法をとった漱石は、ついに『明暗』で、男性主人公の重さに匹敵する女性主人公を造形するにいたったのである。

しかし、当時の読者は、お延という女性が主人公であることを受け入れにくかったようである。大石泰三^三は、漱石が『明暗』を始め津田の視点から書き、次にお延の視点から書くようにしたことや、お延という女性の造形の仕方への疑問を漱石に書き送った。大石宛の返事で漱石は次のように書いている。

あなたはお延という女の技巧的な裏に何かの欠陥が潜んでいるやうに思つて読んでゐた。然るに、其お延が主人公の地位に立つて自由に自分の心理を説明し得るやうになつても、あなたの予期どおりのものが出来来ない。それであなたは私に向かつて、「君は何の為に主人公を変へたのか」と云ひたくなつたのではありませんか。

あなたの予期通り女主人公にもつと大袈裟な裏面や凄まじい欠陥を拵えて小説にする事は私も承知してゐました。然し私はわざとそれを回避したのです。何故といふと、さうすると所謂小説になつてしまつて私には（陳腐）で面白くなかつたからです。私はあなたの例にひかれるトルストイのやうにうまくそれをし遂げる事が出来なかつたかも知れませんが、私相應の力で、それを試みる丈の事なら、（もしトルストイ流でも構わないとさへ思へば）、遣れるだらう位には己惚れています。

（大石泰蔵宛書簡大正五年七月十九日より）

「お延が主人公の地位に立つて自由に自分の心理を説明し得るやうになつて」とあるこ

とから、漱石はお延を主人公の位置に立たせたことがわかる。また、お延は「大袈裟な裏面や凄まじい欠陥」を疑われる小説的女性ではなく、リアルな女性として主人公の座を占める人物であることが作者によって企図されていたことが明らかにされている。

このように「明暗」のお延は津田とともに主人公として登場し、この小説に欠かせない重要なキャラクターである。しかし、長い間『明暗』は所謂「則天去私神話」^三に縛られ、津田の精神が自然の女である清子によって救済される物語と読まれてきたため、お延は「我執の女」「悪の女」として切り捨てられ、詳しくその人間像を読むことがされてこなかった。

戦後、「我執」つまりエゴイズムが、必ずしも悪ではなく、むしろ人間存在の自然な姿であることが、広く社会の認識として定着していくに従って、「則天去私神話」は崩壊していく。昭和三十年代の江藤淳の論文^四を嚆矢として、お延の「近代文学のヒロイン」としての重要性が認識されていった。その後、内田道雄^五は、清子もまた、津田お延同様の生活の次元にいる女性であるという指摘を行って、清子聖女説を否定^六し、『明暗』における津田とお延の関係を重視した。その後、女性の視点から「お延」を解釈する論者や、提示されたテキストそのものを重視しようとする論者たちによって、お延に焦点を当てた『明暗』論も現れるようになった。

しかし、今まで論文に書かれてきた「お延」の姿は、その複雑な人間像を十分に汲み上げられているとは言えない。また、『明暗』の書かれた時代を十分に認識して「お延」が語られているとも言えない。

『明暗』の主題が夫婦の「愛」に関わっていることは明らかで、それだからこそ、現代でも『明暗』を読むことは意味を持つ。しかし、完全とは言えないにしろ愛によって成立する一夫一妻が実質化し、「愛」のない夫婦の離婚は理念的には当然とされ、夫の浮気が正当な離婚の理由になる現代人の意識でお延の愛の希求を読むと、その激しさに違和感を感じないわけにはいかない。それは、大正の始めという時代に「夫婦の愛」がどう捉えられていたか、当時の女性がどのように「愛」について考えていたかが、我々にはわかりにくくなってしまっているからであろう。

そこで、本論は、まず、過去にお延がどのように語られてきたかをひととおり見た上で、その当時の代表的な主婦像である「良妻賢母」と、女性という存在である前にひとりの個人たらしとして「良妻賢母」から逸脱した「新しい女」という、時代の特徴を示すふたつの女性像とお延を対照することによって、お延の複雑な人間像に迫りたい。そこに自ずか

ら『明暗』の書かれた時代の「夫婦の愛」も浮き彫りにされてくるであろう。また、「技巧」の女としてのお延が、津田の愛を求めて変化することから、未完に終わった『明暗』の結末についても考えていく。それによって、漱石の人間認識にもせまっていければと考える。

第一章 『明暗』論の中のお延像

一 否定から肯定へ

『明暗』のお延は、これまで数々の評者によって、その人物像が語られてきた。

最も早くには『明暗』を現代の「百鬼夜行図」と評した小宮豊隆^モが、お延を『明暗』の他の人物と同じように、エゴイズムを「抽出」された女とした。お延の愛は「自分の相手を排他的に独占しようとする愛」「私の愛」「相手を人間としてではなく、物として愛する愛」と書いた。また、岡崎義恵^ヘも、津田と同じくお延も「悪人」であり、「善人」たる清子に対比されているとした。これらの読みは「漱石は天に則って私を去るという『則天去私』の高いイデーに仕えるために『明暗』を書いた」「漱石が、人間の心の奥深く巣食っているエゴイズムを抽出して、人人に反省の機会を与へ、それによって自然な、自由な、朗らかな、道理のみが支配する世界へ、人々を連れ込もうとする」という小宮の解釈にそって『明暗』を読む姿勢に規定されたものだったといえよう。

しかし、このように否定されたお延の評価は、戦後の社会の変化とともに大きく変わった。その最も早いものは猪野謙二^ニによるもの^モである。彼は『明暗』の、「あらゆる自己変革への意欲と傾向とを絶ち、ひたすらに盲目的な『人間活力』に身をまかせ切った人間の群像」を評価し、「言語動作の奥に潜む私が―打算と技巧と支配欲と見栄と無神経と無反省と反感と毀傷と虚偽と我執とが、丹念に彫り出され、容赦なく答うたれるのである」^モという『明暗』に対する通説を疑った。

反転されたお延の評価は、江藤淳^チによってさらなる高みへと引き上げられた。江藤は登場人物、特に女性を詳細に分析し、お延・お秀・吉川夫人などの女たちが「従来の漱石のヒロインたちとは一変して、極めて生き生きと巧妙に描かれている」といい、彼女たちが近代小説に相応しい「強烈な個性」つまりは「我執」を持った人物として描かれ、「作者の『我執』に対する攻撃が熾烈を加えるのと正比例して、これらの女性に強い個性が刻み込まれて行く」と指摘する。また、江藤はお延やお秀が津田に劣らない「実に驚嘆すべ

き知力の持ち主」であるとし、お延の次のような特徴をあげる。

それに加えて、彼女にはあらゆる手段をつくして津田の愛を独占しようという鮮明な「個人的」意志がある。彼女の目的としているのは、家族制度にも日常性にもけがされない「絶対の愛」の獲得である。ここに見られるのは、明治以来今日まで、日本の女性が漠然と感じ続けてきた個人主義的人間関係への憧憬への具象化であって、あらゆる「目覚めた」女性はお延のような強烈な意志の所有者になろうとして来たといっても過言ではない。

つまりお延は新しい理想を持った新しい女なのである。彼女は、しかし、新しい女達の持っているどこかコッケイな魅力のなさは共有してはいない。漱石は、現実の彼の生活の周囲には容易に見当たらずのこのような女性を描くにあたって、相当の理想化を行っている。お延の原型を彼の旧作に求めれば、「虞美人草」の藤尾があるが、藤尾に示された作者の関心は人間的であるよりむしろ風俗的なもので、彼女は女であるより先に新しい女であった。しかしお延は新しい女であると同時に、いやそれ以上に女である。ぼくらは彼女の肌の輝きや化粧の匂いを感じることでできるのである。

「行人」のお直や「道草」のお住は、ある点でお延に似ているが、その日常的な面はむしろお秀にひきつがれている。彼女達は日常生活に埋没しながら、「我執」をもやす輪郭の不明な存在であって、お延のあの情熱的な意志を持っていないし、お秀の明快な知性を持っているとは思われない。要するにお延の魅力は、言葉の厳密な意味での *hierone* の魅力である。(中略) 漱石は執拗にここでも「愛」の不可能性―現実の日常生活の世界における不可能性を証明しているかに見える。しかし、このように積極的に愛情を生みださせようとしているお延の姿は、冷静に相手を打算している津田の姿より、はるかに魅力的である。不思議なことには、ここには漱石その人の横顔すら二重写しになっているかのようだ。彼自身も反対の側からではあるが、お延のように激しく絶対の愛を求め、焦慮する人であった。通説によれば、「技巧の女」お延の悪徳を糾弾していることになっている作者は、実は彼女の充分人間的な欲望のすみずみを描くことによって、自分のもっとも人間的な半面を露呈しているのである。

極言すれば、決して諦めることを知らずに、あらゆる障碍を乗り越えて「幸福」と自らの信ずるものを抱えようとするお延の颯爽たる姿には、一種の理想主義者の面影す

らある。このように vivid な人間的魅力をたたえた女性を描いた漱石が所謂則天去私のために、お延を敗北させて勸善懲惡を行い、先程指摘したような知的な会話を書く事の出来た作者が、知性を蔑視していたとすれば、それは深刻な皮肉であった。

江藤によって近代小説の「vivid」な「hieroine」という評価を与えられたお延は、小宮以来の「則天去私」神話に基づいた悪女としての語られ方から、肯定さるべき「人間的魅力」をたたえた女性へと変貌した。先にも述べたが、江藤がお延を高く評価する背景には「自我」を「我執」として、いわば悪ととらえ排除しようとする伝統的な見方から、「人間」としての本質」ととらえる社会思想の変化があると考ええる。『明暗』が世に出てからおよそ四十年の時を経てようやく、お延は即座に切り捨てられる「悪人」ではなく、「人間」として読み説かれる対象となったといっている。「あなた方お二人はご自分達の事より外に何にも考えていらつしやらない方だ」「自分達さえ可ければ、いくら人が困らうが迷惑しようが、まるで余所を向いて取り合わずにいられる方だといふだけなんです」というお秀の「断案」を、「自分の特色と認める上に、一般人間の特色とも認めて疑わなかった」（百九）という津田の認識、つまり作者漱石の冷徹な認識に、戦後の評者が漸く追いついたとも言えるだろう。

もちろん、あくまで、『明暗』を「則天去私」的に読もうとする評者はその後を絶たない。例えば清水茂⁽⁴³⁾のように、お延は、「自己本位の愛の世界すなわち自己愛の世界に求心的、能動的に固執することで安定を見出そうとしている、恐るべき、また憐れむべき、典型的な近代日本の小市民社会の閉鎖的な若妻」いうような読みを崩さないのだが。しかし、江藤以後の大方の研究においては、お延を悪と始めから切り捨てるのではなく、お延の「人間」をさまざまに読み取ろうとする姿勢が顕著になっていることは確かである。内田道雄⁽⁴⁴⁾は「明暗」の「今までにない相互関係に気を配った、丹念な人物配置は、この作品を漱石の社会観を具体化した一個のミクロコスモスたらしめようとする彼の周かな用意である。（中略）特殊な性格をもった人々の世界であるけれども、それを描くことは必ず普遍的な問題を展開する所以になると彼は考えた」とし、そのような世界の中心に位置するのが津田夫婦であるとした上で、次のように言う。

僕は『明暗』の主題は結局、夫婦間の愛、に帰すると考える。一個の家庭が、当事者の自覺的な愛によって築かれうるものかどうか。つまり夫は家庭における愛によつ

て自己を満たしうるか否か、妻はその愛によって夫を家庭につなぎとめうるか否か。

ここから内田は、利己的とされたお延の愛について、肯定的な論を展開する。

（お延が偶然手に入れた小切手を、タイミングよく夫に手渡す才覚は…森岡注）それは愚かな才覚であるにせよ、少なくとも、家の尊重に発想の基を置く立場への、夫婦愛による家庭の樹立をめざす立場からする攻撃の一矢ではあるのだ。これは家に対する夫婦愛の勝利（それは確かに姑息な一面的な勝利にすぎないけれども、）への一つの曙光である。である以上、お秀の浴びせるそれ以後の批判は、この夫婦のエゴへの正当な指摘を含みはするけれども、（お秀自体のよりすがっているのがやはり一種の家庭的エゴイズムであることが明らかであるだけに、）すでにこの夫婦に働きかける力は失っているのである。（中略）

そしてこの「百十二」においてお延に点じられた「復活の曙光」は、愛は可能の側に傾く判断を表徴している。その愛は、勿論天与の愛ではなく、人為的な努力の結果漸くもたらされる、日常生活の匂いに塗れた、意志的な愛である。しかしそれは貴重なものではないか。如何に小さくはかない、一面閉鎖的な利己的な愛だとしても、それは守らるべきものではないか。確かにそれは、天与の愛、聖愛の不可能という虚無感と表裏しているのであるけれども、少なくとも岡本家での、あの「涙」を流している（虚無を味わっている）お延にとっては、胸に強く抱くに値する愛の実なのである。

「夫婦愛による家庭の樹立をめざす立場」のお延の愛は、「一面閉鎖的な利己的な愛だとしても、それは守らるべきもの」なのである。

さらに、内田のお延への評価（むしろ同情と呼ぶべきか）は、彼が清子をお延と同様の「人間」ととらえたことによって強化されている。彼は、清子を「理想化するよりはお延と同様現実にはまみれた次元で漱石はとらえようとしている。そのことは、この作品におけるいわば各人物に公平な視点を清子に限って放擲する理由がないということからそういえるだけでなく、清子の存在を初めから予定していた漱石の用意した伏線が明確に物語っている」と言う。内田は、津田が「去年の春以来」小林病院（性病科を兼ねている）で出会った「二人の男」のうち、「妹婿」の堀ではない方の「男」を、清子の夫関と断定し、

「それぎりで後のなさそうな友人達と彼の間には、その後異常な結果が生まれた。其時の友達の言葉を今の友達の境遇とを連結して考えなければならなかった津田は、突然衝撃を受けた人のように、眼を開いて額から手を離れた」(十七)ということ、清子が流産の病後を温泉で養っているということを考え合わせて、それが夫の不品行の代償であったということを指摘している。したがって、内田は、「清子の生活の次元は津田やお延のそれと殆ど差異はない人間的なそれである。考えようによっては、彼らよりもっと深い、虚偽や欺瞞、専横や冒涇が巢食うような環境の中に清子は住んでいる」として清子聖女節を否定した。そして、「ただ津田に救いがあるとしたらそれは清子によってではなく、お延によってもたらされるしかないだろう。」と結論付けるのである。^{十四}

小泉浩一郎^{十五}の以下の『明暗』論は、以上のような内田の考えの延長線上にあると言える。

小林に象徴される底辺の「余裕」なき階層と岡本、吉川に象徴される「余裕」ある階層との関係、岡本―お延、藤井(父、お秀)―津田等の個人を規定する〈家〉又は〈血〉の関係、吉川(夫人)―津田という会社組織にまつわる上下の関係、それらあらゆる関係につながりつつ、本質的には〈個〉と〈個〉の関係としての津田―お延の夫婦関係等々、『明暗』の世界はまさに大正期ブルジョア社会のもろもろの關係の總和より成り立っている。ここに『明暗』を壮大な社会小説と規定して然るべき理由がある訳だが、それら〈関係〉の網の目の中心点、結び目として選ばれたのが、津田とお延という一対の夫婦であり、これら入り組んだ〈関係〉の世界の中で、もろもろの外的〈関係〉から、二人の愛という〈関係〉の世界が、果たして自立可能かどうか、その成否を問うところにこそ『明暗』一篇の主題並びにモチーフが存在したと私は思われるのである。

小泉は、『明暗』における愛の成否の課題、もしくは〈関係〉意識確立の課題が、「ひととお延によってのみ担われていることを無視することは許されない」と言う。さらに、小泉は、『明暗』中最も緊迫した対立は、「人を殺すため」の技巧をもった吉川夫人と「人を活かすため」の技巧^{十六}をもったお延の対立にあるとし、「そこにはブルジョア的社會組織の保証する『優者の特権』(百三十二)に驕り、愛という若い男女の死活の問題に善意の名のもとに隠微な形で介入し、『故なく他を損なふ』吉川夫人という存在に対する、

近代の〈個〉の立場に基づく、お延の、そして作者漱石の戦いのモチーフが示されている、とみられるのだ」と言う。^{〔七〕} お延はよく外部の関係から津田との愛の世界を守り、津田との間に真の〈関係〉を樹立し得るかだろうか。それを保証するのはお延における「夫のために出す勇氣」以外にありえない。「この形而下的擾乱の世界にあつては、吉川夫人の掌上に踊る津田との〈関係〉を回避した清子ではなく、吉川夫人と対立する勇氣を持ち、津田との愛に主体を賭けたお延のみが、ひとり津田の救済者たる資格を持ち得ているからである。」^{〔八〕} とも言う。

お延の津田への愛に理解を示し、彼女にこそ津田を救う可能性があるというこのようなお延評は現在でも力をもつお延の造形解釈であろう。お延への評価は、江藤が「新しい理想をもった新しい女」、近代小説のヒロインとしての魅力を語り、内田がお延の愛を「夫を家庭につなぎとめ」るための「守らるべき愛」とし、また、清子を「人間」の位置に引き下げたことによつて、相対的に引き上げられた。そして、小泉の次の言葉^{〔九〕} に表されるような高い評価を勝ち得ているのである。

近代的恋愛や近代的主体の限界を云々することは今日余りに容易いが、『明暗』作中で夫婦という〈関係〉確立のために苦闘し、行動するのは、お延唯一人であり、お延の行動のみが真に生産的なのである。近代の原理をその究極まで追求することによつて、近代の内部から近代を超える以外に脱出の道のないことを、漱石は誰よりも良く知っていたのであり、そのような作者の原理を最も良く体现し得ているところに、『明暗』におけるお延の像の決定的重要性があると言えるのである。

お延をどう読むか。以上にあげたのが、「則天去私」の理想によつて否定されたお延を一人の人間として正当に評価し、その重要性に至った大きな流れである。これは『明暗』の世界で、漱石が「則天去私」の方法で一人一人の人物を書いたように、人間を公平に読み取ろうという意識のもとに出てきた解釈の流れであるといえよう。

二 社会的な視座から

ところで、これらの他にまだ別の流れが存在する。それらは、『明暗』を読むときに社会的な視座を持ち込んで「人間」を読もうとする流れである。そこには大正初期という時代や、社会的性差（ジェンダー）としての「女性」や、「家庭」「家族」の視座が取り込

まれる。

この流れは一九七〇年代に始まっている。渡邊澄子^{三十五}は、津田とお延の結婚が、多くの評者のような「相愛による近代的結婚」であることに異議を唱えている。津田との結婚においてお延が「冒頭から結末に至る迄、彼女は何時でも彼女の主人公であった」とと、津田が「彼はついぞ今迄自分の行動について他から規制や牽制を受けた覚えがなかった。為る事はみんな自分の力の為、言ふ事は悉く自分の力で言つたに相違なかった」(二)という点で、二人が「自己の意志によって主体的に生きる近代人」であり、「このような近代人の二人が、他者の考えなどに左右されることなく、自己の意思で決めた結婚だから、この結婚は近代的結婚であるという三段論法の公式は、その後の二人の生き方を知ること否定されなければならない」とする。津田は清子への「思慕」を捨てられず、「吉川という実社会における権力の庇護を確かにすることにつながる、世俗的功利と結び付くことを自覚している」し、お延も一目で津田を愛したというが、「相手は誰でもよかった」ので「津田を結婚の対象に選んだ根底には、津田を成長株と見たからで、地位、財産、門地が最低必要条件であったので」あり、「彼女の信じ込んでいるのは真の愛ではない」と断じている。

渡邊は、津田とともにお延も吉川夫人も小林によって批判される「同族」であり、彼女たちに「津田を教育する資格など無い」と言う。そして、書かれなかった部分についてのお延について次のように語って、お延の可能性を否定する。

清子のお延に発覚し、夫婦間にかなり深刻な軋轢が生じると仮定すると、二人がうその上で表面的に妥協して融け合うわけにはいかず、「夫の愛が自分の存在上、如何に必要であらうとも、頭を下げて憐れみを乞うやうな見苦しい真似は出来ないという意地」(百五十)から「もし夫が自分の思ふ通り自分を愛さないならば、腕の力で自由にしてみせるといふ堅い決心」のお延は、彼女の予言した「勇氣」を出すことになるだろう。しかし、その「勇氣」も、お延が真の愛の姿を知らず腕力で自由にしてみせるなどと言っているかぎり、むしろ夫婦の心の間隔はかえって深くならざるをえないだろう。」

渡邊は、「社会主義者」小林の存在を重視し、彼だけが人間性を失った津田やお延を批判し、訴えて行くことのできる人物だとする。彼女は漱石が、森田草平とともに『反響』

を主催した馬場胡蝶の衆議院選挙への立候補を後援したことや、権力社会の本質を仮借のない筆でえぐり、批判したことで何度も下獄せざるを得なかった田岡嶺雲やその友人達と交わりを持っていたこと、また、社会主義思想に進んでいった啄木に好意的であったことなどを根拠に「社会主義者小林を登場させることで、権力や金力本位のゆがめられた社会、そこで必然的に起こる人間の不幸を追求することが、この作品の真のモチーフではなかったろうか、と私には考えられるのである」と言うのである。

渡邊は、評価されつつあったお延の「愛」を疑ったのである。

同じように社会・時代の眼を読み活かそうとする論者に、小森陽一や石原千秋がいる。

石原千秋は鼎談「ゆらぎの中の家族」^(二七)の中で次のように言っている。

「ここ数十年ぐらいでしょうか、平岡敏夫さんやいろいろな方が、「漱石と家」あるいは「漱石と家族」というようなテーマを研究のパラダイムに浮上させてきました。

(略) 平岡さんのアプローチは基本的に漱石の問題として捉えようとしていたのではないでしょうか。だから、「家」とか「家庭」がテーマの中心です。ただ、もう少し最近になってきますと漱石の文学テキスト自体が「家族」という場を中心的なテーマとしているという考えが浮上してきた。実際問題としても、漱石が小説の舞台としていた明治の四十年代から大正の初めは、日本の近代化の中で「家族」が変わっていく時代でした。

それまでは「家」というハードな枠組みを作っていくことに国家の戦略が集中していたわけですが、明治の後半から大正にかけて、いわゆる都市化現象であるとか大衆化現象というようなものが日本の近代化の中で進行してくる。この時代になるとキー・ワードは「家庭」と「趣味」へと変わってきます。「趣味」を味わう場としての文化的な「家庭」像は、良妻賢母主義や〈嚴父〉が、都市生活者に向けて姿を変えた、ソフトなイデオロギー装置だったと言っている。

石原の言うように、「家」「家庭」を時代の中で捉え、漱石の作品を読み解こうとする試みは一九八〇年代に始まり、今に続いている。石原自身^(二七)は、お延について次のように言っている。

お延は、岡本の家で過ごした日々の自己のアイデンティティを守り通すために、津

田との間を取り繕おうとしているふしさ見える。しかし、他ならぬそのために、彼女は結婚するや否や、津田に合わせて自分を改めなければならなかったのだ。お延のしていることは、他者に結ぶ自己の像を統一的に保つために、津田との関係に置いては自己を徹底的に改造するという二律背反なのである。お延にとっては家庭とは其の境界を越えれば何かが変容させられてしまう場だったのだ。

繰り返すが、お延のアイデンティティは津田との家庭にはない。しかし、自分から積極的に津田のとの結婚を望んだお延には、自己のアイデンティティのために津田の〈愛〉が是非とも必要であった。

石原は「お延は、津田を愛するが故に引き裂かれている」とし、「津田の〈愛〉を手にしたときのみ本当の統一的な自己を得ることが出来る」と言う。さらに石原は、お延が求めているのは、津田への愛ではなく、「津田の愛」であり、当時一般的に言われていた、女性特有の受け身の〈愛〉ではなく、「彼女のアイデンティティそのものの〈愛〉」であるという意味で、お延が、「恋愛、結婚、性が一体化したロマンティック・ラブ・イデオロギーをいち早く生きようとした女」「〈愛〉」によつて〈家〉から家庭を自立させようとする「新しい」主婦の形だった」とする。⁽¹¹⁴⁾

小森陽一⁽¹¹⁵⁾は、『明暗』の書かれた時代について更に踏み込んでいる。

日露戦争後の、新たな「良妻賢母主義」思想の強化の中で、女性たちの性には「産む性」、日露戦争で死んだ兵士たちを補い、かつより強力な国民軍を作るために、健康で知的にも優れた国民予備軍としての子供を産みかつ育てる「性」、「母性」の役割がふりあてられていった。一方で国家の軍隊と密接不可分に結びついた公娼制度を中心とした「男に享楽を与える性」との間に引き裂かれていたことは、多くの女性史が明らかにしているところであり、「再婚」が社会問題化したのは、日露戦争の「戦争未亡人問題」を中心にしてのことであった。つまり、公娼制度を軸とした買売春と、専業主婦の再生産労働が、男性中心主義的な経済システムと同時に国家システムにおいても、不可欠な女性の性的分業として構造化されたのが、『明暗』の時代であったのだ。

そして、『青鞥』に現れた貞操・墮胎・廃娼の三つの論争⁽¹¹⁶⁾を引きながら、女性の置

かれた状況を語り、お延がお秀に向かって「一体一人の男が、一人以上の女を同時に愛する事が出来るものでしょうか」（一二八）と聞いた言葉は、「男の貞操を問題化」してしまったことになり、「しかも、お延の発した問いは、一人の男が、一人以上の女を同時に愛する事は出来ない」と主張してしまっている」と言う。しかし、所謂貞操論における伊藤野枝の現実認識「現在結婚しつつある、又、した、これからしやうとする男子のうちに真に結婚するまで純潔を保っている人が幾人あるかということを考へて見ると私はそれにくらべて女子のしおらしさを思うと腹立たしくなる、彼らにはさう婦人の貞操を云々といえる資格のある人はない筈である」（「貞操についての雑感」『青鞥』大正三年二月）、とのかかわりで言えば「お延は不可能性に向かう問いを發してしまったことになる」とするのである。

お秀との論争で敗北したお延は「実例」を示すしなくなる。小森は、これが『明暗』という小説において、「お延という女主人公が担わされた、過酷とも言える自己証明の課題だったのである」と言う。

お秀も清子も夫が「生活の維持者もしくは保護者」であり、彼等が財力と社会的地位を持っているがゆえに、「醜惡」かつ「罪惡」であるような「形式的結婚」から離脱することはない。しかし、お延は自分の夫である津田に「男子の貞操」を要求してしまった。お延は津田が「生活の維持者もしくは保護者」でなくてもいい、「財力と社会的地位」など持たなくてもいい、それでも「絶対に愛」してほしい、ということをつきつけるしかないのだ。「近代の産業資本主義社会における「結婚」、男である「夫」の経済的收入を「生活の保証とするような在り方は、自らの「性」、それが「母性」であれ、「享樂を与える性」であれ、「性」を売る行為である以上、「淫売」とかわりはないのである。

したがって「お延が経済的に自立した職業婦人にならない限り「夫」である津田の「人格」を問うことも、そして男の「貞操」を要求することも原理的には出来ないのである。『明暗』という小説において、お延という女性主人公に担わされた課題の過酷さは、まさにこの点にある。

小森はお延の「自己証明」としての「愛」の課題の不可能性を言うのである。

石原（前述）は「こうした読みは（読者）である我々が近代というイデオロギーに自覚

的になることで、テキストの無意識を言説化した時にはじめて可能になるものなのである。」と述べているが、石原や小森の読みは、日本における「近代」という時代のイデオロギーを現代から見つめ直し、それを小説に反映させようとする試みともいえよう。

さらに、飯田佑子^(三十三)は、お延が、石原(前述)の言ったような「恋愛、結婚、性が一体化したロマンティック・ラブ・イデオロギーをいち早く生きようとした女」「〈愛〉によって〈家〉から家庭を自立させようとする『新しい』主婦の形』であるという考えに賛成しながらも、渡邊も提示したお延の「愛」への疑いをあらわにしている。

「知恵と徳とを殆ど同じやうに考へ」「女として男に対する腕を有つてゐないと自白するのは、人間でありながら人間の用をなさないと自白する位の屈辱として、お延の自尊心を傷付けた」ともある。この自尊心は、お延の「愛」を、津田のみならぬ他人の評価に結び付ける。お延は「他人の前に、何一つ不足のない夫を持った妻としての自分を示さなければならぬ」とのみ考えている。」(六十一)わけで、お延にとって、愛されている事は、妻としての評価に関わる問題として捉えられている。こうした自己評価のために必要とされる「愛」は、「愛」というのだろうか。お延にとって重要なのは「対面」(百四十八)なのか、「愛」なのか。自分が何を望んでいるのか、それ自体についてお延が考え始める兆しは、残されている『明暗』には見られない。(略) お延は「愛」について集中しているという特徴を持つだけでなく、その語る「愛」が「愛」ではないというテキストによって、否定されていく特徴を持っている。(略)

お延は自分が津田を本当に「愛」しているのかという問いを抱かない。「良人といふものはただ妻の情合を吸い込むためにのみ存在する海綿に過ぎないのではないのだろうか」(四十七)というのは、「現在の夫に満足していなかった」(六十)からであり、不満がある。そしてこの不満は「愛する人が自分から離れて行かうとする毫厘の変化、もしくは前から離れてゐたのだという悲しい事実を、今になつて、そろそろ認め始めたといふ心持の変化」(八十三)となっていく。しかしお延は「自分は津田を理解していたのだろうか」と問いなおしても「自分に対しての問い直し」つまり、「現在の自分はその人を愛しているのだろうか」と問うことはなく、自分の愛の一点を譲らない。愛していた津田の人柄という愛の根拠が失われたのに、それでも自分は津田を愛していると信じて疑わないのである。

早川紀代^(三十七)によれば、理想の家庭や結婚について述べる相談に「愛」が噴出し、「愛のある夫婦」「愛のある家庭」が青年男女の理想であったことは確かであるという。飯田は、大正という時代に特徴的な「愛」という言葉の流行、「こうした時代の文脈を考えれば、根拠も定義も不明な「愛」という言葉を振りまわすことは、決して珍しいことではないのかもしれない」との理解を示しながらも、なお「愛」についての「語り手の示し方には整合性がない」と言う。お秀とお延の対決の場では、「まるでお延と津田の間に『愛』があったように語る」けれども、「清子やお秀の問題としては語りこまれている性の問題が、お延の周辺では語られない」「愛の対立項としての性が語られない」ことで「お延の愛の定義がはっきりしない」のであると。『愛』の中味の焦点を絞ろうとしても絞り切れない。奥行の見えない空白がしつらえられている」のが『明暗』なのだという飯田の指摘は、お延の愛への疑いを明確にしたものとして興味深い。

池上玲子^(三十八)も、お延の可能性を否定する。

池上は、妻が夫に積極的に語りかけたり、行動したりすることで、お延を「近代的女性」とし、その可能性を評価する「これらお延肯定論」には、「夫と対等な位置から妻が声を発することができれば平等であり、主体的に行動すれば解放であるといったナイーブな近代主義が貫かれている」と批判する。池上はお延を「資本の論理」（世間に流通し、「物質上相当の報酬」によって表示される交換価値を持つこと）を内在化している女と規定し、彼女が「第二の天性」である「腕」（相手の気合を呑み込んで、自分の行動を運ぶこと）によって、相手と自分の双方を満足させる手腕）によって、効果的に自らの商品価値を高く流通させることに腐心しているとする。それゆえに、お延は、自分の「親切」に報酬としての夫の愛が返されないこと批判する。そして、もうひとつの第一の天性と呼ぶべき「見る力」の効力が失われたと知るや、お延は『新しい女』的な、非現実的で自己目的化した愛「誰でも構はないのよ。ただ自分で斯うと思ひ込んだ人を愛するのよ。さうして是非その人に自分を愛させるのよ」「誰だつてそうよ。たとひ今その人が幸福でないにした所で、其人の料簡一つで、未来は幸福になれるのよ。屹度なれるのよ。屹度なつて見るのよ。ねえ継子さん、さうでせう」（七十二）と叫び、更に京都の父母へ幸福なふたりの様子を書いた手紙をしたためて理想へ向かう決意をするという。池上は、理想を追うお延が「現実には盲いて」、「自分のため」ではなく「夫のための勇氣」を出すという予言を行う過程を、「愛について主体化した」お延が「主体的にシステムに従属していく女と

なった」と見る。

「グロテスクなのは『貴方のため』が『犠牲』ではなく、自分の自由意思で選択した『自分のため』のものとしてお延に生きられていることである」「『明暗』の可能性は、女性が主体的であることがいかにシステムを補完する主体への〈隷属化〉と密接に結び合わせられているかを暴露している点にある」「『明暗』は、自己の眼が気づく津田のとの結婚生活での個々のノイズを封印し、自己の意志によって自己を夫に従属する主体へと教育していく物語なのである」と語る池上は、戦後の論者達が擲い上げて見せたお延の「可能性」を否定して見せたのである。

七〇年代から起ったフェミニズム批評や、八〇年代に力を持っていたテキスト論、読者論などの影響を受けた論者たちは、女性としてのお延に注目し、彼女の人間像を掘り下げるとともに、『明暗』の「家庭」や、それに関わる国家、時代にも視野を拡げて論じている。その中で、一途に愛を求めていると同情的に語られたお延の「愛」は疑われ、お延の「可能性」は否定されてもいる。

特に昭和六十一年から六十三年にかけて石原千秋・小森陽一・秦晋平と三好行雄との間になされたいわゆる「『こころ』論争」^(三十九)を経て、漱石文学へのアプローチは更なる多様性を獲得したといえよう。

石原、小森の立場は、テキスト論、読者論を下敷きとして、それまでゆるぎなかった作品の所有者としての作者の地位に揺さぶりをかけたといえる。彼らの「作者に遡及せず、あくまでもテキストに導かれた形で、自らの選んだイデオロギーをテキストに介入させることで意味を生成する、その際にテキストを作者の意図したものから変形させることも可能である、という立場」^(四十)には、「従来から支配的であった、作品の持つ一貫した個性というもの―そこに作者の精神を映し出す―を重視する立場からの反論がなされ、日本近代文学研究の方法論的な揺らぎが生まれた」(同上)のである。

石原や小森が行った新しい方法は、作者からテキストを切り離し、読者の持つさまざまな個別な問題意識やイデオロギーを作品に投影しながら作品を読むことを可能にした。したがって、『明暗』のお延の人間像が昭和から平成にかけて新たに変遷してきたのは、お延を「近代文学のヒロイン」や「津田を更生させる可能性をもった女」というような大まかなくくりでとらえるのではなく、ひとりの人間としての様々な個性が、さまざまな評者の持つさまざまな問題意識やイデオロギーによって、個々にあぶりだされることになったからだと考えられるのである。

しかし、このような方法は、始めから読み手の方に、ある枠組みがあり、作品をその枠組みに押し込める形で読み進めてしまうという弊を起しやすい。現に、このような方法論で書かれた論文の中のお延像は、その全体像があますことなく批評されているとはいえず、彼女のある「部分」、あるいはその特徴が拡大されて語られているため、わかりやすい人間像が提示される一方、お延は単純化され、全体像がぼやけてしまっているように思える。

お延の立ち位置を縛ることが、果たしてお延を正しく解釈したことになるのだろうか。内田や小泉はお延を、近代的な自我をもち行動するが故に、愛の実現のための可能性をもつ女性と位置づけ、逆に、池田は主体的なるがゆえにその可能性を自ら放棄してシステムに従属する女性と規定する。『明暗』のお延は、全く両極端に解釈されながら、それらの解釈によって型にはめられているのではないか。

お延はどのように単純化して位置づけられるような女性なのだろうか。お延は大正期の中産階級の専業主婦という平凡な位置にある女性であり、その意図するところは津田との夫婦愛の実現である。一見変った所のない女性に見えるその立ち位置だが、彼女の人間としての性格は決して単純ではなく、むしろ読者に違和感を感じさせるほど複雑に造形されているように思う。また、あまり指摘されないようではあるが、物語が進むにつれてお延自身が変化していくため、「こういう女」であると一口には語りにくい性格を持っているのである。

そこで次からは、時代によって求められ、女性の側でもそうあろうとした「良妻賢母」と、個人たろうとして「良妻賢母」を逸脱した「新しい女」という当時を代表する女性像から、お延という女性を照射し、その複雑性について考えて行きたいと考える。

第二章 「良妻賢母」とお延

一 お延への疑問

小森は、お延のアイデンティティがこの「家」にないことを指摘し、お延が明治期に展開されてきた「良妻賢母」像から逸脱し、入院中の津田のことは考えず、人力車に乗って芝居などに行ってしまう、夫と妻の関係で妻の果たさなければならない役割を限りなく逸脱していると述べる。

果たしてお延は「良妻賢母」像から逸脱しているのだろうか。高橋麻衣子も^(三十一)、お

秀や吉川夫人ら完璧な良妻賢母にそまってしまった女性陣が、お延をいわゆる「良妻賢母」として、「近代家族」の枠組みに回収しようとするが、「お延にとってそんな主婦像は真つ平御免なはずである」という。

もちろんお延自身、自分の力量と技巧を使って夫を支えるよき妻になりたいのは確かである。然しながらお延にとって、「女らしいところがなくなってしまったのに、まだ女としてこの世に生存するのは、真に恐ろしい生存であるとしたか」考えられないのである。お延の叔母、そして、津田の叔母もまた、「膏氣が抜け」たかのように性の感じがしない。なぜなら当時「良妻賢母」には「女」は必要なかった。結婚したら、「女」は「主婦」になるのだから、「女」というセックスは必要ないのである。男は家庭を持っても「男」であることに代わりがない。しかし、「男」は一生「男」であり続けるのに「女」はいったん、「家庭」というカテゴリーの範疇に収まるともう「女」ではなくなってしまうのだ。だからこそお秀は夫である堀が外へ「女遊び」に出かけようと、もうすでに自分は母になってしまっているのだからと、運命のように受け入れているのである。

岡本で培った「自我」を持つお延はたとえ「家庭」をつくっても「女」というセックスをもち、自我を持ち続けることを訴えたいのだ。しかしそれは「近代日本家族」のタブーであり、吉川夫人やお秀にしてみれば、まだまだ「家族」に納まりきっていないとしか見えないのだろう。そこにはまさにお延の「理想家庭」像と、吉川夫人とお秀の「理想家庭（近代日本家族）」像との溝が出来てしまっているのだ。

高橋の指摘は、お延が性を伴った妻でありたいという願望を持つという独自の指摘として評価できる。しかし、高橋の「当時『良妻賢母』には『女』は必要なかった。結婚したら、『女』は『主婦』になるのだから、『女』というセックスは必要ないのである」という認識は『明暗』が書かれたころの「良妻賢母」を正しく捉えた発言とは言い難い。

実は、『明暗』の時代には、妻が家庭を慰安のある場所にして、夫の不品行を抑えるべきであるという言説が氾濫していた。家庭に入り子をなせば母であり女でなくてもいいという高橋の指摘は当時の言説を無視した一面的な指摘と言えよう。むしろ、より健康で知的な国民を生産すべく、良妻賢母には、かつてないセクシャリティが要求されはじめていたのだ。

ひとことで「良妻賢母」といっても求められる内実が決して一様でないことは、明治から大正にかけての「良妻賢母主義の教育者」とよばれた学者や女子教育家たちの言論をみても明らかだ。「良妻賢母」が近代国家の要請において成立した以上、近代国家の変質によつて時代とともに変化するのは当然であろう。

時代の要請でもあり、多くの女性がその枠の中で自己の生活を精一杯生きていた「良妻賢母」。小森にしても、高橋にしても、お延を良妻賢母の視座から相対化し、彼女の人間像を明確にする試みが評価できる。しかし、これらの論は「良妻賢母」の表す概念を一樣にとらえて語ってしまったている。

したがって、ここではまず、明治から大正にかけて世の中の変化に伴って変わっていった「良妻賢母」を捉えなおす中で、『明暗』が書かれた時代に要求された「良妻賢母」とは何だったのかを確認し、その視点からお延という女性を見直して行きたい。

二 「良妻賢母」

「良妻賢母」という言葉がジャーナリズムを賑わせるのは、女学校令が公布された明治三十二年頃からである。「女子にも高等教育を」と、女学校ができることになったとき、その教育方針は「良妻賢母育成」であった。「賢母良妻」育成をうたつて女学校を成立させた樺山資紀を継いで文部大臣になった菊池大麓は、樺山の論を発展させて「女学校は良妻賢母主義で」と語っている。彼は明治三十五年五月一日、「高等女学校校長会議での演説」^(三十一)において、女子教育の必要性を主張し、ここで彼が述べた「良妻賢母」養成の方針は代々の文部大臣に引きつがれていくことになる。もちろんお延もお秀も女学校出の女性で、当然良妻賢母養成の教育を受けて来たのである。

深谷昌志^(三十二) がまとめた菊池大麓の演説の要旨を見てみよう。

女子の生涯は国によって異なり、「日本では此の婦女子といふものは、将来結婚して妻になり母になるものであると云ふことは女子の当然の成り行きであると云ふ様に決まつてゐるのであります」。しかし、だからといって、男子の地位が高く、女子の地位が低いというのではない。「男女は相互に相補助すべき者で、男子には其本分があり、女子には女子の本分があるから、各自区別を立てて互いに自身の本分を守るやうに行きたいと思う」。この本分を混同して女子が男子の領域に進むことは、「男子の女らしいのは好ましくない」と同じように、決して望ましいことではない。そ

して「善良なる家庭の多い邦は栄へ、不良なる家庭の多い国は衰ふ。即ち家庭は一国の根本である」ことを考えれば、女子が家を守ることの重要性は、男子の社会的な仕事に劣るものではない。その意味で、「男女同権」といふ説は嫌いだが、「男女同等」には賛成である。そして「一家の主婦となつて良妻賢母たることが、即ち女子の天職である」以上、「女子教育は主として此の天職を充たす為に必要な教育を授くべきものである」。このために、高等女学校を作り、よい家庭人を育成する必要がある。

このように初期の「良妻賢母」は、「よい家庭人」として、その働きが家庭内にとどまることを企図されていた。家庭を守ることによって、結果的に国家に貢献するという考え方であった。

では、「良妻賢母」とは具体的にどのような女性を言うのか。ここでは、女子教育家として有力であった下田歌子^(三十四)の言説によって確認してみよう。

下田は、『良妻と賢母』(明治四十五年)^(三十五)において、「良妻なるものの解釈」として、次のように述べている。

所謂良妻なるものは、いかなる行を為して、而して其名に背かざるを得るかと云はば云ふ迄も無く其夫の唱ふところに順つて、善く其家庭を理め整え、又善く貞淑の徳を全うして、他の侮りを受くること無く、夫をして豪も内顧の憂なからしむるやうにあるべきである。

下田によれば「良妻」とは、夫に「従順」でよく家庭を治め、「貞淑」である女性である。

更に下田は、妻の分担すべきこととして、「衣食住の事」、具体的には「衣服の監理」、「飲食物の監理」、「住居の監理」をあげ、それに付け加えて、「家事経済の監理」、「家人の監督即ち老人の保護、子女の教養、奴婢の取り扱い」や「親戚、朋友其他の交際」はをあげている。下田の言う「良妻」は、良妻たるものの基本線を示しているといえよう。しかし、下田はまた、「現代の良妻」として、次のようにも主張しているのだ。

然るに今は既に一夫一婦の家庭を以て、正当のものと認めらるに至つては、もしも夫が、一家の裡に数妾を蓄ふることになつても、妻は決してこれを諫めもせず止め

もせず、ただ従順にこれ勉めて居たならば、世間の人は何と評するであらう。憫然な婦人である。兎も角も感心な女子であるとは言はう。今ひとつ進んで貞女となると褒むる人もあらうが、良妻と称する声は恐らくは聞かれぬであらう。然らばすなはち、現世の良妻なる人は夫をして数妾を蓄へしむるが如き、不品行に陥らしめず、一夫一婦の清き家庭に高尚の樂しみを味わつて、それに満足するやうにしむけ、所謂女子が天賦の勢化によつて、和氣其堂に満つを云はしむるやうでなければならぬまい。それは従来のだただ従順をのみ守つて居たものよりも、一層の働きを要するのである。

さてこれから段々国の位置も高まつて往かうと云う将来に於ける、所謂良妻なるものは單に従来の如く衣食住の取り扱いを為すのみでは済むまい。同じ老幼の監理と云つた所が、弱者の身体に注意せうとするには衛生生理の大体も、看護法の一互りも、心得ねばならず、子女の教養も亦、其体育より始めて育徳育の方針を過らしめまいとするには、又これ決して容易でない。況やその夫の監理は、妻の責務なりとの語を嘉納せらるるに至つては、最早、夫の不品行を默許するは、妻の無氣力無勢化をあらはすにて、却つて夫の為に、不忠実なるものを云はるであらう。左様かと云つて、これを極端に思ひ過つて、夫に異思ある時は、無暗に口喧く云つて宜いもののやうに考へ違ひなどをすれば、それこそ常に家庭には風波が絶えず、殊に負けじ魂なる男子は、燃ゆる火に、少量の水を濺ぐと同じこと、彌々其乱行の火の手を強くするまでであらう。故にいかなる世執れの所に在ても、女子は猶、忍耐力己の徳を養成して、柔よく剛を制する覺悟が無ければならぬ。斯くても、多数の女子の実力が進んだ暁には、みながみな儘く賢婦良妻たらずとも、亦其夫がすべて徳義に服従する善良の人ならずとも、社会の制裁によつて、自づから男子の我儘を制裁することも出来るやうになるであらう。

夫を「不品行に陥らしめず、一夫一婦の清き家庭に高尚の樂しみを味わつて、それに満足するやうに」しむける「夫の監理」が、期待される「現代の良妻」の役目であり、それは、「従来のだただ従順をのみ守つて居たものよりも、一層の働きを要する」というのである。

明治末から大正にかけて、良妻の役割として、メディアに頻繁に登場するようになったのは、夫の「品行の監理」であった。そして、女子にばかり貞操を押し付けていた時代から、ジャーナリズムの大勢が「男女ともに貞操が必要だ」という論調に変わったのが大正

初期である。

しかし、それでもなお結婚男子の不品行は「妻の不行届き」であり、妻は「忍耐克己の徳を養成して、柔よく剛を制する覚悟」で夫に臨まねばならず、正面から夫に訴えるような事はしてはならないこととされた。

「夫の監理」が良妻の役目で、不品行は正すべきだが、そのやり方はあくまでも「忍耐強く女らしく」というのが、当時の一般論であつたのだ。^(三十七)

ところで、「良妻賢母」はさらなる変容を遂げている。

下田が大正になって書いた「日新日々新」^(三十七)を読むと、先の『良妻賢母』とは論調が大きく変化していて驚かされる。そこには、「良妻賢母」を説く前にまず国家があり、「良妻賢母」は国家に貢献しなければならぬことが明記されるようになっていく。そして、この傾向は、下田の意見が収録された『結婚前後の修養』の他の著者にも見られる。わずか数年の間に、良妻賢母の働きは、一家を支えることによって間接的に国家への貢献を行うものから、より直接的に国家を意識したものに变化しているのである。

下田は次のように言う。

言ふ迄もなく国家の本は家庭に在ります。家庭に於て能く経済を計り能く子を育て能く善事を行ふ事は取りもなおさず、国利民福の本となるのであります。国家の外郭を拡張することも大切であります。個人として忠実勤儉孝悌慈善信義礼節忍耐等の諸徳を具ふることは、全く母の感化によること多いではありませんか。又国家の大問題たる経済のことも日常個々の家庭が真に経済的になつて、時間と物品とを無益に遣はず、余裕のあるやうにして行つたならば、自然に国家が富むではありませんか。されば此際西洋の一部突飛婦人のやうな空騒ぎ、又は近来我国に於ける覚めた女とか云ふやうなことは大禁物でありますが、さりとて昔の婦人のやうなことで満足せず、どうしてもある地点までは知識を勧めて行き、内容の充実と云ふことに大いに力を注がねばなりませんまい。又婦人は主として家庭に勤務を有するとして、世の中の外郭の事も大体は心得て居つて、万事を行わねばなりません。

妻には「勤儉と儉約」が大切であるという主張は古くからあるが、棚橋、跡見、三輪田、下田、嘉悦がそろつて「儉約」を強調するには当時の国家の状況が色濃く反映されている。明治三十八年、日本は日露戦争に勝利し、国際的な「地位」を高めたが、その戦費は多

く外国からの借金で補われていた。国家への女子の貢献の必要性が説かれるようになるのは、日露戦争後のことである。小山静子^{三十九}は、女子の国家への貢献が言われるのは第一次大戦後であると述べるが、日露戦争前後に、すでにそのような論調があった。^(三十九)この戦争は弱小の後進国日本が、大國ロシアに勝ったということで、国民の愛国心を高揚させたが、勝利の陰には膨大な借金（外国債・国債）と増税という悲惨があった。また、戦争で大勢の兵士たちが亡くなったことから労働力の不足を招いた。このような状況において、国家は女子の力を必要としたのである。国富につながる節儉、経済や、限定的ではあったが社会参加（事業活動や内職、就職）、また健康で知力に優れた国民を生み育てることなどが、良妻賢母に要求され始めたのである。しかし、このような論調が大勢をしめるようになったのが、第一次大戦以降であったことは事実である。小山もいうように、欧州にとっては総力戦であったこの戦争での女子の目覚ましい働きをみた日本人は、日本の女子にも、より一層の国家貢献を求めたのである。

このように、いちがいに「良妻賢母」といつても時代とともに古い「良妻賢母」から新しい「良妻賢母」へと変容している。まとめていえば、はじめ「良妻賢母」は家庭内で夫に従順で貞淑温和であり、家事万端にぬかりなく努めるものを指し、やがてはそこに「夫の品行の監理」が加わり、さらにより明確な国家への貢献の視野に立った「経済・職業」と「子育て」（より優秀な子供を産み育てること）が重視されるものとなってきたのである。

三 「良妻」たるお延

では、これらの点から具体的に見て、お延は「良妻」なのだろうか。それともそこから逸脱しているのだろうか。

『明暗』を詳細に読むと、お延は「良妻」を内在化させている女性であることがわかる。また、愛のために良妻たらんと努力している点も多々見受けられる。「あなた次第よ。あなたが行けとおっしゃれば行くし、止せとおっしゃれば止すわ」「いつでも柔順だわ。」（四十四）というお延は、少なくとも夫に「従順」であろうと努力している。また、お延は、岡本で身に付けた「第二の天性」たる「悪口」を改めた自分を物足らなく感じる一方で、「夫を欺いているような気がしてならなかった」（六十一）というように、夫への申し訳なさを感じる女性である。お延は、劇場から遅く帰った悩乱の翌日、「上着と下着と長襦袢と重なり合って、すぼりと脱ぎ捨てられたまま」にしてあったことについて、次のよう

に感じている。

彼女は此の乱雑な有様を、聊か呆れた眼で眺めた。これがかねてから、几帳面を女徳の一つと心掛けてきた自分の所作かと思ふと、少し浅間しいやうな心持ちにもなった。津田に嫁いで以後、かつてこんな不体裁を夫に見せた覚えのない彼女は、其夫が今自分と同じ室の中に寝ていないのを見て、ほつと一息した。

だらしないのは着物の事ばかりでなかった。もし夫が入院しないで、例もの通り宅にいたならば、たとい何んなに夜更しをしようとも、斯う遅く迄、気を許して寝てゐる筈がないと思つた彼女は、眼が覚めると共に跳ね起きなかつた自分を、何うしても怠けものとして軽蔑しない訳に行かなかつた。(五十八)

お延は「几帳面を女徳の一つと心掛けてきた」のであり、着物をたたまずに寝たり、寝坊したりすることは「不体裁」で「夫にすまない」と感じている。ここに見られるのも明らかに「良妻」の心理であろう。

一方、より具体的な「衣食住の事」はどうであろうか。

当時、衣食住で最も重視されていたのは、「衣」である。家族の衣服の調整は主婦として最大の仕事であつた。都市部でも、縫製は家庭ですることが多かつた。お延やお秀が通つた女学校では週に四時間「裁縫」の時間があり、その数は国語六時間に次ぐ。(ちなみに家事は第三・四学年で各二時間であつた。)ここからも、「衣」の分野が重視されていたことがわかる。(四七)

その点お延は良妻であつたと言えるだろう。お延は縫物が得意である。「病院へ入る時の用心に」「黒八丈の襟のかかつた荒い縦縞の襦袢」を津田に気づかれないように「二、三日」のうちに拵えて見せる手際の上さである。おそらく、津田が帰つても気づかなかつた日は、襦袢づくりの疲れのためにうっかり寝てしまつたのであろう。

食・住についても次の通りである。

津田の明る朝眼を覚ましたのは何時もよりずつと遅かつた。家の中はもう一片付きかたづいた後のやうにひっそり閑としてゐた。座敷から玄関を通つて茶の間の障子を開けた彼は、其所の火鉢の傍にきちんと坐つて新聞を手にしている細君を見た。穏やかな家庭を代表するやうな音を立て、鉄瓶が鳴つてゐた。(略)

顔を洗つて又茶の間へ戻つた時、彼は何気なく例の黒塗りの膳に向つた。其膳は彼の着席を待ち受けたといふよりも、寧ろ待ち草臥れたといった方が適切であつた。

(十九)

茶の間は何時もの通りきちんと片付いてゐた、鉄瓶が約束通り鳴つていた。長火鉢の前には、例によつて厚いメリンスの座蒲団が、彼の帰りを待ち受ける如くに敷かれてあつた。(三十八)

「長火鉢」に「鉄瓶が約束通り鳴つていた」という描写は何気ない家庭内の描写に見えるが、漱石の作品においては特別なコードをもつ描写である。火鉢の火は、家庭の人情の温かさや、通じ合う人間の象徴である。^(四十二)「長火鉢」に「鉄瓶」を「約束通り」鳴らしているお延は、津田への愛を持った「良妻」ということができよう。

同様に「奴婢の取り扱い」や「親戚、朋友其他の交際」についてもお延は一通りの義務をきちんとこなしていると言える。

また、夫への気配りは相当なもので、津田に「やれ髪を彼の湯に行けのつて、叔母さんより余つ程八釜しい事を云ひますよ」(三十二)と言われるくらいだし、病院へ持つて行くものはお延がちゃんと手提鞆と小さな風呂敷包みにまとめてあつた。夫が日常生活を快適に送れる様に彼女は相当に気を遣っている。「自分の朝晩尽くしている親切は、随分精一杯な積でいる」(四十七)という通りである。もちろん夫の職業への同情もあり、上司の妻である吉川には「嫌われている」という自覚を持ちながらも「平生から一方ならぬ恩顧を受けてゐる勢力家の細君として、今其人の前に能う限りの愛嬌と礼儀を示さなければならなかつた」(五十一)と覚悟している。

このように見ていくと、お延は充分に「良妻」であり、伝統的な良妻の基本線をしっかりと押さえているといえる。

「夫の監理」という点ではどうか。いくつかの『明暗』論の中では、主人公津田の妹であるお秀は、家族制度の中の古い良妻賢母、妻のお延は、大正期の新しい愛の理想を具現化しようと奮闘する新しい女性と規定される。しかし、独身時代には小林と二人「深夜非常線にかかった」(八十四)こともあつた津田が「奥さんの影響で」「大人しくなった」(八十二)のは、やはりお延が津田を「不品行に陥れしめず」満足を与えているからだだろう。お延は小林から津田が「紳士」でないことを匂わされた時、津田が不品行を冒し、自分が

「笑われるなら、死んだ方がまし」だと言い切る。また、彼女が、津田に対して「夫のために」「近いうち」にお腹の中の「勇氣」を出すことになると言言してもいる。「夫の監理」という点で言えば、お延は大正期の現代的な良妻賢母と言えるのであり、本や雑誌から愛についての知識を吸収しながら夫の放蕩を許しているお秀は、「妻として無氣力無勢化」（下田前掲書）で、この時代の良妻とは言えないことになる。

四 「良妻」から逸脱するお延

しかし、良妻たらんとし、事実良妻でもあるお延が、ところどころで良妻から逸脱するのが、『明暗』の面白さである。

「儉約」という点から見ると、彼女は、「津田よりもずっと派手好きな細君」（七）であり、毎月の家計の不足を津田の父から補ってもらっても、平気である。それに、彼女は津田の父から仕送りがないことを大して気にする様子もない。儉約して自分の御古で津田の襦袢を作ったりもするけれども、「一所に随いて行つちやいけないの。病院へ」というお延は、「金の事などをまるで苦にしていまいらしく見えた」（十八）という。裕福な岡本で育ったせい、金には無頓着な様子で、津田の温泉行きにも無邪気に同行するつもりであった。清子に会ってその翻心の理由を聞くのが温泉行きの目的である津田に、「他の金を貰って夫婦連れで遊んで歩くように思われても、あんまり可くないぢやないか」（百五十二）と言われると、お延はお秀の置いて行った金で病院への支払いを済ませ、岡本からもらった「あの小切手」で温泉へ行けばいいと言う。何不自由ない生活をしていると吹聴している手前、金は借りたくないのだが、岡本の叔父ならばなんとかしてくれるという腹があるせいか、自分で儉約して家を富ませようなどという意志は全く感じられない。もちろんそこに国家への意識は無く、「何か家庭で出来る仕事を」などという気もまったくなさそうだ。この意味から行けば彼女は「良妻」ではない。

また、小森が指摘するように、お延が「良妻」なら自分の希望である劇場行きを犠牲にしても、術後の津田につきそうべきであろうが、お延は、津田を病院に残して劇場へ出かけてしまう。

劇場へ出かけるお延の様子は次のような印象的な文章で描かれている。

小路を出た護謨輪は電車通りばかり走った。何の意味なしに、たゞ賑やかな方角へ向けてのみ速力を出すといった風の、景気の好い車夫の駆方が、お延に感染した。ふ

つくらとした厚い席の上で、彼女の身体が浮つきながら早く揺くと共に、彼女の心にも柔らかなで軽快な一種の動揺が起つた。それは自分の左右前後に紛として活躍する人生を、容赦なく横切つて目的地へ行く時の快感であつた。

車上の彼女は宅の事を考へる暇がなかつた。機嫌よく病院の二階へ寝かしてきた津田の影像^{イメージ}が、今日一日位安心して彼を忘れても差支ないといふ保証を彼女に与へるので、夫の事もまるで苦にならなかつた。ただ目前の未来が彼女の俤とともに動いた。芝居其物に大した嗜好を始めから有つてゐない彼女は、時間が遅れたのを気にするよりも、たゞ早く其所に行き着くのを気にした。斯うして新らしい俤で走つてゐる道中が現に刺戟であると同様の意味で、其所へ行き着くのは更に一層の刺戟であつた。

(四十五)

この場面のお延がなんと生き生きと快活に描かれていることか。『明暗』一編中で若々しいお延の喜びが作者の批判的言説を一切交えずに澁刺と描かれているのはここだけである。

お延が入院中の津田を置いて劇場へ行くのは、岡本の強い勧めもあつて断りにくかつたことがあるが、実は、彼女は意外にも「芝居その物に大した嗜好を始めから有つていない」。津田の機嫌をそこねないようにしながら、ついに劇場行きの自由を勝ち取るのは、ある意味華やかな社会の縮図のような、刺激に満ちた「こういう場所」に「好んで」「出入したがる」女だからなのである。

また、劇場から遅くに帰つた次の朝、着物を脱いだままにした乱雑な有様を見た彼女には、やがて一時の「覚醒」が訪れる。

其内眼を開けた瞬間に感じた、済まないといふ彼女の心持が段々弛んで来た。彼女はいくら女だつて、年に一度や二度此位のことをしても差支なからうと考え直すようになった。彼女の節々が楽々しだした。彼女は何時にない暢びりした気分で、結婚後始めて経験する事の出来た此自由を有難く味はつた。是も畢竟夫が留守のお蔭だと気の付いた時、彼女は当分一人になつた今の自分を、寧ろ祝福したい位に思つた。さうして毎日夫と寝起を共にしてゐながら、つい心にも留めず、今日迄見過ごしてきた窮屈といふものが、彼女にとって存外重い負担であつたのに驚かされた。然し偶発的に起つた此瞬間の覚醒は無論長く続かなかつた。一旦解放された自由の眼で、やきもき

した昨夕の自分を嘲けるやうに眺めた彼女が床を離れた時は、もう既に違つた気分支配されてゐた。

彼女は主婦として何時も遣る通りの義務を遅いながら綺麗に片付けた。(五十八)

お延は、身についた良妻らしい心性・行動の形を持ち、夫のために日々親切を尽くすことで、良妻たらんと努力する女性である。しかしその内面には、良妻に納まりきらない強い自我や彼女自身でさえまだ明確に意識しえない「自由」への希求がある。劇場へ行くお延の澹刺とした様子や「偶発的に起つた此瞬間の覚醒」は、それを示している。お延は自分で気づかないうちに良妻からはみ出していつてしまう女なのである。『明暗』では、それが吉川夫人に「内側と外側がまだ一致しない」(百四十二)と受け取られるのであろう。

さらに、お延は劇場での吉川夫人のせいで「二人の間に何だか挟まつてしまつた」感じを受け、小林から「夫の人格を疑るような言葉」(八十八)を投げかけられて津田を疑いだし、病院でお秀の「嫂さんを大事にしていながら、まだ他にも大事にしている人があるんです」(百三)という言葉で「或物を疑つても差支えないという証左を、永く心の中に掴」(百四)む。その疑いの真実相に迫り、夫に自分だけを「愛させる」ために彼女は猛烈な行動力を発揮する。ついには、「夫のために出す勇氣」(百五十四)の実現までも津田に明言している。

夫の不品行を妻は許してはいけないが、妻が激しく夫に迫る事が「良妻」にとってご法度であることは、前述の下田など当時の言論から明らかである。「良妻」は、あくまでも女子の「特性」である「忍耐」を発揮して氣長に夫を自分のもとへ引き戻すべきなのであるが、お延はついに爆発して「感情の潮」(百五十)に流されて夫に迫る。この点でもお延が「夫の品行の監理」を行う「良妻」たらんとしつつも、期待される「良妻」像からは、ずれていることが見えてくる。むしろこれによつてお延は良妻を大きく逸脱することになつていくと言ってもいいだろう。

『明暗』は愛への意志によつて、「良妻」たらんとするお延が、同じ愛への意志によつて、「良妻」を逸脱していく物語ともとれるのである。

第三章 「新しい女」とお延

一 「新しい女」

先に述べたような意味でお延は「新しい女」にも似ている。江藤は、「愛の理想を求める」点でお延を「新しい理想を求める新しい女」と言ったが、ここではもっと詳しくお延の新しいさを見て行くことにしよう。

「良妻賢母」が欧米列強に負けない近代国家になろうとする国家体制側の要求で作りに出された女性の理想像であり、学校教育、マスコミを通じて国民に浸透していたのに対して、明治末から大正にかけて登場した「新しい女」^(四十二)は、一部の理解者を除いては、批判され排撃される対象であった。先にあげた『結婚前後の修養』(大正五年)においても、殆どの著者が「新しい女」を批判している。

「新しい女」の代表といえ、雑誌『青鞥』に集まった女性たちである。始め好意的に見られていた彼女達だったが、明治四十五年に五色の酒事件・吉原登楼事件^(四十三)がマスコミに興味本位で書き立てられたことから、「新しい女」は、「女だてらに」酒を飲み、吉原に泊まるような「不良」の代名詞とされ、厳しく批判された。これは、あくまでも『青鞥』に集った人々の好奇心から起った瑣末な外面を面白おかしく書き立てたものであって、彼女らの真摯な願いや行動を無視したものである。彼女たちの心には女性たちが置かれている不平等、不自由への怒りと、独立自尊の人間への解放への熱い希求が激しく燃えており、自己の内側にある「天才」^(四十四)を発現して自分らしく生きて行こうと、日々努力を重ねていたのであったが。

ここでは、そのような青鞥社のリーダーであった平塚らいてうを中心に「新しい女」の資質を見、そこからお延の人間像に迫りたい。

らいてうは、大正三年一月『中央公論』に「新しい女」を発表し攻撃に対して、自ら「私は新しい女である」と宣言し、戦いの姿勢を明らかにする。そこで「新しい女は男の利己心のために無智にされ、奴隷にされ、肉塊にされた如き女の生活に満足しない」「新しい女は男の便宜のために造られた旧き道徳、法律を打破しようと願っている」と書いた彼女は、その後も『青鞥』・『婦人公論』などの雑誌に自分の考えを発表して多くの女性たちを勇気づけ、やがては新婦人協会^(四十五)を立ちあげて、女性解放のリーダーとして活躍していく。

活動の初期、らいてうは、見事に自己の精神を貫いたといえる。それは彼女の存在が世間に広く認識された煤煙事件^(四十六)のときから、すでに彼女にあった特質である。

森田草平との煤煙事件で遺書として書きしるした「我生涯の体系を貫通す。われは我が cause によって斃れしなり。他人の犯す所に非ず」^(四十七)という言葉に表れているよ

うに、彼女は、草平と「心中」しようとしたのではなく、自分自身の「理由」のために死のうとした。自己の欲求に従って生も死も選びとつていこうとした彼女の姿勢は、彼女が傾倒した禅から得たものだったのだろう。このような生の姿勢は、一生を通して彼女に見られる。有名な「元始女性は太陽であつた」^(四十八)で彼女が、「私は常に主人であつた自己」の権利をもつて、我を支配する自主自由の人なることを満足し、自滅に陥れる我れをも悔いることなく、如何なる事件が次ぎ次ぎと起り来る時でも我の我たる道を休みなく歩んできた」というのは、このような生きる姿勢を言うのであろう。

五色の酒事件、吉原登楼事件による『青鞥』たたきのあつた時、世間一般の轟々たる非難に動じることなく自分を貫くことができたのも、彼女のもっている自立性にあつたといえよう。

このように書くと、らいてうが自己中心的で回りを気にしない人であつたかのような印象を与えるかもしれないが、そうではない。彼女は極めて聡明であり、自己を客観視し批判することを忘れてはいない。例えば、先にもあげた「元始…」や、『青鞥』の中にも、次のような言葉がある。

私どもは今日の女性としてできるだけのことをした。心のすべてを尽くしてそして産み上げた子供がこの『青鞥』なのだ。よし、それは低能児だらうが、奇形児だらうが、早生児だらうが仕方がない、暫くこれで満足すべきだ、と。

果たして心のすべてを尽くしただろうか。ああ、誰か、誰か満足しやう。

私はここに更に多くの不満足をみづからの上に新たにした。

「元始女性は太陽であつた」『青鞥』第一巻第一号

本誌は第三号です。三はなぜか意味のある、重大な数のように思はれてなりません。第三号の如何はこの小児の将来に大きな関係がありますまいか。かう考えて私は本号に対しますと、どうも心細い感じがしてならないのです。たとへ下手でも生命の凝つたやうな作品の一つなりとも毎号本誌によつて発表することが出来るやうにお互いに骨を折りませう。(略)今日の女は全く注意力の弱いものです。統一性の欠けたものです。やつと小児の無意注意の状態から脱して、有意注意の状態に一步踏み込んだ位のものでせう。まだ、まだ、まだ、今後長い長い間、この有意注意の段階にあつて、飽く迄も主我的態度を続けねばなりません。(略)もとより私とてこれを

私共女が行き付く最後の境地だとは決して思つて居ないのですが、今日の女が、―女と限らず人間たるものが一生涯に於いて是非に一度は通過せねばならぬ関門である、この関門を通過しないことにはほんとのものになることが出来ないと考へるところから、今日の女に向かつて説かるべき福音はまだ主我的系統のものでなければと信ずるのです。

「編集後の雑感」『青鞥』第一卷第三号

らいてうは、始めて世に出した『青鞥』にただ満足するのではなく、客観的に見てその内容の未熟さをよく理解し、一層の努力を喚起している。また、自己も含めて女性の現状を客観的に見て、何をすべきかを主張している。鹿野政直^{四十九}はこのようならいてうについて「究極にはそんな『主我』本意を超える段階がこなればならぬと考えていました」『近代的自我』を突き抜けて、共存の愛の世界の樹立に至ろうとする思索があります」と述べている。

らいてうは自立性・客観性・批判力・行動力などをもった極めて独自性の高い人間存在であった。彼女の言動はこのような内面の資質が支えていたのである。当時の女性の中にあって、非常にオリジナルな人間像と言わねばならないだろう。

二 お延の新しさ―お秀とお延―

お延は自己の「天才」の発現や経済的な自立など考えたこともない専業主婦である。深層には外で活動したいという願望をもっているが、表面的には家を守って夫に仕える良妻であることに喜びを感じている。従つてこの意味では「新しい女」ではない。

しかし、彼女の内面には極めて自立的な部分がある。天性の「伶俐」さに加えて、岡本に鍛ええられた表現力や人を動かす技巧をもったお延は、教育や本からの知識にたよらず、「自分の理屈を行為の上に運んで行く」女であり、「自分の過失に対しては、自分が苦しみさえすればそれで沢山だ」(六十六)と自分の行動の責任は自分で負う女である。特にお延の生存上必要な「愛」に関しては「自分に一種の目安がある。アイデアル・センセーション、それが個人的になつておつて、とにかくそれを言い現わし、それを実行しなければいても立ってもどうしてもいられない」。漱石の所謂「インデペンデント」^(五十)な、自己の独自性を追求していく個人であるといつていい。

お延の自立性や独自性は、『明暗』の中で継子、お秀や清子という同世代の女性の存在により対比され、強調されている。ここでは特にお秀とお延の対決場面(百二十三〜百三十一)で具体的にそれを見て行くことにしよう。

お秀は、書物に縁の深い藤井に教育された結果、「自分より書物に重きを置くように」なったが、「自分は自分なりに、書物と独立したまんまで、生きて働いていかねばならなかった」から、「本と自分とは離れ離れになるだけ」という結果に陥り、「我がつまり自分の本体であるのに、その本体に副ぐはないやうな理屈を、わざわざ自分の尊敬する書物の中から引張り出して来て、其所に書いてある言葉の力で、それを守護するのと同じ事に帰着した」。そして、「自然弾丸を込めて打ち出すべき大砲を、九寸五分の代わりに、振り回してみるやうな滑稽も時々は出て来なければならなかった」(百二十六)と描かれる。

お秀は育ての親藤井の「教育」によつて、書物に重きを置く女性に育った。女学生時代、主婦時代を通じて本や雑誌に親しんでおり、そこから知識を仰いでいる。しかし、彼女の読書の仕方は、「自分の本体」たる「我」を捨てて、自分で考えることを忘れた読書である。尊敬する本つまりその本を書いている筆者の考え、あるいは本の世間的評価を盲目的に受け入れて、書かれたことがさも自分で考えたことであるかのような錯覚に陥っているのである。

一九世紀に活躍したドイツの哲学者ショウペンハウエルは『読書について 他二篇』(岩波文庫)で、読書の危険性について次のように語っている。

読書は、他人にものを考えてもらうことである。(中略)だから読書の際には、ものを考える苦労はほとんどない。自分で思索する仕事をやめて読書に移る時、ほっとした気持ちになるのも、そのためである。だが読書にいそしむかぎり、実は我々の頭は他人の思想の運動場にすぎない。

ショウペンハウエルの警告は、時を超えて、読書をする我々に有用な示唆を与える。自分で考えることなしに漫然と書物に向かうことの危険性は大きい。「自分」にとつて有益なはずの読書が、「自分」を崩壊させて行く可能性を内包しているということなのだから。

お秀が陥っているのも、この読書の危険性に他ならない。彼女は「理屈っぽい」(百二十六)議論好きな女性として描かれている。津田の病室での彼女の論理は筋が通っており、江藤もその知性に瞠目している。しかし、『明暗』で作者が書くように、お秀は「柄にも

ない議論を主張するような弊に陥つ」ているのに、「自分が議論のために議論をしているのだから詰まらないと気づくまでには、彼女の反省力から見て、まだ大分の道程があつた」(百二十六)のであり、お秀の知性は透徹したものとは言えないのである。ここで作者が書く「反省力」とは「客観的に自己を見て批判的に考える力」と言い換えることが出来る。そして、作者は彼女には、その能力が欠けていることを、この場面で明らかにしている。

このようにお秀は作者の語りによって批判された上に、更に、お延の眼によって厳しい批判にさらされている。「月の発行にかかるその雑誌に発表された諸家の恋愛観を読んだお秀の質問」は、「お延にとつてそれ程興味のあるものでなかつた」「抽象的な問題」(百二十六)であつたという。お延が最も大切に行っているはずの「愛」がお秀の口から発せられた時、お延が「この陳腐な有来たりの一語」と感じたことから、お秀の問題にしているのは、文字の上だけで語られる空虚な愛の言説であつて、男女が生きて愛しあつて生活するという現実にはなんら意味を持たない言説であつたことがわかる。

所が不幸にして此場合の相手は、最初からもう地面の上になかつた。お秀の口にする愛は、津田の愛でも、堀の愛でも、乃至お延、お秀の愛でも何でもなかつた。たゞ漫然として空裏に飛翔する愛であつた。従つて、お延の努力は、風船玉のやうなお秀の話を、まず下へ引き摺り卸さなければならなかつた。

子供が既に二人もあつて、万事自分より所帯染みているお秀が、此意味に於いて、遙かに自分より着実でないことを発見した時に、お延は口ではないはい向ふのいふ通りを首肯しながら、腹の中では、焦慮たがつた。「そんな言葉の先でなく、裸でいらつしやい、実力で相撲を取りますから」と云ひたくなつた彼女は、何うしたらこの議論家を裸にする事が出来るだらうと思案した。(百二十六)

お秀は「器量好みで貰われた」ことに絶大な自負があり、「結婚の当時、自分の未来に夫の手で押し付けられた愛の判を、普通の証文のような積りで、何時までも胸の中へ仕舞い込ん」だまま、「放蕩の酒で臟腑を洗濯されたやうな」「自由に遊びまわる」「道楽もの」の堀と自分との「愛」を客観的に見る事が出来ない。「猛烈に愛した経験も、生一本に愛された記憶も有たない彼女は、この能力の最大限がどの位大きなものであるかといふ事をまだ知らずにゐる女であつた。それでゐて夫に満足している細君であつた。知らぬが仏とい

う諺が正にこの場合の彼女を能く説明してゐた」(百二十七)と書かれる彼女は、明らかに作者によつても批判されている。彼女は、「自分独り精一杯愛されなくつちや気が済まない」お延に「良人を御覧なさい」(百三十)と言い放っている通り、夫が他に女を拵えている(しかも複数の女たちと常時遊んでいる状態であること)をよく理解しているのだ。しかし、ここで作者が「知らぬが仏」と言つたのは、「好きな女が世の中にいくらでもあるうちで」「一番愛されている」のが、「本当に愛されているという意味」(百三十)だと主張するお秀の、堀にとつての自分が他の女からの優越性を勝ち得ているというあやまつた判断を言つたものではないのか。お延が看破したとおり、お秀が器量好みで堀に貰われた事は「中身の薄つぺらな事実」(百二十七)でしかなく、堀はお秀への愛を持ち続けるどころか、結婚後も他の女性(職業で売春をする女性)と関係をもつて性病に罹患し、津田と小林病院で鉢合わせさえしているのだ。始めこそ、その美貌に惚れこんでは非でも妻に迎えたいと思つたとしても、その愛が今も続いているとは限らない。今の堀にとつてのお秀は、母親や弟妹、親戚の厄介者まで同居する大家族、しかもサラリーマンである津田の家庭とは違い、自営業者である堀の仕事への様々な貢献を強いられる、そんな家庭を守る「機能」、あるいは美しい女を妻にしているという男の見栄を満足させる「偶像」^{アイドル}、あるいは我が子の「母親」として尊重されているに過ぎないのではないか。お秀が自信をもつて発言するように、大勢の好きな女の中で自分が「一番愛されている」というお秀の認識こそ「知らぬが仏」なのである。

「あたしは何うしても絶対に愛されて見たいの。比較なんか始めから嫌ひなんだから」というお延は、お秀の「たゞ実例をお見せになるだけなの。その方が結構だわね」(百三十)のひとことで一蹴される。お延は必死の努力でお秀から津田が他に思っている女について聞き出そうとするが、結局失敗してしまふ。表面的にはお秀の勝利である。しかし、この場面のお秀の言葉は、裕福な事業家の大家族の若嫁の言葉の域を出ない、常識的保守的なものである。先にも触れたが、彼女は「愛の実体」さえ知らないのである。本や雑誌を読んで、大正期の新しい愛の言説に触れているはずのお秀が、その実なんらそういった新しい恋愛や結婚への批評を持たず、自己を客観視できない人間であることがはつきりするばかりである。

お秀の家でのお秀とお延の対決場面の面白さは、お延によつてお秀が批判され、お秀という人間の持つている滑稽さが暴かれている点にある。また、逆に、そういうお秀によつてお延の人間性が明確になつていく点にもある。

お延は自分で自分の理屈を行為の上に運んで行く女であつた。だから平生彼女の議論をしないのは、出来ないからではなくつて、する必要がないからであつた。其代り他から注ぎ込まれた知識になると、大した貯蓄も何もなかつた。女学生時代に読み慣れた雑誌さえ近頃は滅多に手にしない位であつた。それでゐて彼女は未だ曾て自分を貧弱と認めたことが無かつた。虚栄心の強い割に、其方面の欲望があまり刺戟されずに済んでいるのは、暇が乏しいからでもなく、競争の話し相手がないからでもなく、全く自分に大した不足を感じないからであつた。(百二十六)

本を読むお秀の存在によつて、読まないお延の自立性ははっきりする部分である。お延は「自分に大した不足を感じない」というように、自分に自信を持ち、「自分の理屈を行為の上に運んで行く女」、つまり、他に頼ることなしに自分で考え行動する女性なのである。

また、「猛烈に愛した経験も、生一本に愛された記憶も有たない彼女は、この能力がどの位強く大きなものであるかという事をまだ知らずにいる女であつた。」「本当に愛の実体を認めた事のないお秀」(百二十七)という語りは、「猛烈に愛した経験も、生一本に愛された記憶も有」っているお延、「本当に愛の実体を認めた事のある」愛に関して着実な「お延を浮き彫りにしている。

お秀は愛に関して自分の考えがない。旧い「家族」に埋没し、機能を果たすことに満足している。お秀は自分でものを考えているようでいて、実はあまり考えていない。それは、本や雑誌をうのみにしてうろんな理屈を振り回すという彼女の行動に表れている。ここでは詳しく触れないが、自分で考えず「岡目八目」で嫁に行こうとする継子や、津田から関に翻心した点は自立的だが、万事受身で、なされるままの人生を受け入れているように見える清子の姿^(五十二)も、お延の独自性を浮き彫りにしているのである。

本からの知識にたよらず、自分の理屈を自分で行動に運んで行く女であり、自分の行動の責任は自分で負う女であるお延は、らいてうに似ている。漱石は、煤煙事件の時、草平から聞いた明子(そのときは、まだらいてうのペンネームを使っていなかった)の独自性(明子が「自分は中性である」と言っていたことや、自ら「二重人格」であると言っていたことなど)が理解できず、当時読んでいた『エス・ワール』の女主人公^(五十三)のような「自ら識ざる偽善者」(「自ら識らざる間に別の人になつて行動する」から、その行動に

は責任がない人）であると解釈した。そうして草平に「君が書かなければ、僕がそういう女を書いてみせようか」と言つて、『三四郎』の美禰子を書いたという。^{五十三}

森田も言うように、思わせ振りで三四郎の心を翻弄する美禰子は、結局危険を避けて安全な男との結婚を選ぶ女性であつて、自ら危険に突入していった明子とは全く違った女性である。漱石は「解らない女」を解らないなりに解釈して美禰子を造形したが、その後、明子が『青鞥』を立ち上げ、世の中に向けて活動する姿を見るうちに、自分の眼にかつた「女」を見るべールを次第に外して、彼女の人間としての本質に気づいていったのではないだろうか。例えば、明子の言つた「自分は中性である」という言葉も、男を幻惑して自分に惹きつける無意識の技巧ではなく、「自分は男、女という性別でくくられる前に、一個の人間である。個人である」という彼女の認識を示すものにとらえられるようになったのではないか。そのように、彼女の自立性や独自性に気づいて行つたのではなからうか。「言語動作はきわめて淑やか」で、「負け嫌いな性質」「世間知らずの一本気な性質」、また、「大陸の本などはあまり読まないのです」と『煤煙』に書かれた明子は、お延に似ている。

漱石は「新しい女」らいてうを下敷きにして、もっと個人的な「愛」を切実に追い求める女性、お延を造形したのではないだろうか。

三 「新しい女」の愛・結婚とお延

もちろん、お延が最も大切にする「愛」について言えば、お延の求めるそれとらいてう等「新しい女」の求めるそれとは似て非なるものだ。まず、らいてうは「愛」をどのようにとらえていたかを見てみよう。彼女が愛を考える上で強い影響を受けたのはエレン・ケイ^{五十四}である。

ケイは一九〇三年に『生命線』（後に『恋愛と結婚』と改題）で、キリスト教の旧道徳を批判し、恋愛の自由と母性の尊重を主張する女性論を鮮明にした。ケイの言う恋愛の自由とは、肉体と精神が融合され生殖欲を伴った恋愛の讃美であり、性愛と結婚（人生）との一致である。また、母性の尊重とは、女性の独自の領域を母性に認め、進化主義の立場から社会による母性の保護すなわち養育のための社会給与の必要を唱えるものであつた。

いかなる結婚であつても、そこに恋愛があれば、それは道徳的である。たとへいかに法律上の手続を経た結婚でも、そこに恋愛がなければそれは不道徳である。

本間久雄は「エレンケイの恋愛中心の結婚論」^(五十五)において、彼女が右のように言う思想的根拠を次のように説明する。そのひとつは、「男女は結婚によって、相互の恋愛感情を満足させるべきものであり、又さうすることによって、結婚の当事者が相互に個人的幸福を享受すべきものであるという思想」である。これは、「現代の結婚の大部分」が、「当事者の自由意思の殆ど加はらない」「金のため」「政略のため」の結婚であり、特に女は「彼女の選んだ男を幸福にするためではなく、彼女の父母の選んだ男を幸福にするため」に結婚するという「時弊をついたもの」であると言う。また、今ひとつは、「結婚によつて種族が一層改造され一層向上されるような結果とならなければならないのであるが、それは恋愛を基礎とした結婚において始めて可能であるという思想」である。「ケイ女史は、この世界人類の文化的進歩は、質的に優れた人間が、更に新しい時代をつくり、それよりも更に質的に優れた人間が更に新しい、又その次の時代をつくることによつて人類は永遠に進歩するという一種の宗教的信念を抱いていた」ため、「恋愛を基礎とした男女関係はそれから生まれる人間が、質的に優れているという理由で、主張するべきであると女子は考えた」のである。今日では優生思想につながるとして問題視される社会的進化主義思想をケイももっていた。そしてその視座から恋愛を神聖化したのであった。ケイの思想の特徴は、霊肉の一致という恋愛による男女の性的関係によつて「質的に優れた」人間が出来るとし、その大義の存在を盾として、恋愛による結婚は道德的だと断じたことにある。

平塚らいてうは、明治四十五（大正元）年に始まった「新しい女」攻撃を受けて、「婦人問題、女性研究に関する書物」を読む中で、ケイの『恋愛と結婚』に多大な影響を受け、「自分の研究問題の中心を婦人問題に置こうとまで決心した」^(五十六)という。彼女は、「男女性的道德論」^(五十七)において、愛について次のように言っている。

世間の人たちが新旧道德観の差異を知らないがため、これ迄私達の上に投げられた見当違いな非難は随分ありました、その主たるものを挙げれば自由恋愛というようなことを常に口にし、貞操を破つて恥じないといふのであります。併しかういふ場合の多くは、私の見るところでは非難者が意味する恋愛乃至は貞操と、新婦人達が意味するそれらとが最初から全然その意義内容を異にしてゐるといふことです。例へば前者の言ふ恋愛は至つて標準の低いもので肉欲以上のものではなく、従つてほんの一時

的な、無責任なものに過ぎませんが、後者に於いてその自由を説かれ、その権利義務を主張される恋愛は、靈肉の要求の一致から成り立つ人格的の愛で、相互の幸福による生命の増進と共に子孫に対する責任の觀念をも含み、更にそれ以上、恋愛生活の継続と共に恋愛それ自身も常に成長し進化し行く体のものでなければならぬのであります。ですから私達によつて承認された恋愛は必ずそれに先立つて恋愛の高き標準からなされた批判を経たものでなければなりません。次の貞操の場合にしても新道徳は完全なる恋愛そのものが貞操で、恋愛を離れて貞操は存在しません。従つて愛無くして只肉体の上で夫一人を守つてゐるような妻は不道徳な、不貞なものとして非難されなければならぬのに、旧道徳は先に私が申した通り、愛の有無は全然問題とされて居ないのみか、奴隷の身上として婦人は男子から愛される権利はないのであります。言ひ換えれば在来の婦人道徳の中心は恋愛そのものを罪惡として否定するところにあります。そして男女関係を只權利と義務よりなる主従の關係におくことを道徳的だとしたのに反し、新婦人道徳の中心は恋愛そのものであつて、相互恋愛こそ男女の道徳的關係となされて居るのであります。

「新しい女」の主張する愛は、「靈肉の要求の一致から成り立つ人格的の愛」で、「相互の幸福による生命の増進と共に子孫に対する責任の觀念をも含」むものであること。更に「恋愛生活の継続と共に恋愛それ自身も常に成長し進化し行く体のものであることが言われている。らいてう自身、大正三年には奥村博との共同生活に入り、自己の主張する愛の実践を世に示している。『青鞥』に集つた女たちが、みならいてうのような自由を実行した、あるいは実行し得る環境にあつたとは言えない。しかし、彼女たちが志向した愛は、らいてうが言うようなものであつたであろう。

お延も恋愛から結婚に至つた点で新しい。この時代は恋愛による結婚、当時の言葉で言えば「自由結婚」は、いまだ批判的であつた^{五十一}が、お延はそれを実現した。彼女は結婚に関して近代的な自覺をもち、しかも、女の方で男を選んで結婚したのだ。

いわゆる「新しい女」たちが、従来の結婚制度が女性を縛るものであると指摘し、恋愛による結婚こそ道徳的だとして闘つていた大正初期、やはり多くの論者は「自由結婚」否定派であつた。親の見立てによらないで当事者が自分で相手を選んで結婚するということは、一般的にはまだ非難の対象であつたのである。

欧米の家庭を積極的に日本に紹介した、一面進歩的な女性觀を持っていた女子教育家鳩

山春子も、結婚について次のように述べている。

人間一代の大事なる結婚をするに当たつて、主として本人が選択するが好いか、その父母たる人が選択するが好いかといふことは、古きよりの問題でございますが、私はどうしても自由結婚の方には賛成致しかねます、それは家族制度たる我が国では、自ら父母の意見を重んじなければならぬといふばかりではありません。又血氣に逸る若者同士では冷静に相手方の真相を看破することがむずかしいといふばかりではありません。已に自由結婚の發達した欧米であつても妙齡の婦人が未來の夫を選択しようとするには、何でも外貌を好くして、如何にすれば男子によく思われるかといふことに腐心して居るといふ著しい弊害がございます。それは年若き本人が選択することならば、斯る弊の生ずるのも無理からぬことでございます。丸で芸者見たようになるのでございます、各方面より見て本人の選択することは面白くないと思ひます。

然らば父母の独断にしたら善いかといふに、是亦同じやうな弊害がございますことは、申すまでもございません、之を如何にして調和したら善いかといへば、私は父母が種種にして相当なる男子を見出し、果たしてこの人が宜しからうと思ひましたら、かの見合いの如き古き形式に依らず、直接本人同士を交際させて見るのです。この間に於いて若し本人同士に於いて嫌な感を懷くようでは強いて結婚させる訳にも参りませんが、子を見るは親に如かずで、親の見立ても違はず、子供にして常識を具へて居る以上は、大抵それに定まるのであります。

「幸福なる結婚法」『結婚前後の修養』前掲書

「父母が種種にして相当なる男子を見出し」て、女子に娶せる事が必須とされたこのような感覚の時代に、津田とお延は恋愛を経た結婚をしたのである。

お延は自分で自分の夫を掴んだ当時の事を憶ひ起さない訳にいかなくつた。津田を見出した彼女はすぐ彼を愛した。彼を愛した彼女はすぐ彼の許に嫁ぎたい希望を保護者に打ち明けた。そして其許諾と共にすぐに彼に嫁いだ。冒頭から結末に至る迄、彼女は何時でも彼女の主人公であつた。又責任者であつた。自分の料簡を余所にして、他人の考へなどを頼りたがつた覺はいまだ嘗てなかつた。(六十五)

「冒頭から結末に至るまで、彼女は何時でも彼女の主人公で」「また責任者であつた」お延は、自分の結婚に関して十分に自立的であり、「自我をもった新しい女性」ということが言える。周りの思惑を気にするよりも、自らの愛の理想に突き進んでいくことを彼女は選び取つたのである。たまたまお延の強い意志と津田の現在の地位がうまく働いて彼等はすんなり結婚することが出来たが、『明暗』に頻出する彼等を取りまく諸層からの反感は、実は彼等が「自由結婚」であつたという最初の一步からすでに予定されていたとも言える。お延が自分の幸せを周囲に「反射」させなければならぬのも、自分の目で選んだ相手と自由結婚をしたことにもよるのである。

彼女は自らつかんだ愛のために日々努力する。夫を愛し、その時々「腕」を発揮して夫の愛を得ようとする。しかし、結婚後半年を過ぎた今、彼女の心は黒い雲に覆われている。彼女は夫に「朝夕親切を尽くして」（四十七）いるのに、その夫である津田は、「良人というものは、ただ妻の情合を吸い込むためにのみ生存する海綿に過ぎないのだろうか」（四十七）と感じさせるほどに冷淡である。彼女は「必竟夫に対する自分の直覚は、長い月日の年月の経験によつて、訂正されべきものかも知れないという心細い真理」（六十四）に気づき、「自分の過失に対しては、自分が苦しみさえすればそれで沢山だ」（六十六）と自覚するまでになる。しかし、お延は決して諦めることはせず、「誰でも構はない、自分の斯うと思ひ込んだ人を飽く迄愛する事によつて、其人に飽く自分を愛させなければ已まない」（七十八）と決心する。そして、夫が他にも大事にしている人がいることを知ると、「真相」（百八十七）に迫るために自ら行動し、夫に直にぶつかり、ついには「近いうちに」「勇氣」を出すと言宣する。彼女は決して諦めず、自分の愛を貫こうとする。女徳の第一項がいまだ「忍耐」であつた時代に、夫に直にぶつかっていくお延は新しい。

四 あきらめない女―「新しい女」岩野清子とお延―

愛への情熱とあきらめない精神においてお延と共通している「新しい女」として思い浮かぶのは、らいてう同様に「新しい女」と呼ばれた青鞥社社員岩野清子である。

岩野清子は、『愛の争闘』^{五十九}に次のように書いている。

明治四十三年二月三日

私は五年以来病氣らしい病氣はしたことがない。（略）去年までの私の元氣は何処へいつたのだらう。朝に出て日暮れて帰つてもまだ身神の疲労を知らなかつた。（略）

思いまわすと、これもすべてあの恋の力であつた。私は心に恋をもつてゐなければ、恋されなければ精神が引き立つてゐられないのであらう。いつまでも私には恋が生命である。恋なくしては私は生きてゐられないのであらう。

「恋なくしては私は生きてゐられない」と言う清子の独白は、津田の愛を一身に求めるお延の叫びに通じている。また、清子のどこまでも愛に厳格で諦めない姿勢も、お延に引きつがれているように思う。

岩野清子は、士族だった父の仕事が思ひになかったため、教員、記者などをして生計を立ててきた。そのため女性の独立に対する関心が深く、明治三〇年代に女性を政治から排除する治安警察法第五条の改正運動に、平民社の女性たちとともに取り組み、仲間の今井歌子、川村春子らと雑誌『二十世紀の婦人』を発行している。

今井の紹介から岩野泡鳴^{（あき）}と出会い、彼の強い要求から同居したときは、『万朝報』が、「一方は半獣主義親玉、一方は極端な恋愛神聖論の主唱者」が家庭を持った事情を、『変物同士の同棲 霊が勝つか肉が勝つか』（『万朝報』明治四十二年十二月十二日）と書き、話題となった。泡鳴は清子に、同棲と肉交という二つの条件を出したが、清子は同棲のみを受け入れたのであつた。

はじめ、成就することなく終わった電報通信社（現電通）社員中尾五郎との恋の痛みから、泡鳴を拒絶した清子であつたが、やがて泡鳴への尊敬の念と愛情を感じ、翌年十一月について彼を受け入れたものと見え^{（あき）}、その後、離婚が成立した泡鳴と大正二年二月一九日に婚姻届を提出^{（あき）}している。放縦で鳴らした泡鳴は清子と同居した七年間「品行に於いては一点の穢れもなかった」（『愛の争闘』）ようで、夫婦の間にはさまざまな齟齬（主に性を求める泡鳴と霊の一致に喜びを得ようとする清子との確執から出たものか）がありながらも、泡鳴は泡鳴で清子の小説創作や青鞥社の活動を支援し、清子も泡鳴を支え、実りのある関係を築いていたようだ。しかし、大正四年、清子が泡鳴の子供を出産したあとの七月、泡鳴は筆記に来ていた蒲原房枝との恋愛を清子に打ち明ける。泡鳴自身は房枝との関係を大目に見てもらいたかつたようだが、清子は許さず、八月九日に泡鳴は家を出て房枝との同棲を始めた。

ジャーナリズムは八月十六日の『国民新聞』が、房枝と前の夫との関係を絡めて姦通事件として報じたのをはじめとして、『読売新聞』、『第三帝国』が双方をインタビューし、『朝日新聞』は「男女貞操問題」として十回にわたって泡鳴を攻撃し、『万朝報』は「疑

惑の泡鳴」として、先妻の幸子、清子、泡鳴からの聞き書きを連載した。雑誌も、『新潮』『中央公論』『新小説』その他が特集を組み、泡鳴はそれらの非難に反駁した論をまとめて『男女と貞操問題』を上梓した。新たな男女のモラルを打ち出したこの本はセンセーショナルに受け止められ、清子の方も泡鳴との出会いから別れにいたる日記から抽出して『愛の争闘』を上梓したのであった。

また、清子は、去った泡鳴に同居請求の訴訟を起こし戦い始める。それに対して泡鳴は離婚承諾請求訴訟を起こす。この裁判はいずれも清子の勝訴となったが、『婦女新聞』の福島四郎は、社説「愚かなる裁判」で、この裁判が、「裁判に勝っても女性にとって何の利益もないことを示すだけに終わり、なんの意味もなかった」と書き、らいてうも、「形式上の夫婦に何の意味があるのか」と批判した。しかし、折井美都子^(六十三)が、「清子にとって、男性にとつて一方的に踏みこられる妻、女の立場を、法を盾に主張し守ることに意味が存在した」と言うように、清子の闘いには社会的な意味があった。

清子は次のように書いている。

私は断じて妥協しません。また屈従をしません。自分の力について、自分と云う意識のはつきりしなかった時代には、女はかういふ場合、かうした男の不道徳に対して泣き寝入りをしたことがあります。(中略)兎に角、私は自分が弱いであらうか、強いであらうか、自分一人の力で戦つて見やうと思います。

「別居について思ふ事ども」(『青鞥』第五卷八号大正四年八月)

清子とお延を一緒にする事はできないが、どちらも愛を激しく求め、愛に対して潔癖なまでに純粹である点で同じである。またそのどこまでも諦めないで戦う姿勢は、旧来の女性には無かったものである。

『愛の争闘』には、「寒さ冴え返る。主人は夏目氏に小説放浪のことで相談に行った。九時頃元気な顔で帰宅された。私は嬉しかった。久振で、お酒を勧めて快談した。」(明治四十三年三月三日)とあるので、泡鳴が漱石に知遇を得ていたことは確かと思われる。その泡鳴の一連の「事件」に、漱石も関心をもったであろう。

この他にも、大正五年二月に伊藤野枝が辻潤のもとから大杉栄のもとへ飛びこんだことにより、大杉の妻(入籍はしていない)保子と愛人神近市子らも巻き込んだ「多角的恋愛」が非難されはじめるなど、『明暗』前夜には、『青鞥』に集った「新しい女」を中心に、

数々の恋愛劇が展開されていた。

『三四郎』の美禰子からお延へと、小説の中の女性像が変わる背景には、このような新しい女性の実相があったのである。

五 お延の「愛」

今まで見て来たようにお延の中には「新しい女」の要素である自立性、批判力、行動力や、愛をどこまでも追求するところなどが、さまざまに見えている。

しかし、お延が求める愛は、「新しい女」が唱えたような愛とは少し違っている。

お延の「愛」については、先に取り上げた飯田^(六十回)のような「根拠も定義も不明な『愛』」で「中身がはっきりしない」という指摘がある。それは、「作者はまるでお延と津田の間に『愛』があったように語る」けれども、「清子やお秀の問題としては語りこまれている性の問題が、お延の周辺では語られない」「愛の対立項としての性が語られない」ためである。飯田の論は再度お延の愛を確かめ掬い取る契機となる意味で刺激的だといえるが、果たして本当にお延と津田には愛がなく、お延の愛は「中身がはっきりしない」のだろうか。

『明暗』を詳細に読めば、津田とお延の間に「愛」があることは明白である。結婚後の生活の中で、彼らを取り巻く世界とのさまざまな問題によって、二人の間には結婚前のような純粋な「愛」が見えにくくなっている。しかし、『明暗』には、お延の津田への愛が「親切（献身といってもいいだろう）」という形で語られているし、津田も清子への思いを残しながらも、お延に「牽きつけられ」（四）ている。飯田は性の問題が語られないことを指摘しているが、津田がお延といっしょになるまでは相当な放蕩も行っており、お延と結婚してから変わったことは、二人が深夜非常線にかかった時の光景には、一口触れるがそういう出来事に出会うまで、彼等が何処で夜更しをしていたかの点になると、彼は故意に暈し去って、全く語らない」（八十四）「然し奥さんはそういうまいお手際を有っていられるんですね。漸く解った。それで津田君がああ変化して来るんですね、どうも不思議だと思ったら」（八十三）と、小林がお延に知らせている通りである。お延自身、岡本に「厭だ事。——由雄だって外へ泊まった事なんか、まだ有りやしないわ」（五十六）と言っている。これらの語りはふたりの間の「性」を語ることと同じである。津田は清子の翻身への疑問が消えず、「未練」（百三十八）をもっていて、「事実彼はお延を愛してもいたし、またそんなに愛してもいなかった」（百三十四）というが、津田とお延が性を伴

った愛を保っていることは事実と言えよう。

また、恋愛関係にあったころの二人が、確かに相思の恋愛を経て結婚したことは、「言葉の上はとにかく、実際に愛を体得する上において、お秀はともにお延の敵でなかった。猛烈に愛した経験も、生一本に愛された記憶もたない彼女は、この能力の最大限がどのくらい強く大きなものであるかという事をまだ知らずにいる女であった。」(百二十七)と、お秀を批評する言葉によって照らし出されている通りである。

次に、「お延の愛の定義がはっきりしない」「『愛』の中味の焦点を絞ろうとしても絞り切れない」という、お延の「愛」についてであるが、飯田は「愛」と「性」を対立項として論じているように、ふたつを別のものとしてとらえ、「愛」を精神的な愛と規定している。しかし、「愛」と「性」とは、言葉の上で分けて捉えられるように、実際の夫婦関係において割り切れるものだろうか。また、精神的でなければ「愛」ではないのだろうか。

私は考える。『愛』とは何か」と問われて、明確な答えを偽りなく答えられる人が一体どれくらいいるのだろうか。お延の「愛」が、自分の考える「愛」に当てはまらないと言う理由で、彼女の「愛」がはっきりしないと切り切る事はできないのではないだろうか。

お延の愛は、らいてうのいうような「人格的の愛」というほどの精神性をもっていない。「恋愛生活の継続と共に恋愛それ自身も常に成長し進化し行く体のもでなければならぬ」とまでは考えていない。お互いを「批評」し合い、更なる向上を目指す愛というよりは、互いの「情合」がぴったり「融け合」うのが、お延の求めている愛であり、理念よりは情である。また、子どもに対する責任の観念、つまり相思の二人からより進化した子供が生まれるという「新しい女」の考え方はお延には見られない。結婚後半年のお延は津田の愛を自分に惹きつけて、ふたりの家庭を確立する事が第一義であって、子どもにまで気が及ばないのかもしれない。世間的な「子はかすがい」の発想もまったくないようだ。

お延が求めているのは、『明暗』の言葉を借りて端的に言えば、「夫婦和合」である。岡本家で叔父から「陰陽不和になった時、一番よく利く薬だよ。」と小切手を渡されたとき、お延自身が「陰陽不和じゃないのよ。あたし達のは本当の和合なのよ」(七十六)と虚勢を張る通りである。本当の和合は、「本式の愛情」(百三十)である。

病院に訪ねてきたお秀との波乱のあと、お延と津田が自然にお互いを解放する部分を読んでみれば、お延の求める愛の姿が具体的にわかる。

二人は何時になく融け合つた。

今までお延の前で対面を保つために武装していた津田の心が吾知らず弛んだ。自分の父が吝嗇らしく彼女の眼に映りはしまいかといふ掛念、或は自分の予期以下に彼女が父の財力を見縊りはしまいかという恐れ、二つのものが原因になつて、成る可く京都の方面に曖昧な幕を張り通さうとした警戒が解けた。さうして彼はそれに気付かずゐた。努力もなく意志も働かせずに、彼は天然自然の力で其所へ押し流されて来た。用心深い彼をそつと持ち上げて、事件がお延のために彼を其所まで運んで来てくれたと同じ事であつた。お延にはそれが嬉しかつた。改めやうとする決心なしに、改まつた夫の態度には自然があつた。

同時に津田から見たお延にも、亦それと同様の趣が出た。(略)それでさへ彼は何処かに烟たい所を有つてゐた。少なくとも彼女に対する内と外には大分の距離があつた。目から鼻へ抜けるやうなお延にはまたその距離が手に取る如くに分つた。必然の勢い彼女は其所に不満を抱かざるを得なかつた。然し彼女は夫の虚偽を責めるよりも寧ろ夫の淡泊でないのを恨んだ。彼女はたゞ水臭いと思つた。何故男らしく自分の弱点を妻の前に曝け出して呉れないのかを苦にした。仕舞には、それを敢てしないやうな隔りのある夫なら、此方にも覚悟があると一人腹の中で極めた。すると其態度がまた木霊のやうに津田の胸に反響した。二人は何処迄行つても、直に向き合ふ訳に行かなかつた。しかも遠慮があるので、成るべく其所には触れないやうに慎んでいた。所が、お秀との悶着が、偶然にもお延の胸にある此扉を一度にがらりと敲き割つた。しかもお延自身豪も其所に気が付かなかつた。彼女は自分を夫の前に開放しようといふ努力も決心もなしに、天然自然自分を開放してしまつた。だから津田にもまるで別人のやうに快く見えた。

二人は斯ういふ風で、何時になく融け合つた。(百十三)

「淡泊」という言葉は『明暗』に頻出する。漱石の作品の中に好んで使われるこの言葉は、心にこだわりをもたず、率直でさっぱりと気持ちのよい人間(特に男性)の態度を表す言葉として頻出する。しかし、津田は研究家で「淡泊」でないのが欠点だと吉川夫人やお秀に批判されている。お延も、普段の津田に「淡泊」さがないのを不満に思っているが、このときの津田は日ごろの用心深さがなくなり、素直に自分の心を見せる「淡泊」であつたために、お延は嬉しかつたのである。

つまり、お延が望んでいるのは、夫が、「隔たり」のない正直な心で、「弱点」も何もかも打ち明けて心を許してくれることである。そんな夫に自分もまた自然に心を開放して寄り添い、「融け合」いたいのである。お延は決して「技巧」を好んでいるのではない。本当はそんなものの必要ない夫との温かい「情合」の世界を求めているのだ。

お延は自分では「良妻」であろうとしながらも、忍耐や従属をよしとすることのできない極めてインデペンデントな女性で、「新しい女」の資質も多分に持っている女性である。しかし、彼女が求める愛は、「新しい女」の求めた霊肉一致の愛によって両性が常に向上していくといった理念的な愛とは違う。もっと根源的で日常的な「情合」であり、優しさにすべてをゆだねて「愛されたい」のである。

お延はこのように、「良妻賢母」からも「新しい女」からもずれた、オリジナルな女性として生きている。

第四章 お延の「技巧」と『明暗』の結末

一 「技巧の女」お延

第二・三章で見て来たように、お延は、単純に「このような女」とくくれるような女性ではない。「新しい女」に匹敵する知性と強い自我を持ちながら「良妻」を内在させ、またそれを強く志向しながら、夫婦の「本式の愛」を強く求めるがためにそれから逸脱し、自ら意図することなしに、「新しい女」的な行動に出ようとする。お延の中には古さと新しさが混在し、オリジナルな人間像となっている。

しかし、お延の複雑性は、お延が『明暗』の中で変化していくことによって、さらに強められている。

角を曲つて細い小路へ這入った時、津田はわが門前に立っている細君の姿を認めた。その細君はこつちを見ていた。しかし津田の影が曲り角から出るや否や、すぐ正面の方へ向き直った。さうして白い繊い手を額の所へ翳すようにあてがって何か見上げる風をした。彼女は津田が自分のすぐ傍へ寄つて来る迄其態度を改めなかった。

「おい何を見てゐるんだ」

細君は津田の声を聞くとさも驚ろいたように急に此方をふり向いた。

「あゝ吃驚した。——御帰り遊ばせ」

同時に細君は自分のもつてゐるあらゆる眼の輝きを集めて一度に夫の上に注ぎ掛けた。それから心持腰を曲めて軽い会釈をした。

半ば細君の嬌態に応じやうとした津田は半ば逡巡して立ち留まつた。

「そんな所に立つて何をしてゐるんだ」

「待つてたのよ。御帰りを」

「だつて何か一生懸命に見てゐたぢやないか」

「えゝ。あれ雀よ。雀が御向ふの宅の二階の底に巢を食つてゐるんでせう」

津田は一寸向ふの宅の屋根を見上げた。然し其処には雀らしいものゝ影も見えなかつた。細君はすぐ手を夫の前に出した。

「何だい」

「洋杖」 (三)

お延の登場場面である。お延は、津田の気を惹くためにわざとらしい姿勢をする女として登場し、始めから、「技巧の女」であると強く印象付けられる。そこで、『虞美人草』の「小刀細工をする」女・藤尾のようにお延の内面に「欠陥」が潜んでいて、後にそれが暴かれ、処罰されるという筋を予測した大石^(六十五)のような読者もいたのである。

中村美子^(六十六)は、「技巧」を次のように定義している。

単純に、意のまま自然のままに行動するのではなく、人間関係において的確に状況を判断し、嘘や虚偽、策を弄する、言うべきことを言わないことなども含めて、ある目的のために作爲的な行動をすることを、お延の自己批評から言葉を借りて、「技巧」(五十三)を用いる、と表現することができると思われる。

確かに、『明暗』では、お延は右のような「技巧」を用いている。始めにあげた部分の他にも次のような場面がある。

お秀と自分ら夫婦の間に起つた波瀾が、あゝまで際どくならずすんだなら、お延は行掛り上、是非共津田の腹のなかにいるこの相手を、遠くから探らなければならぬ順序だつたのである。

お延は其プログラムを狂はせた自分を顧みて、寧ろ幸福だと思つた。気掛りを後へ

繰り越すのが辛くて耐らないとは決して考へなかつた。それよりもこの機会を出来るだけ緊張させて、親切な今の自分を、強く夫の頭の中に叩き込んで置く方が得策だと思案した。

斯う決心するや否や彼女は嘘を吐いた。それは些細の嘘であつた。けれども今の場合に、夫を物質的と精神的の両面に亘つて、窮地から救ひ出したものは、自分が持つて来た小切手だといふ事を、深く信じて疑はなかつた彼女には、寧ろ重大な意味を有つてゐた。(百十二)

悩乱のうちにまだ一分の商量を余した利巧な彼女は、夫のかけた鎌を外さずに、すぐ向ふへ掛け返した。

「ぢや本当を云ひませう。実は小林さんから詳しい話をみんな聴いてしまつたんです。だから隠したつてもう駄目よ。貴方も随分非道い方ね」

彼女の云ひ草は殆ど出鱈目に近かつた。けれどもそれを口にする氣持からいふと、全くの真剣沙汰と何の異なる所はなかつた。彼女は熱を籠めた語氣で、津田を「非道い方」と呼ばなければならなかつた。

反響はすぐ夫の上に来た。津田は此出鱈目の前に退避ろぐ氣色を見せた。お秀の所で遣り損なつた苦い経験にも懲りず、又同じ冒険を試みたお延の度胸は酬いられさうになつた。(百四十八)

「嘘を吐いた」「鎌を外さずに、すぐ向こうへかけ返す」お延は、明らかに「状況を判断」し、「ある目的のために」「作爲的な行動」をしている。しかし、一見お延の「技巧」と感じられるところが、実は偶然であつたり、津田の先入観から来ている場合もあるのである。

津田の宅へ帰つたのは、昨日よりは稍早目であつたけれども、近頃急に短くなつた秋の日脚は疾くに傾いて、先刻迄往来に丈残つていた肌寒の余光が、一度に地上から払い去られるように消えて行く頃であつた。

彼の二階には無論火が点いてゐなかつた。玄関も真暗であつた。今角の車屋の軒灯を明らかに眺めて来た許の彼の眼は少し失望を感じた。彼はがらりと格子を開けた。それでもお延は出て来なかつた。(略)すると思いがけない二階の方で「はい」とい

ふ返事がした。それから階子段を踏んで降りて来る彼女の足音が聞こえた。同時に下女が勝手の方から駆け出して来た。

「何をしてゐるんだ」

津田の言葉には多少不満の響きがあつた。お延は何にも云はなかつた。然し其顔を見上げた時、彼は何時もの通り無言の裡に自分を牽き付けやうとする彼女の微笑を認めない訳に行かなかつた。白い齒が何より先に彼の視線を奪つた。

「二階は真暗ぢやないか」(十八)

津田は、真つ暗な二階から下りて来たお延が「何も云わな」いこと、「いつもの通り無言の裡に自分を牽きつけやうとする彼女の微笑」を「技巧」ととらえている。しかし、このときお延は、津田が入院中に着られるように「襦袢」を縫っており、日脚の傾いたのにも気付かなかつたのかもしれないし、その疲れから眠ってしまったのかもしれない。先にも書いたが、津田に内緒で二、三日の間に襦袢を完成させようとすれば、相当根をつめる必要がある。とすれば、「昨日の今頃待ち伏せでもするようにして彼女から毒気を抜かれ」た津田が、今日もお延の作為に翻弄されているとは言えないのではないだろうか。また、次の場面は完全に津田の誤解である。

然しお時のぢかに来る前に、津田へ電話の掛つて来た事も慥であつた。彼は階子段の途中で薬局生の面倒臭さうに取り次ぐ「津田さん電話ですよ」といふ声を聞いた。彼はお秀との対話を一寸已めて、「何処からです」と訊き返した。薬局生は下りながら、「大方お宅からでせう」と云つた。冷淡な此挨拶が、つい込み入つた話に身を入れ過ぎた津田の心を横着にした。芝居へ行つたぎり、昨日も今日も姿を見せないお延の仕うちを暗に快よく思つていなかった彼を猶不愉快にした。

「電話で釣るんだ」

彼はすぐ斯う思つた。昨日の朝も掛け、今日の朝も掛け、ことによると明日の朝も電話丈掛けて置いて、散々人の心を自分の方に惹き着けた後で、ひよつくり本当の顔を出すのが手だらうと鑑定した。お延の彼に対する平生の素振から推して見ると、この類測に満更な無理はなかつた。彼は不用意の際に、突然としてしかも静肅に自分^{しとやか}を驚ろかしに這入つて来るお延の笑顔さへ想像した。その笑顔が又変に彼の心に影響して来る事も彼には能く解つていた。彼女は一刹那に閃めかすその鋭い武器の力で、

いつでも即座に彼を征服した。今迄持ち応へに持ち応へ抜いた心機をひらりと転換させられる彼から云えば、見す見す彼女の術中に落ち込むやうなものであつた。

(九十八)

昨日、病院に行けないことを電話で伝えたのは、「お延に親切の仕損をさせておいて、それが女の義務じゃないかといった風に、取り澄ま」すような津田への不満から、「昨夕吉川夫人から受け取ったらしく自分では思っている、夫に対する一種の感情を、つい電話口で洩らしてしまった」(五十八)からである。また、「今日の朝もかけ」たのは、小林に外套を渡していいかを聞き合わせるためで、しかもかけたのはお延でなくお時であり、「書生だか薬局員だかが」「お時の用事を津田に取次いで呉れなかったらしい」(八十七)ため、津田には家から電話があつたということしか伝わらなかったのである。どちらも津田が思っているように「電話で釣る」技巧ではなく、「さんざん人の心を自分の方に惹き着けた後で、ひょつくり本当の顔を出すのが手だろう」というのは、先入観から来る誤解である。

お延は、登場から始まって「技巧」を多用する印象を強く読者に与え続けるが、その中には、ここで指摘したように津田の意識が勝手に作り上げた「技巧」もあることに注意したい。『明暗』には、そんな「常に技巧を操る女お延」という先入観を、あえて誘う書きぶりがなされていると言つてもよい。そんな女性が実は内面、さらにその深層にデリケートなものを抱え^(六十七)、次第に自然の女に変化して津田にぶつかっていくとしたら、読者は新鮮な驚きを感じるはずだ。『明暗』一篇は、そんな漱石のたくらみに満ちた作品なのではないだろうか。

漱石は、大石に宛てた返事で次のようにも述べている。

斯ういふ女の裏面には驚くべき魂胆が潜んでゐるに違いないといふのがあなたの予想で、さう云ふ女の裏面には必ずしもあなたの方の考えられるやうな魂胆ばかりは潜んでゐない、もつとデリケートな色々な意味からしても矢張り同じ結果が出得るものだといふのが私の主張になります。

この章ではお延の「技巧」を見、「技巧」の生まれるお延の「デリケート」な内面に迫りたい。そしてお延の変化が、未完の『明暗』の結末とどのように関わる可能性があるか

を考えて行きたい。

二 お延の技巧

「伶俐」で、自分にも「五分の寛ぎさへ残しておく事のできない性質に生れついていた」(百八十五) お延は、「如何にして異性を取り扱ふべきかの修養」(六十二)「人間としてまた細君としての大事な稽古」(六十七)の初歩を叔母からを習い、叔父によってそれを発展させた。それは「不幸にして女を善くするものではなかった。然し女を鋭敏にするものであつた。悪く摩擦するには相違なかつた。然し伶俐に研ぎ澄すものであつた」(六十七)のだ。

お延は人間関係に対する鋭敏さを生まれつき持っていた。^(六十八)さらに、小さい頃から叔母夫婦に預けられることで、彼女の人間観察力や人間の中で身を処していく能力はより高まらざるを得なかつた。そうして次のような叔父との関係の中で、異性にも自分にも満足を与えられるやり方である「技巧」「腕」^(六十九)を「今日に発展させてきた」のである。

洒落でありながら神経質に生れ付いた彼の気合を能く呑み込んで、その両面に行き渡つた自分の行動を、寸分違はず叔父の思ひ通りに楽々と運んで行く彼女には、何時でも年齢の若さから来る柔軟性が伴つてゐたので、殆ど苦痛といふものなしに、叔父を喜ばし、又自分に満足を与へる事ができた。叔父が鑑賞の眼を向けて、常に彼女の所作を眺めてゐて呉れるやうに考へた彼女は、時とすると、変化に乏しい叔母の骨は何うしてあんなに堅いのだらうと怪しむ事さへあつた。(六十二)

お延は、叔父との関係において異性に対する自らの「腕」に相当な自信を持つようになつた。だから、「夫が親切に親切を返して呉れないのを、足りない自分の不行届からでも出たように、傍から解釈されてはならないと日頃から掛念してゐた。凡ての噂のうちで、愚鈍という非難を、彼女は火のやうに恐れていた。」「女として男に対する腕を有つてゐないと自白するのは、人間でありながら人間の用をなさないと自白する位の屈辱として、お延の自尊心を傷けた」(四十七)のである。

お延に対して岡本の実子(長女)である継子は、実家の父母のもとで、いわゆる「気兼ね」もなく、「自分に許された小天地のうちでは飽く迄放恣」(六十七)に育

った。お延は劇場の廊下を歩きながら、心の中で継子に言う。

「あなたは私より純潔です。私が羨やましがる程純潔です。けれどもあなたの純潔は、あなたの未来の夫に対して、何の役にも立たない武器に過ぎません。私のやうに手落なく仕向けてすら夫は、決して此方の思ふ通りに感謝して呉れるものではありません。あなたは今に夫の愛を繋ぐために、其貴い純潔な生地を失わなければならぬのです。それ丈の犠牲を払つて夫のために尽してすら、夫はことによるとあなたに辛く中るかも知れません。私はあなたが羨ましいと同時に、あなたがお気の毒です。近いうちに破壊しなければならぬ貴い宝物を、あなたはそれと心づかずに、無邪気に有つているからです。幸か不幸か始めから私には今あなたの有てあるやうな天然其儘の器が完全に具はつて居りませんでしたから、それ程の損失もないのだと云へば、云はれないこともないでせうが、あなたは私と違ひます。あなたは父母の膝下を離れると共に、すぐ天真の姿を傷けられます。あなたは私よりも可哀相です」(五十一)

ここで、「幸か不幸か始めから私には今あなたのもつてゐるやうな天然そのまゝの器が完全に具わっておりませんでした」というように、お延は「始めから」異性に対する精神的な純潔性を失つていたと意識している。夫たる異性に対して妻は「手落なく仕向け」なければならぬ。その時には天然自然の心でばかりは当たれない。夫の様子を観察して相手の氣に入るように仕向けてかからねばならない。そこに妻としての「修養」(六十二)「稽古」(六十七)が在るのだが、それは自己の天然自然の純潔を傷つけるものなのだ。お延は、それをよくわかつてゐる。そうして「天然其儘の器が完全に具わつて」いなかった自分に一抹の寂しさを感じながらも、あくまでも自己の目的のために「腕」を肯定する人物に描かれている。

お延は自分の「腕」に自信をもち、津田の愛を得るためにそれを用いる女性である。しかし、先にも書いたとおり、彼女は「技巧」を好んでゐるわけではなく、それをつかうのは「愛されたい」という気持ちが非常に強いためである。それは、お延の「叫び」として現れる。

「誰でも構わないのよ。ただ斯うと自分で思い込んだ人を愛するのよ。そうして是非

その人に自分を愛させるのよ」

「誰だつて左右よ。たとひ今その人が幸福でないにした所で、其人の料簡一つで、未来は幸福になれるのよ。屹度なれるのよ。屹度なつて見せるのよ。ねえ継子さん、左右でせう」(七十二)

彼女は手紙を巻いた。さうして心の中でそれを受け取る父母に断つた。

「この手紙に書いてある事は、何処から何処まで本当です。嘘や、気休めや、誇張は一字ありません。もしそれを疑ふ人があるなら、私は其人を憎みます、軽蔑します、唾を吐き掛けます。その人よりも私の方が真相を知つてゐるからです。私は上部の事実以上の真相を此所に書いてゐます。それは今私に丈解っている真相なのです。然し未来では誰にでも解らなければならぬ真相なのです。私は決してあなた方を欺いては居りません。私があなた方を安心させるために、わざと欺騙あざむきの手紙を書いたのだいいうものがあつたなら、その人は眼の明いた盲人です。その人こそ嘘吐です。どうぞ此手紙を上げる私を信用して下さい。神様は既に信用してゐらつしやるのですから」(七十八)

なぜこれほどまでにお延は「愛される」ことにこだわるのか。また、津田と自分が愛しあつてゐることを激しく叫ばなければならないのか。前述のように、石原は「自分で夫を選んだ」「お延のアイデンティティは津田に愛されることによつて完全になる」^(七十七)と言つてゐるが、お延は自分で選んだ夫との新しい家にアイデンティティを確保するためだけに、ここまで激しく叫んでゐるのだろうか。お延の心にはもつと何か欠落したものがあつて、それを埋めんがために必死になつてゐるようにも思える。津田の自分への愛に自信を失い、再びそれを勝ち取ろうとするお延の必死さは、彼女の内面の空虚によつて、一層苛烈になつてゐるように感じるのだ。一体それは何なのか。

三 「技巧」の奥にあるもの

お延と津田の出会いの場面では、お延が津田の何に魅力を感じたのかが窺える。軽い神経痛に悩まされた父の代わりに、書物を借りるために津田家に赴いたお延と、その日の午後、書物を探して持ってきた津田の様子を次にあげてみよう。

由雄は其時お延から帙入りの唐本を受け取って、何故だか、明詩別裁という厳めしい字で書いた標題を長らくの間見詰めてゐた。その見詰めてゐる彼を、お延は又何時までも眺めてゐなければならなかつた。すると彼が急に顔を上げたので、お延が今迄熱心に彼を見てゐた事がすぐ發覺してしまつた。然し由雄の返事を待ち受ける位置に立たせられたお延から見れば、是も已むを得ない所作に違なかつた。(略)すると津田が又呼び留めて、自分の父宛の手紙を、お延の見てゐる前で、断りも何もせず、に開封した。此平氣な舉動がまたお延の注意を惹いた。彼の遣口は不法法であつた。けれども果断に違なかつた。彼女は何うしても彼を粗雑がきつとか乱暴とかいふ言葉で評する氣にならなかつた。

(略)

すると其日の午後由雄が向ふから望みの本をわざわざ持つてきて呉れた。偶然にもお延がその取次に出た。二人は又顔を見合せた。さうして今度はすぐ両方で両方を認め合つた。由雄の手に提げた書物は、今朝お延の返しに行つたものに比べると、約三倍の量があつた。彼はそれを更紗の風呂敷に包んで、恰も鳥籠でもぶら下げてゐるやうな具合にしてお延に示した。

彼は招ぜられるまゝに座敷へ上つてお延の父と話をした。お延から云へば、とても若い人には堪へられさうもない老人向けの雑談を、別に迷惑さうな様子もなく、方角違いの父と取り換わせた。(略)それでも此方から借りに行つた呉梅村詩という四文字を的に、書棚を彼方此方と探して呉れたのであつた。(七十九)

津田の外見に惹きつけられたお延は、次に彼の「果断」さに目を見張り、午後には彼の優しさを知る。お延が津田を愛したのはこのような津田の特質を愛したからである。

津田は、岡本の叔父が、「あの男は日本中の女がみんな自分に惚れなくつちやならないやうな顔付をしているぢやないか」(六十二)と言う通り、自分に己惚れ得る程に、美しく出来あがつている男性である。彼の外見は、「好い恰好をした鼻柱」(百二)「彼は背の高い男であつた。長い足を楽に延ばして、それを温泉ゆの中で上下へ動かしながら、透き徹るものゝうちに、浮いたり沈んだりする肉体の下肢を得意に眺めた」(百七十四)「彼は目鼻立ちの整つた好男子であつた。顔の肌理も男としては勿体ない位濃やかに出来上がつてゐた。彼は何時でも其所に自信を有つていた。鏡に対する結果としては此自信を確かめる場合ばかりが彼の記憶に残つてゐた」(百七十五)と描かれている。「器量好みで貰わ

れた」お秀の兄である彼は、お秀のような「涼しい目元」と「きりりと緊まつた口元」から「白い歯」ののぞく「きちりと整った目鼻」(九十七) 立ちの美青年であり、背が高くスタイルもいい。それだからこそ吉川夫人にも「ひいき」にされるのである。

美男の津田に対して、お延の方はどうだったろうか。お延の方は「目鼻」の良さは書かれていない。彼女は、「色の白い」「その所為で形の好い彼女の眉が一際引き立つて見えた」女性で、「癖のように能くその眉を動かした」。彼女の眼は「細すぎ」て、「愛嬌のない一重瞼」なのだが、瞳は漆黒で「非常によく働」き、「或る時は専横といつていい位に表情を恣にして」(以上 四) 津田の心を惹きつけた。彼女の「笑顔」は「彼女は一刹那に閃かすその鋭い武器の力で、何時でも即座に彼を支配した。」(九十八) と語られる程に津田に愛されている。また、彼女は、「美しい白い歯」と「柔婉な体格」(百三) を持っている。知的で表情がよく動き笑顔の魅力的な彼女は、歯も白く健康的で体型もすらりとしており、現代からみれば、「美人」の範疇に入ろう。

しかし、継子と比較すると、お延は、「姿恰好は継子に立ち勝つていても、服装や顔形では非ひけを取らねばならなかった」(五十二) と語られる。「女は何うしても器量がよくないと損ね。いくら伶俐でも、気が利いてゐても、顔が悪いと男には嫌われるだけね」(八十) とお時に話しかけるように、彼女は、自分の「顔が悪い」ことにコンプレックスを持っている。当時はまだ「顔」の造作の美しさが、女性の美の最大のポイントであり、表情の美しさやスタイルの良さは今ほど評価されていなかったからである。

「婦人画報」大正三年三月号には、新渡戸稲造が「みめよりこころ」という論文を載せている。この論文の主旨は、「みめよりこころ」というように、「美といふものは形に現れたものではなく、美をなす業であつた、無形のものでありますから、心の美が外に現われて美を成すので、其所に美の光が添つて醜い顔が美しく見えるのであらうと思われます」というものだが、新渡戸は、話の始めに次のようなことを書いている。

日本の美人というのは、瓜実顔の色白で、鼻筋の通つた、眼のパツチリしたのを標準にしてあるやうであります、表情といふことは、美人たる条件に加へてはないやうである。けれども表情のないのは死に物同様で、寂しい感じのするものです。

新渡戸は、欧米の女性が表情豊かで魅力的であることに対して、日本の女性に表情の乏しいことを嘆いているのである。つまり、それだけ一般にはまだ、顔かたち、ここであ

「鼻」「目」が整っていることが重要視され、内面をよく表す生き生きとした表情は重視されていなかったことがわかる。お延は「目は細過ぎた」点で、この当時の美人ではなかった。彼女は「慇懃で」「気が利いて」いる自分に自信を持っているが、顔の問題で美人ではないことに劣等感をもっている。それが美男の津田に一目ぼれをさせた要因といえるのではないか。自分にはない涼やかな眼鼻立ちの好男子である津田に、お延の心は一気に引きつけられたようだ。いわば、コンプレックスの裏返しである。

自分の眼を信じ（周りから信じ込まされ）、津田という男性に一目ぼれをしたお延は、男を見損なっていたことを後から知ることになったのである。

結婚後もお延は、従妹の継子や義妹のお秀という美人達に囲まれて、「容貌の劣等者」（六十七）という意識を去ることが出来ない。「美しさ」（この時代は、ぱっちりした二重の目で、顔かたちが整っていること）という、お秀には有る愛の「保証」がお延にはない。自分の容貌に対する自信の無さが、津田の愛に安心感をもてない一因ということが言えるのではないだろうか。それが、津田の愛を強く自分にひきつけなければという気負いとして現れてくるということが言えよう。

また、お延が「愛されること」にこだわる理由には、次のような事情もあるのではないかとと思われる。小さい時に親身の叔母とその夫である叔父夫婦に預けられたお延は、叔父夫婦の実子たちと「区別」（六十七）の無いように対応されて育った。しかし、叔父夫婦の長女継子の見合いという事件によって、「区別」が露呈される。例えば、「姿恰好は継子に立ち勝っていても、服装や顔形で是非ひけを取らなければならなかった彼女」（五十二）とあるように、叔父夫婦の見立てで嫁入り道具の一つとして持たされたはずのお延の着物は、継子の着物にひけをとるものであった。また、「人間として又細君としての大事な稽古」（六十七）とお延が考える「如何にして異性を取り扱うべきかの修養」（六十二）を、お延自身は「その初歩を叔母から習」い、「叔父のお蔭でそれを今日に発展させてきた」のであり、「二人はそういう意味で育て上げられた彼女を、満足の眼で眺めているらしかつた」（六十七）のに、娘の継子がそのような「修養」を積まず、処女としての「純心」な「天然其儘の器」（五十二）をもっていることに満足しているように見える。

「それと同じ眼が何うしてあの継子に満足できるだらう」

従妹の何処にも不平らしい素振りさえ見せた事のない叔父叔母は、此点に於てお延に不可解であつた。強いて解釈しやうとすれば、彼等は姪と娘を見る眼に区別をつけ

てゐるとでも云ふより外に仕方がなかった。斯ういふ考へに襲はれると、お延は突然口惜しくなった。さういふ考へが又時々発作のやうにお延の胸を擱んだ。然し城府を設けない行き届いた叔父の態度や、取扱いに公平を欠いた事のない叔母の親切で、それは何時でも燃え上がる前に吹き消された。彼女は人に見えない袖を顔へ中てゝ内部の赤面を隠しながら、矢つ張不思議な眼をして、二人の心持を解けない謎のやうに不
断から見詰めてゐた。

「でも継子さんは仕合せね。あたし見たいに心配性でないから」

「あの子はお前よりもずつと心配症だよ。たゞ宅にゐると、いくら心配したくつても心配する種がないもんだから、あゝして平気でゐられる丈なのさ」

「でもあたしなんか、叔父さんや叔母さんのお世話になつてゐた時分から、もつと心配症だつたやうに思ふわ」

「そりやお前と継とは……」

途中で止めた叔母は何をいふ氣か解らなかつた。性質が違ふといふ意味にも、身分が違ふといふ意味にも、また境遇が違ふといふ意味にも取れる彼女の言葉を追究する前に、お延ははつと思つた。それは今迄氣の付かなかつた或物に、突然ぶつかつたやうな動悸がしたからである。

「昨日の見合に引き出されたのは、容貌の劣者として暗に従妹の器量を引き立てるためではなかつたらうか」(六十七)

岡本家で継子らと何の隔てもなく育てられたお延だが、結婚に関しては、岡本のお延への扱いと娘継子への扱いは大きく異なっている。

継子は、女学校卒業後「欲張り」といわれるほどの習い事をし、来るべき結婚に備えている。女学校卒業後二年で、洋行帰りの紳士(夫の仕事に必要な語学を習っているところから彼は外交官かと思われる)との見合いが仕組まれ、人もうらやむ生活がそこに見えている。本人はただ純真に恥ずかしがっているだけで、親がきちんと将来の心配のない夫を見付けて、結婚をお膳立てしているのである。いわば親によつて保護された結婚である。

一方お延が女学校を卒業してから、津田と結婚する二十三歳までには、少なくとも六年という年月が経っている。継子のような美貌がないにしても、如何に「自由結婚」に憧れていたにしても、六年の間にはそれなりの縁談があつて、もつと早くに結婚しているのが彼女のような上流の境遇なら普通ではないか。ここに、姪と娘の明確な「区別」があり、未

来の夫は腕でつれという暗黙の岡本家の意思があつたといつたら言い過ぎだろうか。

お延は小さい頃から、岡本に預けられ、本当の父母の愛情を十分に注がれない中で育た。お延は岡本が好きなのだが、彼はやはり叔父であり、父ではない。岡本の気合を呑み込んで彼を自由にする腕をもったお延は、一方で甘えきれる父親を失っている。何の「技巧」がなくても、存在そのものを愛して貰う感覚が彼女には希薄である。だからこそあの手この手の「技巧」を使って「愛」を引き寄せる必要があるのだ。

以上のように、お延の中には容貌への劣等感と愛される感覚の希薄さがある。それがお延の内面のデリケートな部分といってもいいだろう。その欠落感が、彼女に常に津田に「愛されている」実感を求めさせる。そして、彼女を夫婦の「愛」によって成り立つ新しい家庭という「理想」の実現へと駆り立てるのではないだろうか。

お延は津田への疑いを晴らすため、ついに「緊張」が「破裂して」(百五十二)「感情の潮」(百五十)のままに次のように津田に言っている。

「何うぞ、あたしを安心させて下さい。助けると思つて安心させて下さい。貴方意外にあたしは憑り掛り所のない女なんですから。あなたに外されると、あたしはそれぎり倒れてしまわなければならない心細い女なんですから。だからどうぞ安心しろと云つて下さい。たった一口で可いから安心しろと云つて下さい」(百四十九)

安心して「愛される」ことこそ、彼女が真に求めるものなのではないか。

四 お延の変化―技巧から自然へ―

漱石は大正四年に、「技巧」について次のように書いている。

○技巧ハ即チ偽ル者ニアラズ、己ヲ飾ルモノニアラズ、人ヲ欺クモノニアラズ。己ヲ遺憾ナク人ニ示ス道具ナリ。人格即技巧ナリ。(七十一)

「技巧」が「己ヲ遺憾ナク人ニ示ス道具ナリ。人格即技巧ナリ」とはどういう意味だろうか。自己を十分に相手に知らせるための一種の表現力とでも言えいいのか。そこに、その人その人の人格が出ることを「人格即技巧」と言うのだろうか。ここには、特に女性の「技巧」を嫌い抜き、作品にも登場させ続けた漱石の認識の、ある到達点が示されているといえよう。

『道草』には、次のような場面がある。

「女は子供を専領してしまうものだね」

細君は驚ろいた顔をして夫を見返した。其所には自分が今まで無自覚で実行して来た事を、夫の言葉で突然悟らされたやうな趣もあつた。

「何で藪から棒にそんな事を仰やるの」

「だってさうぢやないか。女はそれで氣に入らない亭主に敵討をするつもりなんだから」

「馬鹿を仰やい。子供が私の傍へばかり寄り付くのは、貴夫が構い付けて御遣りなさらないからです」

「己を構い付けなくさせたものは、取も直さず御前だらう」

「どうしても勝手になさい。何ぞというと僻みばかりいつて。どうせ口の達者な貴夫には敵いませんから」

健三はむしろ真面目であつた。僻みとも口巧者とも思わなかつた。

「女は策略が好きだからいけない」

細君は床の上で寐返りをしてあちらを向いた。そうして涙をぼたぼたと枕の上に落した。

「そんなに何も私を虐めなくつても……」

細君の様子を見ていた子供はすぐ泣き出しそうにした。健三の胸は重苦しくなつた。彼は征服されると知りながらも、まだ産褥を離れ得ない彼女の前に慰藉の言葉を並べなければならなかつた。しかし彼の理解力は依然としてこの同情とは別物であつた。

細君の涙を拭いてやつた彼は、その涙で自分の考えを訂正する事が出来なかつた。

(略)

「何といつたつて女には技巧があるんだから仕方がない」

彼は深く斯う信じてゐた。あたかも自分自身は凡ての技巧から解放された自由の人であるかのやうに。(八十三)

漱石は、健三の目から見たお住の行動を「策略」「技巧」と言いながら、健三自身がまた、「凡ての技巧から解放された自由の人」ではないと言い、健三を客観的に批判している。「技巧」は人間を不自然にするが、社会の中で生きるすべての人間には「技巧」が必

要なのだという漱石の認識がここに現れている。

先に挙げた「己ヲ遺憾ナク人ニ示ス道具ナリ」という言葉はこれをさらに進めて、技巧を対人関係における自己表現能力ととらえ、プラスの価値を与えたものといえる。

漱石の認識は明らかに『虞美人草』や『三四郎』を書いた頃より高まっている。

お延の「技巧」もまた、夫に不快感を与える負の面をもちながら、対人関係において相手にも自分にも満足を与えながらうまく自己を表現していく正の面を持つ能力でもある。相手の内面を見抜き、自分の身の処し方を即座に考えて言動に移す。お延は、そうした知的能力が高いのである。

お秀の家での議論には、お延のこの能力が生かされる。お秀が津田に「嫂さんを大事にしていながら、まだ他にも大事にしている人があるんです」（百二）と言っているのを聞いたお延は、その「真相」（百八十七）に迫ろうとしてお秀に対し、相手をいい気持ちにさせながら、次々と繰り出される相手の言葉を読んで身の処し方を決して行く。お秀の家での二人の議論は緊迫したお延の心理がよく伝わってくる場面なのだが、例えば次のような部分にもお延の力が出ていると言えるだろう。

やがてお延の胸に分別が付いた。それは外でもなかった。此問題を活かすためには、お秀を犠牲にするか、又は自分を犠牲にするか、何方かにしなければ、到底思ふ壺に入つて来る訳がないといふ意味合であつた。（略）最後に彼女はある時機を掴んで起つた。さうして其起つた時には、もう自分を犠牲にする方に決心してゐた。

（百二十六）

「さう云われると、何と云つて可いか解らなくなるわね、あたしなんか。津田に愛されてゐるんだか、愛されてゐないんだか、自分ぢやまるで夢中であるんですもの。秀子さんは仕合せね、そこへ行くと。最初から御自分にちやんとした保証がついてゐらつしやるんだから」（百二十七）

お延は、あえて自分を否定して相手を肯定するという「技巧」によつて、「空裏に飛翔する」お秀を、具体的な愛の問題へと引きずり降ろそうとしたのである。

ところが、このようにお延が、自分の知的な「技巧」で相手から何か引き出そうとするところで、ついに「技巧」を使わず、相手に「飛びかかつ」ていく場面が出てくるのである。お秀との場合は、次のような場面がそれである。

彼女は思ひ切つて一足飛びに飛んだ。情実に絡まれた窮屈な云い廻し方を打ち遣つて、面と向き合つたままお秀に相見しようとした。其代り言葉は何うしても抽象的にならなければならなかつた。それでも論戦の刺撃で、事実の面影を突きとめる方が、まだ増しだと彼女は思つた。

「一体一人の男が、一人以上の女を同時に愛する事が出来るものでせうか」

(百二十八)

お秀は何処からでも入らつしやいといふ落付を見せた。お延の腋の下から膏汗が流れた。彼女は突然飛びかゝつた。

「秀子さん、あなたは基督教信者ぢやありませんか」(略)

「さう。ぢやそれでも可いわ。延子さんは大方基督教がお嫌ひなんでせう」

「いゝえ好きなのよ。だからお願いするのよ。だから昨日のような氣高い心持になつて、この小さいお延を憐れんで頂きたいのよ。もし昨日のあたしが悪かつたら、斯うしてあなたの前に手を突いて詫まるから」

お延は光る宝石入の指輪を穿めた手を、お秀の前に突いて、口で云つた通り、実際に頭を下げた。

「秀子さん、何うぞ隠さずに正直にして下さい。さうしてみんな打ち明けて下さい。

お延は此の通り正直にしています。この通り後悔してゐます」

持前の癖を見せて、眉を寄せた時、お延の細い眼から涙が膝の上へ落ちた。

(百二十九)

もちろん、この後でもお延は、「吉川の奥さんからも伺つた事があるのよ」(百二十九)
「そりや解つてるのよ。あなたのなすつた事も、あなたのなすつた精神も、あたしにはちやんと解つてるのよ。だから隠し立をしないで、みんな打ち明けて頂戴な。お厭？」などと嘘もついているから、ここでお延が「技巧」を全く捨て去つた天真の人に変わったわけではないのだが、「飛びかか」るそのとき、お延は作為を捨て、捨て身になつてすることに注意しなければならない。

先にも述べたように、お延は、登場の場面から「技巧」の女として読者に意識され続ける。しかし、ここに見るように、お延はそのような女から、次第に「技巧」を忘れた存在

へと変化していくのである。

はじめ自分の「技巧」によつてことをうまく運ぼうとするお延が、途中からは自己をさらけ出して相手に「飛びかかつ」て行くパターンになっているのは、その後の津田との対決の場面でさらに顕著である。吉川夫人とお延の鉢合わせを避けるために、病院へ来ないようにとお延に手紙を出した津田を、お延は追窮する。「極めて平和な暗闘」、「戦争」(百四十七)と表現されている通り、この場面は夫と妻のどちらが勝つかという勝負の場面である。しかし、実は「ある意味からいふと、毎日土俵の上で顔を合せて相撲を取っているやうな夫婦関係」(四十七)と自らも意識していたはずのお延にとって、ここではもはや勝ち負けなどはどうでもよくなっているのだ。

何故心に勝つた丈で、彼女は美しく切り上げられないのだろうか。何故凱歌を形の上にまで迄運び出さなければ気がすまないのだらうか。今の彼女にはそんな余裕が無かつたのである。此の勝負以上に大事なものがまだあつたのである。第二第三の目的をまだ後に控えてゐた彼女は、此所を突き破らなければ、其の後を何うする訳にも行かなかつたのである。

夫のみか、実をいふと、勝負は彼女に取つて、一義の位をもつていなかった。本当に彼女の目指す所は、寧ろ真実相であつた。夫に勝つよりも、自分の疑を晴らすのが主眼であつた。さうして其の疑いを晴らすのは、津田の愛を対象に置く彼女の生存上、絶対に必要であつた。それ自身が既に大きな目的であつた。殆んど方便とも手段とも云はれない程重い意味を彼女の眼先へ突き付けてゐた。(百四十七)

彼女が一口拘泥るたびに、津田は一足彼女から退ぞいた。二口拘泥れば、二足退いた。拘泥るごとに、津田と彼女の距離はだんだん増して行つた。大きな自然は、彼女の小さい自然から出た行為を、遠慮なく蹂躪した。一步ごとに彼女の目的を破壊して悔いなかつた。彼女は暗にそこへ気がついた。けれども其の意味を悟る事はできなかった。彼女はたゞそんな筈はないとばかり思いつめた。そうして遂にまた心の平静を失つた。

「あたしが是程貴方の事ばかり考へてゐるのに、あなたはちつとも察して下さらない」
(百四十七)

津田は答えた。

「大丈夫だよ。安心をしろ」

「本当？」

「本当に安心をしろ」

お延は急に破裂するやうな勢で飛びかかった。

「じゃ話して頂戴。どうぞ話して頂戴。隠さずにみんな此所で話して頂戴。さうして一思ひに安心させて頂戴」

津田は面喰つた。彼の心は波のように前後へ揺き始めた。彼はいつその事思い切つて、何もかもお延の前に浚け出してしまはうかと思つた。(百四十九)

これらのことから解るように、お延が「余裕」の無い状況に置かれ、平生の伶俐さになく、「心の平静を失」(百四十八)い、「感情の潮」(百五十)に流されるままに「偽りのない下手に出て」(百五十)相手にぶつかつていくとき、津田も「何もかもお延の前に浚け出してしまはうか」(百四十九)という気になるのである。(モナリ)言つてみればこの場面はお延の愛の理想の実現へと一歩踏み出した場面だとも言える。

なぜ、お延は「技巧」を捨てて偽りのない自然で相手に「飛びかか」つて行くのか。

漱石は、かつて『道草』に、次のように書いた。

幸にして自然は緩和剤として歇私^{ヒステリ}的里を細君に与へた。発作は都合よく二人の関係が緊張した間際に起つた。(略)

細君の発作は健三にとつての大いなる不安であつた。然し大抵の場合には其不安の上に、より大いなる慈愛の雲が靉靆いてゐた。彼は心配よりも可哀相になつた。弱い憐れなものゝ前に頭を下げて、出来得る限り機嫌を取つた。細君も嬉しそうな顔をした。

だから発作に故意だらうという疑の掛からない以上、また余りに疝癪が強過ぎて、何うでも勝手にしろという気にならない以上、最後に其度数が自然の同情を妨げて、何でさう己を苦しめるのかという不平が高まらない以上、細君の病気は二人の仲を和らげる方法として、健三に必要であつた。(七十八)

フロイトによると「ヒステリー」は、精神的葛藤が処理できず、無意識領域に抑圧され、

その際の精神的エネルギーが形を変えて（転換して）身体的症状や乖離症状になってあらわれたものとされる。^(七十三) お住の場合は、健三との夫婦関係からくる葛藤が無意識状態に抑圧され極限に達した結果、「ヒステリー」の発作があらわれたものと見られる。

お延が「飛びかか」という行動にも、『道草』の「歇私的里^{ヒステリ}」に似たメカニズムが働いている。お延は、「たゞ愛するのよ、さうして愛させるのよ。さうさえすれば幸福になる見込みは幾何でもあるのよ」「其人の料簡一つで、未来は幸福になれるのよ。屹度なつて見せるのよ」（七十二）と言っているように、愛し、愛され（虚偽りのない関係で心の底から融け合う）たいという強い願望をもっている。そのために、「技巧」を使って真実を掴もうとした。しかし、それがうまくいかないときにその葛藤が抑圧され、裸になって「飛びかか」という形に転換されているのだ。お住が「歇私的里^{ヒステリ}」を起こすことと、お延の「飛びかか」することは、愛されたいという切迫した願望の噴出であるという点で共通している。しかし、『道草』と『明暗』が違うのは、『道草』では「歇私的里^{ヒステリ}」という病的表現しか出来なかった女性の自我が、『明暗』では、病的ではなく自然な自己解放として顕現したという点にある。

そこに漱石作品における女性像の進化があると考えられる。

六 『明暗』の結末

お秀の事件の後、「武装していた津田の心が吾知らず弛んで、努力もなく意志も働かせずに、彼は天然自然の力で其処へ押し流されて来」、「改めようとする決心なしに、改まった夫の態度には自然があつた」「お秀との悶着が、偶然にもお延の胸にあるこの扉一度にがらりと敲き割った」「天然自然自分を開放してしまった」（百十三）とあるように、「天然自然の力」が働いて、ふたりは打ち融け合うことが出来た。予期せぬ事件によって、それぞれがそれぞれに作っていた隔てを「吾知らず」捨てて、自己を開放した「自然」な態度になったところに、夫婦の融け合い、つまり「愛」が生まれているのである。

この場面は、夫婦が「融け合」う条件を示している。

『道草』では、妻お住の「歇私的里」が、夫婦の仲を和らげる「自然」が与えた「緩和剤」として「健三に必要であつた」。それは健三に「大いなる不安」と疲労を与えるが、女に支配されることを恐れて妻の前で淡泊になれない彼の我を打ち壊して、「より大いなる慈愛」を発揮させる結果へと導き、夫婦の愛をつなぎ止める。

『明暗』で、お住の「歇私的里」にあたるものが、「事件」「お秀との悶着」といえる。

疑い深く、内と外を使い分ける津田にも、やはり内と外的一致しない伶俐なお延にも余裕を与えることなく、「吾知らず」心を「開放」して自然な態度にしてしまうのが、「事件」なのである。そして、書かれなかった『明暗』の結末には、なんらかの突発的な「事件」があったはずだと私は考えている。

お延は、最後に出てくる場面(百五十四)で、「お腹の中にある勇氣」を「近いうちに」出す時が来るといふ確信を語っている。

「所が其の予言が今に迄度中るから見てゐらつしやいといふのよ」

津田は鼻の先でふんと云つた。それと反対にお延の態度は段々真剣に近づいて来た。「本当よ。何だか知らないけれども、あたし近頃始終さう思つてるの、いつか一度此のお肚の中に有つてる勇氣を、外へ出さなくつちやならない日が来るに違ないつて」

「何時か一度？　だからお前のは妄想と同じ事なんだよ」

「いゝえ生涯のうちで何時か一度ぢやないのよ。近いうちなの。もう少ししたらの何時か一度なの」

「益悪くなる丈だ。近き将来に於て蛮勇なんか亭主の前で發揮された日にや敵わない」

「いゝえ、貴方のためによ。だから先刻から云つてるぢやないの、夫のために出す勇氣だつて」(百五十四)

ここには「技巧」を離れた真剣で率直なお延がいる。

「近いうち」「もう少ししたらのいつか」とお延が言う「勇氣」は実現されるであろう。

お延は、津田を追つて温泉へ行き、そこになんらかの予期せぬ「事件」が発生する。そのときお延は、その「勇氣」を發揮するのではないだろうか。その時のお延は「技巧」の女ではなく自然の姿で相手にぶつかつていくはずである。真実に愛を求めているお延は裸になつて「飛びかかつ」ていくはずだ。そこに「技巧」の入り込む余地はない。虚栄心が強く、技巧の人であるお延は、津田が温泉に立つ前からすでにそうでない人間へと変化しつつあった。「清子」が自然の人であり、彼女によって津田の精神が救済されるという説もある(七十四)が、清子は津田を癒すことはできても、津田を変えることはできない。お延こそが「天然・自然」の人になつて、津田に激しい一撃を加え、彼を動かすはずだ。

お延の「偽りのない」(百五十)気持ちに押されて、「心が波のように前後に動き」(百四十九)、自己を正直にさらけだす衝動にかられていた津田は、次に大きな何かに押され

たとき、ついに心の「余裕」をなくして、「技巧」を捨てるのではないだろうか。

おわりに — 『明暗』開かれゆく小説 —

漱石は『明暗』にすぐれて同時代的な問題を取りこみながら、「愛」という普遍のテーマを追求していたと考えられる。津田の病気が痔なのは、漱石自身の体験を小説に生かそうとした、あるいは虚栄心の強い津田の恥部を否応なく曝け出し、ある意味で裸にしているとする意図だけではなく、性病を患う男性と、病気を夫からうつされて苦しむ女性という現実的な男女の問題を小説の根幹に据えんがためであったと考える。

津田の叔父藤井の弟子である「小林」という社会主義者風の人物によって、現実社会の底辺の問題が中流の津田夫婦の生活に否応なく流入してくることは、すでに指摘されているが、「小林」病院が主要な場所に設定されていることの意味ももっと重視されている。いわば、漱石は『明暗』にふたつの「小林」を取り込むことによって、食欲に社会と小説をリンクさせようとしていたと考えられるからである。

先にも言ったように、夫の不品行による妻の不幸は、すでに明治末から指摘されてきたのだが、大正時代に「新しい女」が社会問題化する中で広く議論されるようになった「婦人問題」（本当は男性問題なのだが）のひとつとして、男性からも重要視されたのであった。大正五年の内ヶ崎作三郎の論文（後に引用）は、妻が夫の不品行で不幸・不健康になっっていることを嘆き、妻の役割を説く点で先に挙げた下田の論と似ているが、より具体的で、また、恋愛による婦人の「感情の訓練」と関わらせている点が時代を映していると言える。

この論文で内ヶ崎は、女学校では生徒の母親の死亡率が父親に比べて高いことを述べ、それは「他人の意志のままに結婚を強いられた此等の婦人は、仮令不健康な夫に嫁いでも、少しも自分自身を保護することを知らない」からだという。そして、婦人を保護するためにも、男子の不品行を防ぐためにも、学校教育で「性に関する理解」「人生の根本義たる性の倫理」を男女ともに教えるべきであると、今日「性教育」と名づけられている教育の必要性をすでに主張している。彼もやはり、夫を不品行に陥らせないための妻の責任を言うが、ここに「感情の訓練」を言うあたりが新しい。彼自身は「忠君愛国」の側からこの問題を見ているのだが、そのような人物にも夫婦の根幹には「恋愛」が必要という認識が

生まれていた。

故に妻たる者の最も注意すべきは能くその夫を慰め自堕落な生活に陥らぬ前に之を予防することである。(略) 欧米の婦人は他人の前では良人に対して権式を示すが、家庭にあつては夫を慰め、夫を励ますに一方ならぬ苦心を怠らない。不幸にして日本の結婚の多くは恋愛をぬきにした結婚であつて、従つて婦人に感情の訓練が足りない。為に感情に於て良人を満足させる事ができない場合が少なからうと思ふ。是れも今日の教育制度の不完全が齎す結果であつて今日の婦人をのみ責めることは出来ないが、本当には今日の婦人が自ら斯る不思議な地位に居ることを自覚しなければならぬのである。

「家庭の悲劇に哭く日本婦人へ」『婦人公論』第一年第三号、大正五年三月

『明暗』は恋愛によつて結婚した夫婦を主人公にしている。そこには恋愛体験を経た「感情の訓練」がすでにある。しかし、そんな夫婦であつても、男女が互いに愛しあうということがいかに難しいかということを『明暗』は提示している。

有馬学は、日露戦争から大正期にかけての若者を「新しい世代」として、次のように述べている。

当時の同時代的な多くの評論からうかがひ上がってくるのは、国家や社会との接点を見失い、一方で物質的な利益を追求することに恥じらいを感じなくなり、他方で人生如何に生きるべきかという自我の問題に悩む、ばらばらな砂粒のような個としての青年像である。早稲田大学の教授で、当時最大の発行部数を誇る総合雑誌『太陽』の主幹であつた浮田和民は、一九一〇(明治四十三)年六月号の誌上で、「個人的発展を尊ぶこと今日の如く、又物質的幸福を求ること今日の如きは、世界を通じて有史以来いまだ見ざるなり」(「現代生活の研究」と述べている。有史以来初めてかどうかは別として、かつてみなかった人間類型の登場が同時代人の注目するところとなつたのは確かである。七十五)

津田とお延もまた、この世代に属する。徳富蘇峰によると「金持ち三代目の若旦那のような」^(七十六) 彼等は、国家、時代とともにあるという意識は薄く、「物質的な利益を追求す

ることに恥じらいを感じない」「ばらばらな砂粒のような個としての青年」である。このような「新しい世代」^(モトモ)は、男女拘わらず旧世代から「虚栄」の批判にさらされていた。まさに近代的個人である似た者同士の津田とお延は、恋愛を経て結婚したが、「怜悧」で、「腕」で夫の愛をつかもうとするお延と、研究家で「技巧」を嫌い、女になめられまいと必死な津田は、もともと和合しにくい関係の夫婦であった。藤井の考えた陰陽和合不可能説はふたりの愛の困難さを示しているし、岡本は「陰陽和合に利く薬」としてお延に小切手を渡し、和合の不可能を金で補うことを勧めているかのようだ。さらに津田は、一方でお延に惹きつけられながら、自分から関のもとへ去ってしまった清子のことがいまだに忘れられない。

しかし、このような困難な状況の中で、お延は、夫婦が絶対的に結びあう「本式の愛情」を求めて技巧を忘れ「偽りのない」態度で津田にぶつかっていく。夫婦の真の愛を成就させようとするお延を描きながら、彼女に可能性を託しているのは漱石自身のように思われる。そこには、いまだ「夫の不品行」に泣くことが一般的だった大正の女性へのエールさえ聞こえるようだ。『明暗』の中で、お延は遅く起きる津田を待ちながら、長火鉢の所で新聞を読んでいる。女学校出の女性の数が中学出の男性の数を超えていた大正時代には、女性が新聞を読むことはもはや珍しくはなかった。漱石がそんな女性読者を意識しなかったとしたらかえって不自然であろう。彼は、『明暗』でも、「帝劇」(三十二)や「トードンス」(六十)といった都市の流行りものを進んで作品中に取り入れた手練の流行作家なのだから。

お延は、自分の愛の理想を実現せんと行動する点において「我の女」である。地位が低い、貧乏な人間には一切の同情を感じない利己的な面ももっている。夫の飲心を買うために、研究的で疑り深い津田が嫌う「技巧」を展開してしまう女でもある。しかし、『明暗』の語りは決してお延を切り捨ててはいない。それは、自分の理想のために津田の愛を求めて「真実相」に迫ろうとするお延を、漱石が、「可憐なお延」(百四十七)と書いたことからわかる。

漱石は、江藤の言うように、『明暗』に「自分のもっとも人間的な反面を露呈」^(モトモ)したのではなからうか。

大正の青年たちが、困難な状況を乗り越えて、どのように自然な夫婦の「和合」「融け合い」へと進んで行くのか。その実験が『明暗』であったとも言えよう。

森田草平は漱石について、次のように書いている。

小森^{ハナ}は「一体一人の男が、一人以上の女を同時に愛する事が出来るものでせうか」というお延の問いは、「結婚後も妻に対して貞操を守り続けている男子がいるのかという問い」であり、当時は現実的に「不可能性に向かう問い」であったと言う。そして、「お延が経済的に自立した職業婦人にならない限り、『夫』である津田の『人格』を問うことも、そして男の『貞操』を要求することも原理的にはできないのである。『明暗』という小説において、お延という女主人公の担わされた課題の過酷さは、まさにこの点にある」と述べている。

しかし、事実をいえば、現在でも経済的に平等な夫婦はまれであろうし、妻が外で働いて収入を得ていないからと言って、夫の「貞操」を要求できないはずはない。むしろ男女間のもろもろの格差を超えて愛は成立するし、そのほうが愛はドラマティックだという面も持つ。

小森は、伊藤野枝の現状認識をもって、お延の求める「本式の愛情」は困難だという立場を取っているようだが、そうとも言えない。『明暗』が書かれた当時は、考え方の真向から対立する良妻賢母主義の側からも、「新しい女」の側からも「一夫一妻」と「夫の貞操」が求められていた。下田は、「多数の女子の実力が進んだ暁には、みながみな盡く賢婦良妻たらずとも、亦其夫がすべて徳義に服従する善良の人ならずとも、社会の制裁によつて、自づから男子の我儘を制裁することもできるようになるであらう」^(ハナ)と述べているし、らいてうは「既に結婚なるものが、嚴肅な批判を経た恋愛によつて取り結ばれるやうになれば、今日見るやうな既婚の男子の不品行は大半消滅するわけでありますから、貞操に対する一般男子の反省を促すことによつて、これ迄殆ど無制限であつた男子の性的生活の上に何等かの制限をつくる事が出来る」^(ハナ)と述べている。「夫の貞操」が「女性問題」として大きく取り上げられ、それは可能であるというこのような主張が繰り返されてきた状況を見ると、お延が求めた津田の貞操の継続も、あながち「不可能」なことではないと思われる。

作者は『明暗』で、「金持ち三代目」の駄目男の変革を、台頭してきた女性の力に託そうとしたかに見える。しかしそこで漱石が造形したのは、極めて知的ではありながら、生活の中で生身の人間と人間が触れ合い、ぶつかり合う中で生まれる「情合」によつて立つ女性であつて、らいてうではなかった。あくまでも生活感を手放さない作家の中に入った新しい思想は、お延という血肉のある女性に結実したのである。

「技巧」を使つてもどうにもならない局面にぶつかつて、「感情の潮」のままに夫に「飛

びかか」るお延は、漱石の女性観の進化を如実に表している。『明暗』のお延には、「良妻」の枠を外して自己の生を生きようと女の萌芽がすでに現れている。

お延の發揮するのは、「夫のための勇氣」であり、あくまでも夫を家庭につなぎとめようとするものである。しかし、漱石が次に書いたのは、「夫のため」という大儀を掲げない「自分のため」の勇氣を發揮する女であったかもしれない。小森の言うような経済的自立は遠いかもしれないが、同じ自立のベクトルを志向してあがいていく女が主役になっていったのではないかと思われる。

『明暗』は、個人に自閉していく男の悲劇を描いた『こゝろ』とは、逆の方向を志向した開かれゆく人間小説である。過渡期の小説であるがゆえに、多くのものを取り込み過ぎて散漫なままに残された感もあるが、漱石という小説家のもつ「未来への可能性」を示す重要な作品だといえよう。

『明暗』本文からの引用は、『漱石全集』第十一巻 岩波書店、平成六年十一月によった。
適宜現代表記に改めている。

〈注〉

はじめに

(一) 漱石は女性に対して、その美や神秘性、純粹さなどを讃美する思いの一方で、「策略」「技巧」を使うものとして嫌う気持ちを持っていた。「虞美人草」の主人公「藤尾」は自分の氣に入った男性と結婚するために「小刀細工」を使うが、ついには死に至る。「三四郎」には「無意識の偽善者」である美禰子が登場し、三四郎の心をかき乱すが、彼女は思っていた野々宮さんとの結婚を諦めて他の男性に嫁ぐ。自伝的小説の「道草」では、「女は策略があるからいけない」という言葉を主人公健三が妻お住に投げている。

(二) 大石は「夏目漱石との論争」『文藝懇話會』第一巻第四号、文藝懇話會、昭和十一年四月)で、漱石に送った手紙の内容について書いている。彼は、お延が芝居見物に行くところから「津田付きの作者は忽ちお延付きの作者に早變りし、お延の心理を心のまゝに見透かすことが出来るといふ能力乃至權利を勝手に獲得した」「何故に以前に夫婦差向ひであるやうな場合に、津田だけでなく、細君の心にも触れる

ことをせなんだか。「アンナ・カレニナ」ではトルストイは多くの人物の心の中に適宜に這入つてゐるやうだがといふことも申し添へて、非難したのであつた」と書いている。

- (三) 漱石は『明暗』執筆中の大正五年十一月十六日の木曜会で、「則天去私」という言葉を語った。周知のように、漱石自身がその指す内容について書いた文献が存在せず、警咳に接した人々のいくつかの発言が残されているのみであるため、「則天去私」と『明暗』との関係について、ふたつの考え方が生まれた。初期には赤木桁平、岡栄一郎、森田草平などが「則天去私」が創作上の方法を示すことを言ったが、小宮豊隆は「明暗」論（初出 昭和十二年三月 『漱石の芸術』岩波書店、昭和十七年十二月に収録）で、エゴイズムからの脱却としての「則天去私のイデー」を指摘した。これを受けて滝沢克己（『夏目漱石』（三笠書房 昭和十八年十一月）や岡義恵『漱石と則天去私』（岩波書店 昭和十八年十一月）は、「則天去私」を主題とする『明暗』では、清子によって津田が「反省」を迫られ、「救済」されると主張した。ここである「則天去私」とは、漱石の目指した理想の境地というような意味で使われている。『明暗』に「則天去私」の思想を見る傾向はこの時期に定着し、戦後も唐木順三などに引きつがれていく。一方江藤淳は、「則天去私」を「神話」として退け、内田道雄は、この言葉には「道徳の理想と人間認識乃至創作の方法」があり、この二面が「漱石の内部で相互的な作用を及ぼし合っている」と考えている。なお、中村美子（『夏目漱石絶筆 『明暗』における「技巧」をめぐって』和泉書院、平成十九年十一月）は、松岡陽子マックレインが、「漱石とジェイン・オースティン」（『孫娘から見た漱石』新曜社、平成七年）において、『則天去私』とは人が眼前に起こっていることを静に見ることができる心境であり、ジェーン・オースティンはその作品の中でトルストイやドストエフスキーより『則天去私』の要素を示している」と述べていることを支持して、「則天去私」は漱石の目指した私を消す創作手法であると述べている。

- (四) 江藤淳『明暗』―近代小説の誕生』『三田文学』昭和三十一年八月。のち『決定版夏目漱石』新潮社、昭和四十九年十一月に収録。

- (五) 内田道雄『明暗』（『近代日本文学』五集）昭和四十一年一月

- (六) 江藤淳も「清子が聖女でも、特別な救済能力を与えられた天使でもあり得ない」としている。それは「気性の強い細君にへきえきした男が、昔の恋人を理想化」し

ているだけで、『則天去私』でもなんでもない、ありふれた話にすぎない。」と清子に触れているが、具体的に『明暗』の叙述にふれているわけではない。

第一章 『明暗』論の中のお延像

(七) 小宮豊隆 夏目漱石『明暗』(『漱石全集』九卷) 岩波書店、昭和十二年二月

(八) 岡崎義恵『漱石と則天去私』(『日本芸術思潮』一卷) 岩波書店、昭和十八年十一月

(九) 猪野謙二『『明暗』における漱石―虚無よりの創造―』『思潮』八号、昭和二十三年三月。『明治の作家』岩波書店、昭和四十一年十一月に収録。

(十) 小宮 前出(六)

(十二) 江藤 前出(三)

(十二) 清水茂『『明暗』に関する断層』『作品論 夏目漱石』双文社、昭和五十一年九月出版

(十三) 内田道雄『明暗』『近代日本文学』五集 昭和四十一年十一月

(十四) 内田は、「貴方はそういう事をする方なのよ」と「侮蔑」することから、清子の津田からの「離反は決定的」とする。ここはあまり詳しく論じていない。

(十五) 小泉浩一郎「明暗の構造―津田とお延」『国文学 解釈と鑑賞』昭和五十六年六月『夏目漱石論(男性の言説)』と『女性の言説』翰林書房、平成二十一年五月に

収録

(十六) 漱石から大石泰蔵宛の書簡にある言葉。「はじめに」で引用した部分の後に、次のように書かれている。

まだ結末まで行きませんから詳しい事は申し上げられませんが、私は明暗(昨今ご覧になる範囲内に於いて)で、他から見れば疑はれるべき女の裏面には、必ずしも疑ふべきしかく大袈裟な小説的の欠陥が含まれてゐるとは限らないと云ふ事を証明した積であるのです。それならば最初から臆気に読者に暗示されつつある女主人公の態度を君は何う解決するかといふ問題になります。然しそれは私が却つてあなたに掛けてみたい問いに外ななのであります。あなたは此女(ことに彼女の技巧)何う解釈なさいますか。天性か、修養か、又其目的は何処にあるか、人を殺すためか、人を活かすためか、或は技巧其物に興味を有つていて、結果は眼中にないのか、凡そそれ等の問題を私は自分で読者に

解せられるやうに段を逐て叙事的に説明して居ると己惚れてゐるのです。

斯ういふ女の裏面には驚くべき魂胆が潜んでゐるに違いないといふのがあなたの予想で、さう云ふ女の裏面には必ずしもあなたの方の考えられるやうな魂胆ばかりは潜んでゐない、もつとデリケートな色々な意味からしても矢張り同じ結果が出得るものだといふのが私の主張になります。

(十七) 初めからお延の自我を肯定し、作者漱石が彼女に共感していると考えるのが小泉であり、(十五)の大石宛書簡が根拠になっている。管見によれば、この書簡をひいて漱石のお延への共感を読む論は、昭和五十年代に初めて登場している。

(十八) 小泉は結末について、清子のいる温泉場での発病が、津田の過去をお延に理解せしめ、お延の能動的役割をへて津田を真の状況認識―津田の吉川夫人の呪縛からの解放を齎し、「真の他者理解を閲しての「同情」「氣の毒」(百五十)」を介しての夫婦の關係の再生への微かな可能性」を見る。また、吉川夫人を頼りにしたことが、清子の津田離反の要因の一つであることについては石崎等『明暗』論の試み」(『日本近代文学』十三・昭和四十五年十月)にも指摘がある。

(十九) 小泉浩一郎「臨終前後―『明暗』の精神」『国文学 解釈と教材の研究』学燈社、平成元年年四月

(二十) 渡邊澄子「『明暗』―小林登場の意味」『昭和学院大学紀要』第十一号、昭和五十年二月。『女々しい漱石 雄々しい鷗外』世界思想社、平成八年一月に収録。

(二十一)『漱石研究』(第九号 漱石と家族) 翰林書房、平成九年十一月

(二十二) 石原千秋「主婦の記号学」『漱石の記号学』講談社、平成十一年四月

(二十三) 石原は、『自分の予期通り、夫が親切に親切を返して呉れないのを足りない自分の不行届から出たやうに、傍から解釈されてはならないと日頃から懸念してゐた』(四十七)り、『几帳面を女徳の一つと心掛けて来た』(五十八) お延の日常生活の仕切り方や考え方の基本は、意外に保守的な〈家庭〉の枠組に収まっている。と指摘する。しかし、お延は「古い家庭のあり方をよく知っていないながら、それを日常という無意識に手渡すことを拒もうとする」。お延は毎日規則のように何気なくくりかえされるはずの夕方の夫の迎えを、演出する女として登場する「入院までの四日間、津田はあたかも〈家庭〉から拒まれてでもいるかのやうに、一度として無事に出迎えられた試しがない。」として、都市の刺激の好きなお延が〈家庭〉を「劇場化」し、脱構築したという見方もしている。

（『明暗』論―修身の〈家〉記号の〈家〉）『国文学解釈と鑑賞』昭和六十三年十月号）

（二十四）小森陽一『世紀末の予言者・夏目漱石』講談社、平成十一年三月

（二十五）貞操・墮胎・廃娼の三つの論争とは、大正三年から五年にかけて、『青鞥』を中心に展開された論争である。性に対する無知と禁欲が良家の子女の条件であった時代に、『青鞥』に集った女性たちはタブーを破って「性」を語り、『青鞥』内外が様々な反応をしめして成立した。

貞操論争は、生田花世が「食えることと貞操と」（『反響』大正三年）で、自分がかつて職場でのセクハラによつて貞操を破られ「女に財産を所有させぬ法律がある限り及び職業のない限りは女は永久に『食えることと貞操』との、戦いに恐らく日に何百人と云う女は貞操よりも食える事の要求を先きとするのである」と書いたことに、安田皐月が「単に食える為なら虫でも生きて居る。（略）何と云う情けなき浅ましきであらう」と反論したことに端を発した。伊藤野枝は、「処女を失くしても幸福な結婚はできる。現に花世はしたではないか。（略）何故もつと婦人達は強くなれないのであらう」（略）ああ習俗打破、習俗打破それより外に私達のすくはれる途はない。」（『青鞥』大正四年二月）と、処女の価値の無意味さを突きつけた。らいてうは、現状では「習俗によつて自己の所有であるべき処女を取り扱われているに過ぎ」ず、「恋愛の過程での『靈的憧憬』から『官能的欲求』を発し、人格内で「両者の一致結合」を感じた場合」に処女を捨てるのが適当とした。（『新公論』大正四年三月）この論争は言論界の注目を集め、『第三帝国』は野枝の文章を褒め、『新公論』は、「性欲問題（其壺）新貞操論」特集を組んだ。

墮胎論争は、原田（安田）皐月の小説「獄中の女より男に」（『青鞥』大正四年六月）が発禁を受けたことから、らいてうが「墮胎とか避妊と云うことについて」「女の意見は聞きませんから知りたい」と提案したことに始まる。原田の小説は、刑法墮胎罪による国家の生殖コントロールに対して、自己決定権を主張した大胆な問題提起だったが、伊藤野枝は胎児も「ちゃんと自分の命を把持して、（略）自分の生活をもっている」と墮胎に反対した。

廃娼論争は、大正四年秋、日本基督教婦人矯風会と郭清会が、大正天皇即位の御大典を機会に、公開の席で「醜業婦」と同席しないこと、今後六年間に公娼を

全廃することを決議したことに対し、伊藤野枝が、「傲慢狭量にして不徹底なる日本婦人の公共事業について」(『青鞥』大正五年十二月)で、「賤業婦」という呼称へのいかりなどを表したことに始まる。その発言が売春肯定ととられ、青山菊枝の反論を受けた。青山は『青鞥』(大正六年一月)で「日本婦人の社会事業に就いて／伊藤野枝氏に与う」で、「日本の封建制度が産出した」公娼制度は、外国にも類のないもので、「いかに稼いでも稼ぎは皆様の主ものになってしまうので年限は延び借金は増す一方」の実情を説明し、人間の作った制度は変えられと主張した。

(掘場清子『青鞥の時代』岩波新書、昭和六十三年三月、らいてう研究会『『青鞥』人物事典——一〇人の群像』大修館書店、平成十三年五月等を参考にした。)

(二十六) 飯田佑子『『明暗』の「愛」に関するいくつかの疑問』『漱石研究』第十八号 翰林書房、平成十七年十一月

(二十七) 早川紀代『近代天皇制国家とジェンダー』第六章「一九一〇年代の両性の関係」青木書店、平成十年

(二十八) 池上玲子「女の愛と主体化」『『明暗』論』『漱石研究』第十八号 翰林書房、平成十七年十一月

(二十九) いわゆる「『こころ』論争」は、昭和六十年に石原千秋「『こころ』のオイデイプス—反転する語り—」・小森陽一「『こころ』を生成する心臓」(『成城国文学』第一号昭和六十年三月)と、秦恒平の戯曲に書かれた、「先生」死後の「私」と「奥さん」が新たな生を生きる予想に対して、三好行雄が批判し、それぞれが三好に答え、再び三好が批判を展開していくという形で行われ、その後もこの論争に関連して多くの論文が発表されるなど大きな波紋を呼んだ。

小森・石原は、「『こころ』の冒頭で「私」が「先生」のことを「余所々々しい頭文字はとも使ふ氣にならない」と書くことと、「先生」が遺書の中で友人を「K」という頭文字で表していたことに着目し、「私」が「先生の遺書を差異化している」と見、「先生」は手記を書いたときの「私」によって批判されているとする。そして、先生の死後、「青年が先生を心的にのり越えて静と結婚する」(石原)、青年が「精神と肉体を分離させることなく、つきつめられた孤独のまま、「奥さん」——と——共に——生きること」(小森)という可能性を読んだ。

(三十) 中村美子『夏目漱石絶筆『明暗』における「技巧」をめぐる』和泉書院、平

成十九年年十一月

中村は、『明暗』の主題は、人間関係における「技巧」で、その動機となる「目的」による津田とお延の褒貶を書き分けたとする。津田もお延も技巧をもっているが、津田が「戒飭」を予言されるほどに批判されているのに対して、お延は同情をもつて「可憐」とされている。それは、お延は津田の愛を勝ちとることが「一義」であり、それについて妥協をしない。その姿勢が人生に対する真摯さとして現れているからだとする。

第二章「良妻賢母」とお延 注

(三十一) 高橋麻衣子「夏目漱石『明暗』に見る日本近代家族」(『日本文学雑誌』法政大学国文会、平成十七年)

(三十二) 文部大臣菊池大麓の演説。明治三十五年五月一日。「高等女学校長会議での演説」(『菊池文相演述九十九集』大日本図書、明治三十六年)

(三十三) 深谷昌志『増補 良妻賢母主義の教育』黎明書房、平成十年三月

(三十四) 下田歌子。女子教育家。華族女学校創立に参与し、同校学監、教授。明治三十九年に華族女学校が学習院に併合され学習院女学部となり、下田は女学部長を務めたが、乃木希典と意見が合わず、四十年に非職。のち、実践女学校校長となった。明治三十四年の愛国婦人会創立にも参画し、大正九年には会長。全国各地で公演して会勢の拡大に努めるなど婦人団体の活動にも貢献した。(参考ブリタニカ百科辞典)

(三十五) 下田歌子『良妻賢母』富山房、明治四十五年五月

(三十六) 婦人問題に先進的な姿勢を示した『読売新聞』は、「婦人附録」を新設し、このときの声明に「時勢の趨向を察して聊か天下の弱性者の為に気焰を吐かんとするもの」とうたった。毎日一頁の紙面をさき、女子大同窓会の「桜風会」機関紙を編集していた小橋三四子を編集主任とし、与謝野晶子、田村俊子を顧問に加えていた。紙面には内外の婦人の動きから、集会、講演会、女学校の消息のほか、実用記事や投稿欄ももうけている。五月二日からは「身の上相談欄」を開設している。そこにも、子どもの二人いる主婦が「夫の不品行」に悩む投書が取り上げられているが、「弱性者の為に気焰を吐」くべき回答者の答えはここでも下田同様典型的である。

○身の上相談「不品行の夫にも仕えねばならぬか」(大正三年五月二十六日)

回答

さういふ経験をなさるのは貴方ばかりではありません、殆ど凡ての女は結婚して同じ経験に遭遇するのであります。それは男の世界が腐敗してゐるからです。又男を腐敗させるのは矢張貴方と同性的な女でありますから、女の世界にもさういふ腐敗した分子があることを想うはねばなりません。兎に角男というものはさういふ言い草をするのが普通です。勿論それに対して貴方は嫌な感をなされませうが、貴方の清い愛の力に依つて次第に夫を清い方面に導いて、實際自分が悪かつたと悟るやうになさる外ありません。

(読売新聞婦人附録については、井出文子・江刺昭子『大正デモクラシーと女性』合同出版、昭和五十二年二月を参考にした。)

また、棚橋綾子は『安詳恭敬』(田中久編『結婚前後の修養』尚栄堂、大正五年九月に所収)に、あえて「十一 良人の放蕩の直し方」を立て、そこで「品行を正しくすべきは男女ともに大切」としながらも、「婦人の側より云へば、男子の放蕩も、亦自分の欠点の為であると思つて、氣の利かぬところは努めて利くやうにして、物事は冷淡でなくして、濃密にし、万事痒いところに手の届く様になりたい」と言う。更に彼女は、「良人の放蕩を直した三人の婦人」の実例を挙げる。

・芸者遊びをする夫に「夫人は少しも悪びれないで、良人の帰るのを待ち、夏などは蚊軍に攻められつゝ起きて居る、雪の夜霜の朝、少しも変はらない。そして夫が帰ると丁寧に待遇して、少しも不平の面持ちをしない、つまり良人の仕打ちは何であれ日々夜々赤心を凝めて接した所が、三年許り立つ中に、夫は相も変はらぬ細君の親切に感じ入り、他年の放蕩を改めました」

・毎日のように妾宅に入り浸る夫に決して不快の事は云はず、永く忍耐して居りました。所が良人もその中に妾の方に厭きが来て仕舞つたので、今は夫婦關係が濃密となりました。

・放蕩が止まない男子に細君は非常に困りながら、成るべく良人に対して不平不満を言はぬ様にしつゝ、折を見て顔を和げ、言葉を優しく熱誠を凝めて懇々諫言した所が、流石の良人も感じ入りて、遂に放蕩を改めましたのであります。(略)

良人の放蕩を直すには、其の良心と人情に訴える外はありません。此方さへ至誠真情を以て打ち向かつたならば、どんな人も真人間に立ち復るものであります。

(三十七)『結婚前後の修養』(尚栄堂、大正五年九月)。ここには、棚橋絢子、跡見花跡、三輪田真佐子、下田歌子、鳩山春子、山脇房子、嘉悦孝子の七人の「修養講話」が載せられている。鳩山のもの「幸福なる結婚法」であり直接良妻賢母には関係がなく、山脇のものは「母親の責務」であり、ここでは省いて考えるべきであろう。それ以外はすべて「良妻賢母論」といいかえてもよい内容の講話である。これらに共通しているのは下田同様、妻も「国家のため」という意識をもって「奢侈」「贅沢」「虚栄」の心を捨てて「儉約」につとめ、あるいは家事に触らぬ程度の内職をして家を富ませることと、家庭での「教育」の重要性を唱えている点である。

(三十八) 小山静子は『良妻賢母という規範』(勁草書房、平成三年十月)において、「第一次大戦中から戦後にかけて、女の現状に対する危機感が生まれてい」き、「良妻賢母思想が再編されていく」ことになったと述べている。つまり、第一次大戦中の欧州婦人が戦後の活動で国家に貢献したことを受けて、「総力戦体制における女の力の重要性」が認識され、「男は仕事、女は家庭」という性別役割分業に即した形で「女たちは、家庭にあつて夫や舅姑に従順に仕え、家事・育児にいそしむことが求められて」いた「女に対する統合のあり方や期待」の「最初の転機は第一次世界大戦を契機としてやってきた」という。そして、「第一次大戦後には、旧来の良妻賢母像とはかなり様相の違う女性像が登場していた」として次のように、「新しい良妻賢母像」を示している。

それはたとえば、家事・育児をうまくこなすだけではなく、主婦として家庭の「主人」となり、夫と対等な関係を保てる女性であったり、家事・育児に支障のない範囲で職業に従事する女性、社会事業に参加する女性、「女らしさ」を社会で発揮し、社会の改善に尽力する女性、などであった。

しかし、家庭における妻の「節儉」「経済」は、すでに、日露戦争後から叫ばれていたことである。勿論、第一次大戦中にその意識が高まり、広まったことも事実といえる。

ちなみに、小山は、「男にはない女の『高い』道德性が指摘されて」おり、成瀬仁蔵は、その道德性を活かして「従来文明の欠陥を補ひ、完美なる文明を将来に産出し、社会国家家庭及び男子の慶福を増進する」ために女子の高等教育の必要を説いた(「女子高等教育の必要」『婦人問題』大正七年十一月)ことを挙げて

いるが、同時代に新たに良妻に期待されていた「夫の品行の監理」については全く言及していない。

(三十九) 吉田弥一・小島政吉・原田利英・岡田正美編『女子国語読本』(金港堂、明治三十五年三月)は、最もも多く採用され、大正十四年まで四半世紀にわたって読まれた国語読本であるが、その第八卷(四年生用)に、近衛篤磨の「婦人の覚悟」がある。彼は婦人の覚悟として、「自立の心」「活発」「報国の念」「自己の衛生」(よい子を産むためのもの)「内助の功」をすでに挙げて、婦人に自立心や体力を求めている。日清戦争に勝ったものの大国ロシアに脅威を覚えていた政治家は、さらなる国力増強のために、あくまでも内助の範囲でだが女子にも能力を要求しているのである。良妻賢母主義の変容には、必ずそこに「戦争」に向かう国家の要請があることが見えてくる。

(四十) 「高等女学校令施行規則」(明治三十四年三月)の「各学年ニ於ケル各学科目ノ每週教授時間数」による。大正四年三月の改定では、高等女学校に実科の要素を拡充させようとして、高学年の三・四年、もしくは、四・五年の「裁縫」科は二時間増、「家事」科は一時間増とされた。(参考 眞有澄香『読本の研究 近代日本の女子教育』おうふう、平成十七年六月)

(四十一) 「火鉢」は漱石の作品によく出てくる。「行人」のお直は突然義弟の次郎の下宿をおとずれて、次郎と火鉢ごしに会話する。また、「こころ」の奥さんは、先生不在の晩、「私」と火鉢を挟んで話す。そして、このいずれも、微妙なセクシヤリティを漂わせる場面になっている。火鉢を挟んで近い距離で話すことで、ふたりの距離がぐっと近づくのである。

漱石にとって「火鉢」は通じ合う人間関係の象徴である。「明暗」でも、お延が遅く帰った日、下女のお時は寝てしまっていて、火鉢の火が消えてしまっているところは逆に寒々と暖か味のない描写になっている。

下女は格子の音を聞いても出て来なかった。茶の間には電燈が明るく輝いているだけで、鉄瓶さえ何時ものように快い音を立てなかった。今朝見たのと何の変わりもない部屋の中を彼女は今朝と違った眼で見廻した。薄ら寒い感じが心細い気分を抱擁し始めた。

第三章「新しい女」とお延

(四十二)『日本女性史大辞典』(吉川弘文館、平成十九年十二月)は、「新しい女」を次のように説明する。

一九世紀末から二〇世紀初めに欧米や日本、朝鮮、中国などアジア諸国の国民国家形成・成立期に現われた一群の女性達をさす。彼女たちは従来よりも高い教育を受け、家庭の枠組みを越えて職業・社会活動に従事し、あるいは既存の性道徳に異を唱え社会から糾弾された。(略)新しい女は西洋からアジアへと広がり、日本では一九一〇(明治四三)坪内逍遙が講演「近代劇に見えたる新しい女」でイプセン作「人形の家」のノラやブーデルマンの「故郷」のマグダ^(A)などを挙げて新しい女を紹介。^(B)これらは文芸協会で上演され、前者は松井須磨子主演で反響を呼び、後者は家庭秩序を破壊するという理由で一時上演が禁止された。『青鞥』はノラやマグダについて積極的に論じ、メディアは青鞥社を新しい女の代表的団体として取り上げ、五色の酒・吉原登楼事件をスキャンダラスに報じ、非難した。これに対し一九一三年(大正二)平塚らいてうはみずから「新しい女」を宣言、旧来の男性中心の道徳・法律を否定し、恋愛の自由を实践、良妻賢母批判に向かう。(略)この年『新真婦人』が創刊、『青鞥』に対抗するものと揶揄され「新しい女」の論議を活発化させた。主宰の西川文子は性別役割分業を非とし、経済的自立、社会・政治参加、恋愛の自由などを説いており、最近の研究では新しい女の一人とされている。(以下略)

日本においては、明治期には新時代の教育を受けた知的な女性、あるいは、イプセンの「人形の家」の主人公ノラや、ブーデルマンの「故郷」の主人公マグダのような、自我をもって行動する女を「新しい女」といった。また新しい職業をもって、経済的に自立している女性も新聞紙上で新しい女として紹介されていた。

(A)ブーデルマン「故郷」は、次のような物語である。

服従と義務の旧式な道徳以外に世間を知らない頑固な老軍人の父から命ぜられた牧師ヘフタアデックとの結婚を拒否したマグダは、家を追われ、首都に上つてオペラ女優の修行をする。同郷の大学生フォン・ケラアの誘惑で一人の子を産んだが、捨てられて不幸と窮乏のどん底に落ちる。しかし、マグダは努力して世界

的に有名な声楽家となり、故郷に錦を飾る。かつてマグダに拒まれた牧師の苦勞でマグダと父は和解する。牧師は参事官として偶然その地に赴任していたフォンケラアとマグダを正式に結婚させようとするが、俗物のケラアは世間体を恥じて、子どもを里子に出した後にしたいと言う。父も男の申し出をマグダに了承させようとするが、マグダは「わたしは、わたしだ。」と言って拒絶する。父は怒ってピストルでマグダを撃とうとするが、卒中を起こして死ぬ。マグダはこのいたましい光景を見て、「やはり、わたしは帰って来なければよかった」と叫ぶ。

マグダは家に帰った後でも、父の権威に抑圧を感じ続けているが、ついに父に反抗し、「わたしは、わたしだ。」と自分を貫く。また、彼女は「人は職業の方こそ、持たなければなりません。職業さえ持ったら、それで充分で御座いましょう」と言つて、立派な家庭に「安住」しているお偉方の夫人たちを批判する。このようなマグダの姿は、夫が自分をひとりの人間として愛していたのではなかったことに衝撃を受け、家という鳥籠を出て自立しようとするイブセンの戯曲「人形の家」のノラの姿とともに、当時の観客たちの心を打ったのである。

参考K・K「ズウデルマンと『故郷』」「近代劇大系第六巻独塊篇(二)」(近代劇大系刊行会、大正二年七月)

(B) 堀場清子は『青鞥』の時代―平塚らいてうと新しい女たち―(岩波書店、昭和六十三年三月)で、「新しい女」という言葉が田山花袋『蒲団』『新小説』明治四十年九月)に、主人公が「新しい婦人」となるための教訓を、繰り返し女弟子に教える部分のルビが、「をんな」「ふじん」と二様あることから、坪内以前に「新しい女」の語が使われていたことを指摘している。更に岡野幸江は『新しい女』はどこから来たのか(『自由人の軌跡―近代の文学と思想―』武蔵野書房、平成五年十一月)で、同じ『蒲団』の中に、「縷々として靈の恋愛、肉の恋愛、恋愛と人生の関係、教育ある新しい女の当に守るべきことなどに就いて、切実に且つ真摯に教訓した。(略)一度肉を男子に許せば女子の自由が全く破れるといふこと、西洋の女子はよく此間の消息を理解しているから、男女交際をして不都合がないといふこと、日本の新しい婦人もし非そうならなければならぬといふことなど主なる教訓の題目であったが、殊に新派の女子といふことに就いて痛切に語った。」と、「新しい女」「新しい婦人」「新派の女子」と表現が揺れながら出ていることについて、それらが指すものが、共通して『教養ある』

新世代の女性たちであり、それがマグダやノラなど近代劇の女性主人公と結び付けられていることがわかる」と指摘している。

(四十三) 「五色の酒事件」 青鞥社同人の尾竹紅吉が、メイゾン鴻の巢に『青鞥』への広告を取りに行った際、五色の色の重なったカクテルの美しさを気負った筆で記事にしたが、これが、青鞥社の社員たちは女だてらにバーで酒を飲んでいると非難された。

「吉原登楼事件」 尾竹紅吉の叔父である日本画家尾竹竹坡が、「女の問題を研究するなら不幸な女の生活を実際に見てみよう」紅吉に勧めたことから、中野初、らいてう、紅吉が「大文字楼」に行き、花魁「栄山」の話を聞いて一泊した。紅吉が知り合いの新聞記者に口を滑らしたことで、歪曲されて世間に流布した。五色の酒事件・吉原登楼事件によって青鞥社の「新しい女」は社会からの一斉攻撃を受けるようになり、青鞥社内部にも批判動揺が広がる中、責任を問われた紅吉は退社するのだが、一連の「新しい女」攻撃は、『青鞥』を文芸雑誌から婦人問題雑誌へと方向転換させる直接のきっかけとなったとされる。

(参考 らいてう研究会『『青鞥』人物事典——一〇人の群像——』大修館書店、平成十三年五月)

(四十四) 「天才」とはここでは女性が内在させながらいまだ開花させていない才能を指して使われている。『青鞥』第一巻第一号（明治四十四年九月）には、次のようにある。

「青鞥は女子のために、各自天賦の才能を十全に發揮せしむる為に、自己を解放せむとする最終の目的のもとに相手携えて、大に修養研究し、其結果を發表する機関としたいと云う事が本来の目的でありますから雑誌の為の雑誌ではなく、どこ迄も私共の為の雑誌でありたいと存じます。」

(四十五) 新婦人協会は平塚らいてうを中心に大正八年三月に結成された。治安警察法五条修正を目標とするとともに、婦人参政権の請願を行った。

(四十六) 煤煙事件。明治四十一年三月に夏目漱石の弟子であった中学校教師森田草平と日本女子大学卒業の平塚明子が「恋愛をのり越えた彼岸に救いを、霊と霊の結合を求め」、「救われ」とうとした草平が明子を「殺す」ために塩原の奥の雪の尾花峠を彷徨した事件。二人は発見され東京に連れ戻され、明子は自宅へ帰り、草平は生田長江の勧めで漱石宅に引き取られることになった。新聞は「文学士と禪

学令嬢の心中未遂」(『万朝報』)などと大きく報じたが、明子は、新聞記者に対して、「家人に対してすまないという気持ちはあるが、自分の行動に対しては悔いるところはない」と答えている。

草平がこの事件を扱った小説『煤煙』を書き、漱石の勧めで翌年一月一日から朝日新聞にを連載し好評を博したため、この事件は「塩原事件」あるいは「煤煙事件」と呼ばれる。草平は後に「たまたまその婦人は禅に凝って、男の意表に出るような言葉を弄することが好きであった。それをまた男の方で大真面目に受け取って、自分の好き勝手な意味をつけて解釈した。(略)だから『煤煙』を書く際には、解釈だけは自分の思うままに施したが、相手の言葉なり行動なりは真実であったこと以外一歩も出ないように、細心の注意を払っておいた。それだけはいまから考えても、いささか心を安んじている次第である」(森田草平『夏目漱石』甲鳥書房、昭和十七年)と書いており、若き日のらいてうの実像がここに残されている点が興味深い。

(四十七) 森田草平「煤煙」中の朋子の手紙。森田は「煤煙」を書くにあたって、複数の平塚明子(らいてう)の手紙を引用したが、手紙には脚色をせず、そのまま用いたという。(森田前掲書)

(四十八) らいてう「元始女性は太陽であった」『青鞥』第一巻第一号(明治四十四年九月)

(四十九) 鹿野直政「女性史を見直す」『婦人・女性・おんな——女性史の問い——』岩波書店、平成元年

(五十) 漱石は、「模倣と独立」(大正二年十二月十二日第一高等学校における講演)において、「人間は一方でイミテーション、一方で独立自尊、というような傾向を持っている。」「ひとりの人間がこの両面を有っている」と言いながらも、「もう少しインデペンデントになって」「自分のオリジナリティー」を伸ばして「本当の新しい人にならなければならない」と勧めている。

「インデペンデントの側の方は、自分に一種の目安がある。アイデアル・センセーション、それが個人的になつておつて、とにかくそれを言い現わし、それを実行しなければいても立つてもいられない。風変わりではあるが、人からいくら非難されても、御前は風変わりだと言われても、どうしても斯うしなければいけない。(略)厄介ではあるけれども、イミテートする人あるいは自己の標準を欠

いていて差し障りのない方が間違いがなくて安心だというような人に比べれば、自己の標準があるだけでもこっちの方が恕すべく尊ぶべし——といったらどんな奴が出てくるか分らぬが、事実尊ぶべき人もありませう。とにかくインデペンデントの人にはまあ恕すべきものがあると思うのです。」

「要するにどっちの方が大切であらうかという、両方が大切である、どっちも大切である。人間には裏と表がある。私は私をここに現わしていると同時に人間を現わしている。それが人間である。両面をもっていなければ私は人間とはいえないと思う。唯どっちが今重いかというと、人と一緒になつて人の後に喰つ付いて行く人よりも、自分から何かしたい、こういう方が今の日本の状況から言えば大切であらうと思うのであります。」

(五十二) 清子が流産したのが「夫の不品行の代償」であるということは、内田(前出)がしている通りである。しかし、清子にはそのような夫婦関係を改善しようとする意志は見られず、「宅から電報が来れば、今日にでも帰らなくつちやならない」と、夫に従順な女として描かれている。

(五十二) 「エス・ワール」ヘルマン・ブーデルマンの小説「(消えぬ)過去」。主人公のフェリチタスは、自分が不利だと知ると、自殺しようとする。しかし、彼女が飲んだのは毒も何でもなかった。漱石が「美禰子」を造形したことについては、佐々木英昭『夏目漱石と女性―愛させる理由―』(新典社、平成二年十二月)を参考にした。

(五十三) 森田草平『続 夏目漱石』甲鳥書房、昭和十八年

(五十四) Ellen Karolina Sofía Key 1849/12/11 ~ 1926/4/25

産業革命を終え女子労働者の増加していたスウェーデンでは、十九世紀末にはすでに参政権運動を中心とする女性解放運動があったが、ケイは、一九〇〇年に最初の著作『児童の世紀』で母性の保護と子供の権利を訴えて世に出た。後一九〇三年には『生命線(後に『恋愛と結婚』と改題)』で、キリスト教の旧道徳を批判し、恋愛の自由と母性の尊重を主張する女性論を鮮明にした。ケイの言う恋愛の自由とは、肉体と精神が融合され生殖欲を伴った恋愛の讃美であり、性愛と結婚は人生との一致である。母性の尊重とは、女性の独自の領域を母性に認め、進化主義の立場から社会による母性の保護すなわち養育のための社会給与の必要を唱えるものであった。」日本には一九一〇年代初めに文化主義の哲学者や新理

想主義の文学者たちによつて『恋愛と結婚』の紹介が始まり、一九一二年に入つて婦人問題を研究課題にしようと思つた平塚らいてうはこれを読んで興味を持ち、一九一三（大正二）年一月号の『青鞥』から翻訳の連載を始めた。そして、ケイの思想を自分の恋愛と結婚の指針とする。また、山田わかは『児童の世紀』を『青鞥』誌上で試み、ケイはわか思想にも大きな影響を与えた。大正七年のいわゆる母性保護論争で、らいてうとわかケイの母性尊重論に拠りながら自分の論を主張している。大正十一年のベストセラー『近代の恋愛観』（厨川白村）は、ケイの恋愛観を根底においたものである。

参考 石崎昇子「らいてうの思想的基盤となつたケイ」『青鞥』人物事典――
○人の肖像――前出

（五十五）『解放』第四卷第二号大正十一年（『家族研究論文集成』明治大正昭和前期篇第十八卷 婚姻（二）所収）本間はエレン・ケイの研究者として知られた。

（五十六）『恋愛と結婚』（『青鞥』第三卷一号・大正二年一月）

（五十七）『男女性的道德論』『婦人公論』秋季特別号「現代女ぞろひ」号 中央公論社
大正五年十月

大正五年一月に創刊された『婦人公論』は、「はじめての一般向け婦人問題誌」で、「大正デモクラシーの中で創刊され、それを強く推し進めた」雑誌である。十月号の代わりに発行された『婦人公論秋季特別号「現代女ぞろひ」号』の「公論」には、らいてう、与謝野晶子、下田歌子、西川文子ら九人の女性がそれぞれ婦人問題を語っており、それぞれに筆者の恋愛観が窺える。この年の九月に『中央公論』に発表された中条（宮本）百合子の「貧しき人々の群」を評価する与謝野晶子の意見があるのを見ると、十月になつてから発行されたと考えるべきで、漱石がこの号を読んでいた可能性は低いのだが、この「公論」には、お秀が口にした「月の発行にかかる雑誌」にあつた「諸家の恋愛論」の一端が伺えると言えるだろう。

（五十八）大正初期に当事者が出会い「相思の恋愛」を経て結婚する、今でいう「恋愛結婚」はまだ一般的ではなかった。「自由結婚」が論壇に登場するのは明治三〇年代だが、論者の多くは自由結婚を否定する。例えば平民新聞は明治四十二年に「自由結婚」について「名士数十家」にアンケートを行い、十五名の回答を載せているが、自由結婚は奨励さるべきではないとするものが多く、「自由結婚は奨励す

べきものなり」(木下尚江)「我らが三度の食事を怪しまぬ如くに当然実行せらる可き義と信候」(与謝野寛)「自由結婚はよきものなれば、先進者は社会人類が挙りて之を為し得るやうに骨を折る可し」(白柳秀湖)と、肯定したのはわずか三人しかいなかった。伝統的な道德観においては、恋愛による結婚は、「自由結婚は高き意味に於ける道德の犯罪」(田岡嶺雲)で「総ての者に奨励することは危険」(後藤宙外)であったのである。

「自由結婚は可きか悪き乎」(『家族研究資料集成 明治大正昭和前期篇第十八巻婚姻(二)』クレス出版、平成十三年四月収録)

質問は以下の通り。①自由結婚は、自然なる結婚なる乎。②自由結婚は、現在の道德律に律せらる可きもの乎。③自由結婚は奨励さる可きものか、排斥す可きものか。④自由結婚は範圍を制限するの必要ありや。

(五十九) 岩野清子『愛の争闘』(米倉書店、大正四年十月) 岩野自身の序にあるように、この本は、「明治四十二年十二月九日から、四十四年四月までと、及び抱鳴氏の再度の恋愛事件の告白のあった大正四年七月二十五日から、別居に至る翌月八月九日までの」日記を収めたものである。

(六十) 評論「神秘的半獣主義」で、利那を完璧に充実させて生きる哲理を説き、小説「耽溺」で、不見転芸者との獣のような情欲を描いた抱鳴は、極めて特異な自然主義作家として知られた。

(六十一) 『愛の争闘』明治四十三年十一月十一日には「私は恋のためにすべてを捨てよう。よし私の誇がそれのために破れやうとも、私は此恋を捨てられない。私のこの決心は、私達の家庭の風雲を一層した。」とあり、それまでたびたび出て来た二人の性に関する葛藤が登場しなくなることを見ても、そのころであったと見ることが出来る。清子はあくまでも霊の一致が肉の一致に先行するべきであると考えていたので、なかなか泡鳴を寄せつけようとしなかったのである。一方で半獣主義で知られた奔放な泡鳴が、前年十二月からほぼ一年の間、清子に触れずに愛を訴え続けたというのは驚きに値する。『愛の争闘』の中にも泡鳴と清子が精神的にお互いを尊敬し合っていたことが見て取れる記述が多い。

(六十二) 『青鞥人物事典』による。この日を尾形明子は、三月二十一日としている。

(六十三) 折井美都子「女性の自由と独立を 岩野清子」(『青鞥人物事典』前出)

第四章 お延の技巧と『明暗』の結末

(六十四) 飯田祐子 前出(二十六)

(六十五) 大石泰三宛書簡 前出

(六十六) 前出(三十)

(六十七) 漱石は大石宛書簡に次のように書いた。「斯ういふ女の裏面には驚くべき魂胆が潜んでゐるに違いないといふのがあなたの予想で、さう云ふ女の裏面には必ずしもあなたの方の考えられるやうな魂胆ばかりは潜んでゐない、もっとデリケートな色々な意味からしても矢張り同じ結果が出得るものだといふのが私の主張になります。」(十六)に同じ。

(六十八) お延は、次の部分のように、自分の「技巧」は「天性」のものであると認識している。

彼女は此談話の進行中、殆ど一言も口を挟さむ余地を与へられなかつた。自然の勢ひ沈黙の謹聴者たるべき地位に立つた彼女には批判の力ばかり多く働いた。卒直と無遠慮の分子を多量に含んだ夫人の技巧が、毫も技巧の臭味なしに、着々成功して行く段取を、一步ごとに眺めた彼女は、自分の天性と夫人のそれとの間に非常の距離がある事を認めない訳に行かなかつた。然しそれは上下の距離でなくつて、平面の距離だといふ気がした。では恐るゝに足りないかといふと決して左右でなかつた。一部分は得意な現在の地位からも出て来るらしい命令的態度の外に、夫人の技巧には時として恐るべき破壊力が伴つて来はしまいかという危険の感じが、お延の胸の何所かでした。(五十三)

(六十九) 『明暗』では、「技巧」の中で、女性が男性に發揮するものを「腕」と呼んでいる。

(七十) 石原前掲書(二十二)

(七十一) 「断片」 漱石全集第二十卷 断片六八C 岩波書店、平成八年七月

(七十二) もちろんここで、津田はお延が本当のところを知らないことを見抜き、また温泉行き(清子との再会)の魅力に抗えずに、彼女をだまし続ける。しかし、津田の動揺は、いずれ来るべき津田の変化への伏線と読むことが可能であろう。

(七十三) 参考 加藤正明・保崎秀夫他編『精神医学事典』弘文堂、昭和五十年刊、平成

三年新版

(七十四) 岡崎義恵 前出(八)

おわりに

(七十五) 有馬学『国際化の中の帝国日本』講談社、平成七年五月

(七十六) 徳富蘇峰『大正の青年と帝国の前途』大正五年

(七十七) 漱石は「こころ」で、明治天皇に自分の歩んできた人生を重ねる「私」の父、

「明治の精神」に殉死しようとする先生、どちらにも同化しない若い「私」とい

う三世代を書いた。「私」は、『明暗』の津田と同世代である。

(七十八) 江藤淳 前出(三)

(七十九) 森田草平 前出(五十三)

(八十) 小森陽一 前出(二十四)

(八十一) 下田歌子 前出(三十五)

(八十二) 平塚らいてう 前出 三十八頁「男女性的道德論」

その他参考文献(発行年月順)

〈一〉『明暗』・夏目漱石関係

夏目鏡子述・松岡譲筆『漱石の思い出』改造社、昭和三年十一月

夏目伸六『父・夏目漱石』文藝春秋新社、昭和三十一年十一月

熊坂敦子『夏目漱石の研究』桜楓社、昭和四十八年三月

江藤淳『決定版 夏目漱石』新潮社、昭和五十四年七月

『国文学 解釈と教材の研究』(漱石「道草」から「明暗」へ) 學燈社、昭和六十一年三月

『国文学 解釈と教材の研究』(夏目漱石を読むための研究事典) 學燈社、昭和六十二年五月

蒲生芳郎『漱石を読む——自我の孤立と愛への渇き』洋々社、昭和五十九年十二月

石崎等『漱石の方法』有精堂出版、平成元年七月

水村美苗『続 明暗』筑摩書房、平成二年九月

鳥居正晴・藤井淑禎編『漱石作品論集成』第十二卷明暗 桜楓社、平成三年十一月

柄谷行人『漱石論集成』第三文明社、平成四年九月

三好行雄著作集第二巻『森鷗外・夏目漱石』筑摩書房、平成五年四月

松岡陽子マックレイン『孫娘から見た漱石』新潮社、平成五年二月

『国文学 解釈と鑑賞』（特集大正・昭和初期長編小説事典）至文堂、平成五年四月

小森陽一・中村三春・宮川健郎編『総力討論 漱石の『こゝろ』』翰林書房、平成六年一月

尹相仁『世紀末と漱石』岩波書店、平成六年二月

土井健郎『漱石の心的世界―「甘え」による作品分析』弘文堂、平成六年九月

佐々木英昭『「新しい」女の到来―平塚らいてうと漱石』名古屋大学出版会、平成六年十月

小森陽一・石原千秋編『漱石研究』第三号（特集『漱石とセクシャリティ』）翰林書房、平成六年十一月

小森陽一・石原千秋編『漱石研究』第四号（特集『硝子戸の中』『道草』）翰林書房、平成七年五月

小森陽一『漱石を読み直す』筑摩書房、平成七年六月

内田道雄『夏目漱石―『明暗』まで』おうふう、平成十年二月

小山田義文『漱石のなぞ……『道草』と『思い出』との間』平河出版社、平成十年三月

飯田佑子『彼らの物語 日本近代文学とジェンダー』名古屋大学出版会、平成十年六月

石原千秋『漱石の記号学』講談社、平成十一年四月

金正勲 近代文学研究叢書二十七『漱石 男の言草・女の仕草』和泉書院、平成十四年二月

吉本隆明『夏目漱石を読む』筑摩書房、平成十四年二月

鳥井正晴『明暗評釈 第一巻（第一章から第四十四章）』和泉書院、平成十五年三月

中山和子『漱石・女性・ジェンダー』翰林書房、平成十五年十二月

『国文学解釈と鑑賞』（特集ジェンダーで読む夏目漱石）至文堂、平成十五年六月

川野純江『『坊っちゃん』と『明暗』―「腕力」と決断の物語』星雲社、平成十七年一月

熊倉千之『漱石のたくらみ 秘められた『明暗』の謎をとく』筑摩書房、平成十八年十月

朴裕河『ナショナルアイデンティティとジェンダー 漱石・文学・近代』クレイン、平成十九年七月

松岡陽子マックレイン『漱石夫妻 愛のかたち』朝日新書、平成十九年十月

熊谷和代『今も新しい漱石の女性観―則天去私への道―』日本文学館、平成十九年十月
三浦雅士『漱石 母に愛されなかった子』岩波書店、平成二十年四月

〈三〉その他

平塚らいてう『丸窓より』東雲堂、大正二年五月

『婦人畫報』近時画報社、大正元年一月〜大正五年十二月

『婦人公論』中央公論社、大正五年一月〜十二月

鳩山春子『婦人生活の改善』先進堂、大正九年二月

『現代日本文学全集』第二十篇（厨川白村「近代の恋愛観」）改造社、昭和四年十二月

三井禮子編『現代婦人運動史年表』三一書房、昭和三十八年三月

松田るみ子『婦人公論の五十年』中央公論社、昭和四十年十月

高群逸枝『日本婚姻史』理論社、昭和四十二年一月

『現代日本文学大系29 鈴木三重吉・森田草平・寺田寅彦・内田百閒・中勘助集』筑

摩書房、昭和四十六年六月

平塚らいてう『平塚らいてう自伝 元始、女性は太陽であった』大月書店、昭和四十六年九月

『日本婦人問題資料集成』第十巻近代日本婦人問題年表 ドメス出版、昭和五十五年五月
野地潤也編『国語教育史資料』第一巻 理論・思潮・実践史 東京法令出版、昭和五十六年四月

井上敏夫編『国語教育史資料』第二巻 教科書史 東京法令出版、昭和五十六年四月
片山清一『近代日本の女子教育』建帛社、昭和五十九年三月

近代女性文化史研究会編『近代婦人雑誌目次総覧』Ⅲ期第十一巻 大空社、昭和六十一年四月

小林登美枝・米田佐代子『平塚らいてう著作集』岩波新書、昭和六十二年五月

堀場清子『青鞥の時代』岩波新書、昭和六十三年三月

日本近代思想体系6『教育の体系』岩波書店、平成二年一月

本田和子『女学生の系譜―彩色される明治―』青土社、平成二年七月

堀場清子編『「青鞥」女性解放論集』岩波書店、平成三年四月

井上章一『美人論』リブポート、平成三年一月

上野千鶴子『近代家族の成立と終焉』岩波書店、平成六年三月

近代女性文化史研究会編・発行『婦人雑誌に見る大正期——『婦人公論』を中心に——』平成七年三月

『岩野泡鳴全集』第十巻 臨川書房、平成八年四月

大越愛子『近代日本のジェンダー』三一書房、平成九年五月

渡邊澄子『近代女性文学論——闇を拓く』世界思想社、平成十年二月

『近代日本女性文献史総覧』別冊1「女性による女性論」大空社、平成十年十月

新・フェミニズム批評の会編『『青鞥』を読む』学藝書林、平成十年十一月

石月静恵・藪田 貫編『女性史を学ぶ人のために』世界思想社、平成十一年六月

米田佐代子・池田恵美子『『青鞥』を学ぶ人のために』世界思想社、平成十一年十一月

『家族研究論文集成』第十七巻（婚姻）明治四十年）クレス出版、平成十三年四月

第十八巻（婚姻）明治四十一年（昭和十九年）

鈴木貞美編『雑誌『太陽』と国民文化の形成』思文閣出版、平成十三年七月

桑原美知子『遺稿集「山動く日」を信じて』めこん、平成十三年八月

大門正克・小野沢あかね 展望日本歴史二十一『民衆世界への問いかけ』東京堂出版、平成十三年九月

飯田佑子『『青鞥』という場——文学・ジェンダー・〈新しい女〉』森話社、平成十四年四月

氏家幹人・桜井由幾・谷本雅之・長野ひろ子編『日本近代国家の成立とジェンダー』柏書房、平成十五年十月

斎藤美奈子『モダンガール論』文芸春秋、平成十五年十二月

加藤秀一『〈恋愛結婚〉は何をもたらしたか』筑摩書房、平成十六年八月

稲垣恭子『女学校と女学生』中央公論新社、平成十九年二月

湯沢雍彦『大正期の家庭生活』クレス出版、平成二十年八月